

刀折



野田の城攻不
夜る笛声と
て信玄砲丸小
中り悩む 圖

年の是を正説とす原書に信玄詐謀を以て定盈を生捕しうべ城兵憤りて大に騒動す信玄是を静めんが爲出馬せしに松平與一郎足輕の輕部太郎兵衛黄帽子を目めてにして鉄砲を放つ其玉信玄が左の首より後の首骨へ打抜しに痛手なれば三月十六日信州にて死といふ甲陽の説に信玄野田の城攻るとて鉄砲にあたりて死るといふ敵方よりいひしむる虚説なりと口を極めて其非を辨じたりされど其説に信玄の者共が其舊主の事極めて張大よし虚飾する編多ければ悉く信玄がたし今姑く三説をこゝに附して考證に備ふ

濃州岩村軍付信玄卒去の事

同年三月十五日武田信玄病少しく快くありしかば美濃國遠山内匠助が岩村の城攻落し秋山伯耆を入置んと出軍す(原書に信玄三月十六日病死せしを其事を秘して勝頼名代とて岩村を攻しとするの誤之信玄卒去の四月十二日之此時に信玄出馬せしなり)信玄去年三方が原勝軍の後の足利義昭將軍の彌々信長を傾けんと所々に調義せられて偏へに信玄を頼まれんと朝倉淺井長嶋の一向宗も一味しければ伊勢國司北畠も此人々と同じく信玄のものと

へ使者を送られ早く御上洛有べし其時の軍船はいう程も國司より用意して三河吉田迄進上やべしとや送る其外上方筋の家々より信玄の上洛を勘る者多ければ信玄積年の宿志大望成就時を得たりと大に悦び今度のまづ岩村の城を不日に乗取て秋山伯耆に授け信長をさへしめ三河の吉田城を攻勝て刑部今切の近邊に馬場美濃に新城を取立させ小田原北條勢を一方も呼寄典廐か一條かを入置て徳川家を押ししめ伊勢國司より船を呼び長嶋にあらり直に上洛し將軍家を補佐し參内をとりげ天子をわきばさんて四海を併呑せんと思ひ立しぞ不敵なれ切も岩村の城主遠山内匠助の先に病死す其妻の織田殿の叔母なれば信長庶子御坊丸(源三郎勝長といふ是)を遠山の家督し家臣等其城を守りける然るに今度信玄に岩村の城を乗取られていかあふまじと信長自身一万余の人数を以て出馬せらるゝを馬場の八百の人数まで馳向ふ其猛威あたりがたくや有けん信長早々に軍を引かへせば馬場が属兵越中飛彈の人数岡部次郎右衛門が人数追討して引さがりたる從者廿七人討取ける翌十六日に秋山伯耆晴近が謀を以て遠山が一族家老七人を味方に引付織田殿よりの加勢三十五騎を討取遠山が寡婦を其身の妻とし遠山が家督を繼し御坊丸をば生捕て甲州へ送り人質とす信玄大に

悦び秋山が功を稱し岩村の城に置いて守らしむ（甲陽の説に信玄二月下旬又遠山が寡婦を秋山と定婚させ織田殿の子御坊を織田掃部同道して人質として遠上せりと記すの例の虚飾の言故前後不都合之）信玄の三州風來寺牛窪長澤邊迄三州を巡見し設樂郡宮崎に砦を築き信州の浦野兵部東美濃降參の國人共并山家三方の人数に守らせ鈴木彌兵衛伊奈の午谷玄蕃浪合備前駒場丹後孕石主水等に足助を守らしめ足助の下條伊豆（甲鑑伯耆）を岩村の守兵とし山縣三郎兵衛が一組より上野信濃駿河の勢を添へて吉田の城を攻させ典麻穴山梅雪四郎勝頼に徳川家を押ししめんと手配りを定め不日に吉田を是非乗取へしと令しける所信玄病氣再發し苦痛にたへず脈脈尋常ならぬ早々軍を返して信州午谷波合に入て旅舎にて病を養ひしが次第に重り四月十二日夜中口にはくさ出來俄に齒五六枚落しが其後殊更につかれ心地死ぬべく覺へければ譜代の家人共に我死とも三年か間は喪を秘すへしと命じ其外様々遺言し五十三歳を一期の夢として混合のよの間の露と消失たす（甲陽の説に信玄死に臨み遺言の事を委しくのせぬ其中に吾干戈を握り天下を縦横する事三十八年卷たる城を卷ほぐしたる事一度もなし味方の城を敵にとりまうれたる事一度もあし我宿願の天下は旗を立て

さとの儼おれども加様に死する上の結句上落し仕置を仕殘し半に死するよりの信玄存命ならん都へ登るべきに諸人の批判を請ん事こそ大慶おれたし信玄家康果報つよき者共と取合を始し故信玄早く命を締めしと覺へし天道果報をひきし上の天より信玄を殺し給ふことせしよしを記す是又彼の家の者共其誓主みづから死期を知り且天命を安じ死よ至て亂れさるといふ虚飾の説と知られたり）筑手の奥平道玄其子美作守貞能始め徳川家へ歸順しけるが近來信玄に攻られ力不及信玄に降參せしうども本意あらず時を待つて徳川家へ歸參の志有ければ此節信玄が病死の趣を内々徳川家へ注進す神君の信玄が死誠ありと聞召信玄が如く弓矢を取廻す者昔も今も有がたし我若年の頃より信玄が如く弓矢を取たしと思ひたり敵あがらも信玄が死の悦事にあらずあしむべき事と仰られければ聞人御寛仁に服し御家人下々迄信玄が死の惜むべしと御真似をいたせしとす（基業甲鑑）

信康君初陣付徳川勢拔三武田五城一事

同年三月岡崎次郎三郎信康君今年十五歳にあらせ給へば御甲冑始あり能見の松平次郎右衛門重吉のふるつばものおれに介錯仰付られ面目を施と然れば御初陣の御出馬あるべしと

て田嶺の内武節(伏地伏地)の城を攻給ふ此城より菅沼形部貞吉が家人共守りけるが御旗先
 を見るより早く城兵落失しうへ直に足助の城へ御旗を進め給へば此城兵も忽に逃去れ
 御初陣に二ヶ城まで攻落され目出度とて供奉の御家人下々迄悉くさへめき合て岡崎へ御
 歸城あり(成績基業には鈴木兵庫足助の城を三州宇理の熊谷某一揆を催し攻取ければ信康
 君を將とし足助城を攻取て兵庫に賜ふとあり編年には鈴木彌兵衛が城を攻取て鈴木越後重
 直同喜三郎重時に舊地を賜ひ鈴木黨足助へ後住すと記すいづれり是あるや其頃信玄へ降
 参して嚮導とありし徒を捨置べきにあらすとて平岩七之助親吉を將として先遠州周知郡天
 方の城を攻給ふ此城の天方(本氏山内)山城守通綱が居城なり先に久野三郎左衛門宗能がた
 めに放逐せられたる一族彈正宗政もこゝに立籠りたり此城修築完固あらざる所平岩押寄攻
 ければ彈正の究竟の城兵を引つれ大手の門より切て出散々に戦ふ寄手の大久保新十郎忠隣
 渡邊半十郎政綱同半藏守綱先登して烈しく攻遠州先方衆争ひ進んで終に外郭を攻破り本丸
 を攻めこむ事三日城主山城守彈正力を盡して防戦すれども兎角うなひ難しと相談し山城守
 の再び降参し彈正は甲州に逃去城の直に親吉乘取て其首濱松に注進すまた三州可久輪の城

石川日向守家成久野三郎左衛門宗能を將として攻め給ふ城兵しばしの防戦しけれども
 遂に戦負て將卒みな討とらる酒井左衛門尉忠次角屋村に向ひ火を放ち直に進んで鳳來寺
 の城を攻む(編年にい風來寺城攻を天正二年とす大成記原書今年三月に係る基業にこの
 ようかいて二年とするの誤りとす又松平次郎三郎詔俊自身鎗を合せ御感書を賜ふとす)城兵
 戦ひるあらず城を捨て逃去ければ是に聞怖して六笠一宮の城兵もこらへ兼て潰散しければ
 濱松勢の僅の間に信玄が兵を留置たる城々五ヶ所迄攻抜て凱哥を奏して歸陣せり(基業編
 年)

義昭將軍没落 朝倉滅亡の事

足利將軍義昭卿の近年織田殿威權天下を併せらるゝに及びしを心ならず妬み惡む事止時な
 し朝倉淺井に調義し伊勢國司北畠家甲斐の武田越後の上杉相州の北條等に御教書を下され
 密使を遣ひし畷山の大衆本願寺の門徒をかたらひ西國三好黨と牒し合されけるが去年より
 信玄三連の軍に勝利を得たると聞大に悦び既に成就せりと俄に江州堅田浮御堂に要害をう
 まへ入敷を籠め置ぬ織田殿うくと聞るゝと直に柴田修理亮勝家丹羽五郎左衛門長秀明智十

兵衛光秀峰屋兵庫頭賴隆に命じ二月廿日瀬田より志賀の湖水を渡り石山の砦に攻め入る此
 砦に山岡備前守景友伊賀甲賀の徒を引連れて守るといへども其砦營築いまだ成就半にして
 守兵も少ければ景友防戦かなひ難く忽に降参す明智の眞先かけて堅田を攻め丹羽降屋の異
 より乾に向ひ攻破り明智の阪本は残り留る柴田峰屋丹羽に軍を歸す織田殿の三月廿五日
 大軍を引卒し京都をさして攻登らるれば細川兵部大輔藤孝荒木信濃守大津に來り謁す藤孝
 の最初より義昭卿信長を失ふべしと思召立給ふと然るへからずと諫めし事度々に及べども
 將軍其諫を用ひ給へぬべしに參り織田殿を迎へ打つれて上洛す織田殿入洛あつて東山智
 恵院に着陣あり軍勢の白川粟田口より鳥羽竹田邊迄充滿す四月四日上京を放火し二條の御
 所近く押寄たり將軍大に驚き恐れ御和睦の事仰られしかば信長も仰にしがひ軍を返すに
 て柴田丹羽佐久間等をして佐々木右衛門佐義彌が餘江の城を攻させ又軍船若干作らしむ是
 將軍の御中直りの事誠ならずと思ひ給へば近々又出陣あらん時湖水を早く渡らん爲の用意
 とぞ知られける義昭卿程よく軍をもちし給ひ七月三日日野大納言輝資高倉宰相永相伊勢伊
 勢守三洲大和守等に二條の御所を其身の宇治槇の嶋へ立籠り給ふ織田殿の此事を聞とひと

もく岐阜を出馬せられ同月六日入洛して二條の御所に押寄らるれば日野大納言高倉宰相伊
 勢三洲等の敵しがたく忽に降参す七日(織田眞記に)十六日としるす今編年による(宇治
 槇嶋に押寄らる梶川彌三郎高盛一番に先登して宇治川を渡り越す稻葉丹羽佐久間等の大軍
 追ひまきて平等院の西北より争ひすゝめ義昭卿一城に討負給ひ普賢寺に逃入て命をばゆ
 るし給へど請給ふ織田殿もさすがに足利殿誅しまいらするにも忍べれず木下藤吉郎秀吉に
 命じ三好左京大夫義次が居城若江の城へ送りまいらせける若江の城の阿州之仰義昭かく二
 渡迄信長うしなふべしと結構ありしうども何のつゝがもなく都を開き給ひし事内々は細川
 藤孝信長方に隨ひてよくこしらへし故とぞ聞へける義昭後より毛利家を頼み西國の方に漂
 泊せられ足利二百三十四年の社稷此時より失われけるこそはうあけれ織田殿の槇嶋要害をば
 細川六郎昭元に守らしめ其身の京都へ引返さる義昭卿の御味方として叡山麓一乗寺に籠り
 七渡邊宮内少輔磯貝久次山本和之の降参し淀城に籠りし岩成主税助左道番頭大炊頭諏訪飛
 騨守等も細川藤孝に攻られ藤孝が家人下津權内岩成を討取番頭諏訪兩人の降参し攝州芥川
 に籠りし和田伊賀守惟政をば荒木攝津守村重其城を攻て中川瀬兵衛清秀惟政を討取る(惟

政が第八郎惟貞の後年召出され御家人と成る。同國伊丹兵庫頭親興も織田殿の爲に攻むる八月四日都の政事沙汰も終りて織田殿の岐阜へ歸城有し所に同月八日淺井が被官阿閉淡路守内應せんとすにより織田殿江北へ出馬し給ふ其夜淺井が軍士を籠置たる月う瀬の城の守兵皆逃去たり同月十日織田殿の佐久間柴田の兩將に大軍を添て大嶽(眞記大權原書大築)の北山田山へ陣を張近江と越前の道を取切後詰させしと設けらる朝倉左衛門督義景是を聞て江北の通路を敵に取切られていかなふまじと朝倉の軍勢二万人を差向て與吾木本田邊山邊に陣取し淺井を助んと織田殿かくと聞給ひ稻葉伊豫守も人数を差添高月の郷に張出し朝倉勢に對陣す是より先き大嶽のもとと燒尾といふ砦あり爰に淺井が家人淺見對馬守を籠置しが此淺見もいつしか織田殿に内通し十二日の夜大風雨に時節を得て織田勢を引入れければ信長の喜大方ならず其夜直に淺見を案内として大嶽の城を攻させらる此城に朝倉の齋藤刑部少輔小林彦六左衛門西方院を籠置しが此輩も寄手大軍に恐れ早速に降参すれば織田勢直に丁野の城に押寄たり此城に中嶋宗左衛門平泉寺玉泉坊資光院等七百人計りの人数にて籠りしが是を攻んと寄手大勢取かゝるを見て此徒も忽に城を明て逃去ぬ左衛門

督義景去頃より今度の淺井が一大事あればとて自身加勢の爲に出馬し江州柳瀬に陣し夫より田神山に陣取てひかへしが大嶽丁野も皆敵に攻取られしと聞大に驚き十三日の子刻に陣營を自燒して逃去用意をなす信長兼てかく有べしと察せられ再三先手の諸將に觸流し今夜必定義景逃去べし歸路を遮て義景を討取べしと命せられ義景が陣營自燒の煙を見て信長馬廻の小姓計にて自身馬に鞭打て追掛らる先手の諸將の由斷して遅参しけれども前田又左衛門佐々内藏助等五百餘騎馳進んで敵を追討す其時兼松又四郎跳足にて働くを信長見給ひ其身着給ひたる足半(短鞋ともいふ)ぬぎて又四郎に下され我若年の頃より常に此足半を以て力の鞘に附て戰場に望ますといふ事あり依て汝が今日の勞を助るると仰ければ聞者織田殿の士を愛し給ふ事の厚を感じたり義景に従ふ將士朝倉治部少輔同掃部助同權次同土佐守三段崎六郎河合安藝守引壇六郎三郎をはじめ究竟の勇士討死し織田方に討取首三千餘級とぞ聞へたり其中に前に美濃國領主齋藤右兵衛太夫龍興の先年領國を信長に攻取られしより身の置所なくゆかりあればとて越前へ高客となり義景に養はれしが今度の軍に同じく從ひ進發し此輩と同じ枕に討死しけることを哀され山崎長門守吉家記美越前守も後殿し奮戦

して討れ義景主従四五騎に打なされ辛き命助かりてやうく越前一乗谷へ退きける信長大軍引つゝ十四日に越前敦賀の津迄着陣おれり越前の城々も風を臨んで逃落たり義景が従兵の多半落失て一乗谷にもたまりかねて一族式部大輔景鏡が大野郡亥山の城へ志し女直部迄打つれておもむき東雲寺に着しに一族三郎景胤孫三郎景健魚住備後守も敵に降参し頼み思ふ平泉寺の衆徒も敵とあり頼む木ウげに雨もりて一身のよせん方なき運命の拙きを天に欺く外なしかゝる所よ式部大輔景鏡も敵に内通するよし聞ゆれば大野の城にも入がたぐ山田の庄六坊へ妻子もろも跡を隠し息を屏て隠れ居たり信長の敦賀表に三日滞留し今度の必ず越前一圓に平均せんとばかり給ひ十八日に府中龍門寺に着陣せられ柴田修理亮氏家左京亮伊賀守稻葉伊豫守等に手分して義景の在家を捜さしむ平泉寺の衆徒の先年朝倉に去たぐひ織田殿へ敵したる罪を恐れ今度の早速降参して義景が隠れ家を尋出し注進すべしと申ければ其罪を赦さる伊豫守の里民に金銀を授け案内させ六坊に至り大野の城へ使を遣ひし義景六坊に隠栖のよし告る者あり式部太輔早速に降参し義景が首を討て出さば恩賞并本領望のまゝたるべし若又其事かなはずとあらば今より忽に大野の城へ押寄式部大輔

を伐亡すべしと申遣ひす景鏡も織田方被竹の勢を恐れ早速領掌せり平野中道寺の天命倫理を申述て諫めしかども景鏡少しも川ひず利のために義を捨て六坊に押寄鬨を揚れば平泉寺の衆徒も同じく押寄て義景に切腹せよとぞすゝめける義景今の逃れぬ所と覺悟して従者十人計に防矢射させ心しつうに腹切て四十一歳を一期として死ぬ近臣高橋甚三郎介錯し其身も自害し鳥居兵庫等十人計此所まで付従ひし者共の大聲に景鏡が不臣大逆を罵りながら思ひくゝに腹切て殉死せり稻葉伊豫守の義景が首持参して實檢に入しに信長悦ぶ事斜からず長谷川宗仁に命じ義景が首を京都に遣ひし獄門に梟られしうば京都にて貴賤見る者去頃足利殿より網代興を御免あり威光をかゝりやかし北越の藩鎮として數世武名をかゝりやせしも有爲轉變の習こそ哀しけれと落涙する者多かりしとぞ義景男子愛王丸母上北方迄も誅せられ織田殿思ふまゝに越前平均せられ降人前波播摩守長俊に假の守護を命じ置今の此勢に乗じ江北征伐を急ぐべしとて織田殿廿六日大軍を歸されぬ(織田真記編年家譜)

淺井滅亡 付 險江長嶋軍の事

同年八月廿六日に織田殿江北へ軍を歸され虎御前山に陣せらる淺井が小谷の城より曲輪三

少所あり一の曲輪の下野守久政が居所とし一の曲輪の備前守長政が居所中の曲輪の老臣共の守る所是を京極津武羅といふ(京極高華利角齋入道と稱せし中九京極丸といふあり)木下藤吉郎秀吉中の曲輪に籠る老臣どもに訓義してあゝを攻取大勢籠置下野守備前守父子往來の通路を塞ぎ下野守を攻しりバ父子互に加勢する事もあらず城兵の追々落去りぬ頼に思ひし朝倉の先立て亡びたり下野守久政力盡て自殺しければ淺井福壽院貞政千田采女正等も腹を切久政年頃寵愛したる猿樂松太夫も同じく籠城し歴々と切腹しけるも哀なる久政が曲輪の既に落去せしうども備前守の中の丸を敵に取切られたれば父既に自害せしとも知らず花々しく討て出討死せんと用意して待けり長政北方の織田殿御女なれば其腹に設られし女子三人添て信長の陣營に送り歸し今の心清しとて少しも氣を屈せず九月朔日信長中の丸迄大軍を進めて長政が曲輪を稻麻竹葦の如くに攻圍まる長政の此時父久政既に自害せしと聞て扱ひ思ひ置事あしと城門押開き切て出度々大敵を追まくり勇をふるふといへども寄手の大軍新入替へ攻寄る城兵のいとい小勢のうへに次第々々に落失たまく残る者の討死し頼切たる譜代恩顧の徒も敵と成る者多ければ今は是迄と小谷城下赤尾美作守宅に引

取て近習の輩に防矢射させて心閑に切腹す時に二十九歳淺井が家の三條大納言公綱より出たり公綱が子江州淺井郡にて人と成り新左衛門重政と言淺井郡丁野村の三條家の所領なれば公綱卿其地にさすらへられと頃設られし子之後に江北京極中務少輔持清が扶助を蒙り終に京極が家人と成る其子新左衛門忠政其子新次郎賢政が二男新三郎亮政京極が家人上坂治部太夫泰貞に近侍しけるが亮政軍器たぐましく終に江北を切あひけ其子久政其子長政の亮政にもあどらぬ勇將にてつひもの共のなびけ順ふ事父久政にまさり十六歳より軍して終に一度も不覺なく最期のきい迄潔しと敵も味方も感じをしまぬ者のなかりけり淺井縫殿同新七郎木村太郎次郎同小四郎中嶋九郎次郎同彌兵衛同與三郎脇坂助四郎同甚助など皆打て出思ふまゝに戰て討死す淺井石見守赤尾美作守の生捕と成りて首を刎らる木下藤吉郎秀吉の今度の軍功拔群とて淺井郡犬上郡坂田郡半分添て廿二万石賜り磯野丹波守も新庄六万石阿蘭淡路守に山本山二万五千石堀次郎幼年なれば家人樋口三郎兵衛に坂田郡半分六万石をあたへ織田殿同月四日柴田勝家に命じ同國鯉江の城を攻しむれば城主佐々木右衛門佐義弼一戦にも不及城を開て退散す其頃磯野丹波守の杉谷善住坊といふ僧を捕て織田殿の御

陣へ獻す此者の元龜元年織田殿金崎の退口に佐々木承禎に頼まれ千種越にて鉄砲を打掛し賊之依て土中に埋め置き竹鋸にて首を切て苦痛せしめしが七日をへて死けるも織田殿の廿四日北伊勢へ發向し長嶋の一揆を攻て別所片岡兩城を攻落し軍をかへされし十月廿五日其日烈風甚雨途中の高山深樹生茂りたる所ゆへ諸軍引取兼しに長嶋の一揆も折をすて再び集り引く勢を喰留んと弓鉄砲を雨の如く發して攻戦へ織田勢備を亂し散々に敗走し討る者若干あり織田殿林新二郎に汝後殿せよと命ぜらる新二郎手勢計り群がる一揆原の中に割て入奮戦し主從残らず討死す其間に諸軍の事故あく引取て織田殿十月廿六日岐阜城に歸り給ひ新二郎が忠死をうしまれける(淺井系圖家譜編年織田真記)

正校 三河後風土記卷第十三 終

正校 三河後風土記卷第十四

三州長篠城攻 武田勢加勢の事

天正元年の六月武田四郎勝頼の父信玄遺言によりて信玄の喪を深く秘して三年が間の病氣と披露し兼て定めし事なれば武田の家督の勝頼の子太郎信勝に相續させ其身の後見として軍國の政事を沙汰しけるが馬場美濃守高坂彈正山縣三郎兵衛内藤修理亮を集め只今直に亡父信玄の志を繼て東美濃へ軍を出さんと思ふいかにと評定す馬場高坂山縣内藤等一同申けるの先君の御喪を三年が間のあしつゝみ三年過て葬禮を行ひ給ひ其上敵方より取掛るを御待有て然るべしもし夫迄にいはずともせめて一年が間の民を休め兵を養はれいで御尤もよいと諫む其時長坂左衛門入道釣閑跡部大炊助信元進出て我等の御屋形様御意と家老衆分別との間を取て考い御道國信濃駿河三河上野遠江五ヶ國の人数を休め甲州勢計りを二手よ分て山縣三郎兵衛を先手として穴山梅雪逍遙軒信綱(一説信連)一條右衛門太夫信龍を大將として遠州に働かせ給ふべし又此頃徳川家長篠を取詰たるよし聞ゆれば一手の馬場美濃守を先手とし典庵信豊小山田兵衛を大將とし長篠の後詰に御手遣おされ御尤もい

とすけり此長坂と跡部の信玄の時によりて登庸もせられざりしが信玄が死せし後より此
 兩人勝頼が血氣の勇に媚諂ひしきりに強暴の諫をせず勝頼大に悦び今の無二の出頭人と
 成り寵任しければかゝる軍議して古老の家臣共を差置てかく合戦の手配までを計らひけり
 勝頼是を尤も同意し國中へ其旨觸しかど甲州に信玄が死せしより士民一統何とぞ
 力を落し心臆しはうともしき事の有まじく見へにけり徳川家の方に此六月中三股の城の
 押として屋城山(編年社山)江臺寺島二ヶ所に向城を築らしめ兵を籠置給ひ神君軍勢引具
 給ひ七月十九日長篠の城を攻うこみ給ふ城主菅沼新九郎正貞甲州よりの加勢の室賀一葉軒
 小泉源三郎吉田左馬助しづまりかへつて音もせず寄手あやしみ火箭を度々射入しに其火二
 丸に燃付折ふし南風強く火勢烈しくなり三丸とくく焼立ければ城中將卒防ぎ兼て本丸に
 入て嚴しく防ぎ戦へばかくても此城急に陥るまじきごとて神君の久間中山に向城を築うし
 め酒井左衛門尉に守らせ菅沼新八郎をも加勢として籠置れ一先濱松に御歸りあり長篠城よ
 りの濱松勢急に城を攻るよし甲州に注進すれば四郎勝頼兼て議定せし如く加勢として馬場
 美濃守武田典麻小山田兵衛土屋右衛門等を三州へ發向せしむ依て馬場の二上山に陣し典麻

小山田土屋等は大道寺山岩代川邊に陣し久間山の向城に押寄て酒井左衛門尉菅沼新八郎と
 日々夜々に合戦す(基業編年甲鑑)

馬場小山田等退陣 長篠落城の事

甲州より長篠後詰に來りし馬場小山田の風來寺より二上山に屯じ典麻土屋の岩代川邊に屯
 じ久間山向城の兵と日夜戦ふよし聞へければ神君も重ねて濱松を御出馬有りて馬場小山田
 が備と對陣し給ふされども馬場美濃が屯せし二上山邊の地理きりめて險阻にして容易に御
 手をうけられがたければ足輕をうけて誘き引出して討ん事をはうりたまふ馬場も老練の宿
 將ゆへ卒爾に討て出ず依て謀を設て味方の陣に松葉を多く集め山のとくつみ重ね陣營を
 自燒して軍を歸す跡を見せ馬場が討て出ば引包んで討取べしと伏兵を三所に埋伏し一二の
 伏をやり過し三の伏兵起立ち其後を立切て討べしと謀を定め待給ふ然るに馬場功者の老
 將されば味方陣營の烟を見て焰の白く見ゆる陣拂の烟にわらず敵偽りの計を設け味方を
 引出し戦へんどの事なるべしとて嚴み制して兵を一人も出さしめず五騎三騎づゝ進み來る
 を味方の伏兵大におこり陣をわけて討てかゝるしかれども此伏兵あまり早く起立しかば甲

州勢早く馳抜て逃歸りしかば討るゝ者の少むされども甲州勢の長篠の後詰なし難きを知て諸軍を黒瀬迄引退く（原書此事を長篠落城後とす編年の説是なるが如しゆへに爰に改む）是の八月八日の事（編年）長篠籠城の甲州勢の兵糧も次第に乏しくなり兵士の彌疲れたる頼に思ふ後詰の馬場小山田等皆々黒瀬迄引返すども此城保ちがたしと評議し甲州より加番室賀一葉軒の本多平八郎忠勝にたより神君へ秘藏の大鷹一聯獻じ城を開て風來寺へ逃去る城主菅沼新九郎正貞の神君より牧野左馬允康成戸田三左衛門忠次を以て度々志を改め再度御味方へ参るべしと仰下さる一族彈正左衛門貞俊も此事頼にすゝめしかば正貞も得心しけれども一族伊豆満直とかく武田に順ふ志厚かりしかば正貞も志を決し兼て室賀と同心く風來寺へ赴き菅沼伊豆の小泉源三郎吉田左馬助と共に甲州へ逃去けり依て長篠城にの松平外記忠昌を籠置れぬこれ八月十五日也（基業にの九月八日とす編年實を改るに似たり今是に従ふ）

奥平歸參 窪山軍の事

長篠籠城の諸將みち城を開て逃去ければ典麻馬場小山田土屋等大に愁ひ憤り黒瀬の陣を退

て鑊手の城にうつり此城には甲州より加勢とて甘利左衛門晴吉を籠置たり依て甘利は本丸に住し城主奥平道文子美作守貞能孫九八郎等は外郭を住居とす此奥平元來豪族にして一類廣者なれば殊更神君にも頼母じきものと思召れ禮遇あつてもてなし給ひしが近年信玄がため手強く攻られて心あらずも武田方へ降参したるなり然るに信玄病死と聞て九八郎は徳川家へ歸參せんことを欲し祖父にも父にもすゝめたり（甲陽の説に此九八郎書をよみ易を好み卜筮をよくせり依て信玄が死を占筮して知と見ゆ）其頃神君よりも本多豊後守廣孝本多百助信俊を以て歸京すべき旨仰下されしかばいよく一族相計りて歸京の志を決したり典麻馬場小山田等甘利に會議しけるが我々今度長篠後詰のため當國に來りたる所長篠落城せしめ何の面目有つて國に歸り勝頼に申開くべきや詮する所今度徳川勢と有無の一戦し雌雄を決せずしてはかないがたし夫には徳川家吉川筋より濱松へ歸陣せらるべし其時味方股樂に出張し難所を前にめて、東西よりさし袂み討あらば味方勝利疑ひなしと評定す然るに段嶺の菅沼刑部が家臣城所道壽は奥平が内意を知つて典麻に此由注進す典麻へ黒瀬の陣營に歸り黒瀬へ奥平美作守を招寄て其實否を糺明しけるに美作守は少しも顔色變せずして夫は

敵よりいはいむる風説なるべし我聊も二心あはして談笑して少しも疑はしき様見はず其後基をかこみ飯をも食し歸らんとすれば典廐は疑解て味方の密謀を殘らず美作守にかたれば美作守其時我も築手より打出て是非軍功を勵みやべしと種々詞を巧にたばかりて難あぐ築手より立歸り黄昏に及んで武田勢の籠りたる本丸へ鉄炮を打ちかけ其身の一族男女武具兵具とりもたせ築手を立除たり本丸に籠りたる甲州勢大に驚き奥平逆心ありとて大勢追かくるを石筒金坂(大成記石堂)にて美濃守九八郎父子取て返し手勢わづかに二百騎を以て五百の武田勢を打破り一族男女全く岩崎山まで立退く兼て内通なし置ければ神君深溝の松平主殿助伊忠并本多豊後守廣孝其子彦二郎康重を迎ひとして遣はされ共に瀧山に至りけり神君の奥平父子より武田方密謀の趣を内通しければ御道を引替給ひ吉川方谷道を横合に御陣ありしにより武田方典廐馬場小山田甘利等が計策むなしくなりて後悔すれども其かひあし翌日の平岩七之助親吉内藤金二郎家長(後に彌次右衛門)援兵として奥平方へ遣はさる瀧山の砦の要害淺間に蝶壁も普請整はされ奥平父子加勢の諸將と共に濱松に参りたり武田勢の小山田甘利を始として奥平に出しぬかれたるを安からぬ事と思ひければ八月廿一日築

手の城より甲州勢五千餘騎を以て宮崎瀧山に向ひしむ奥平父子のかくと聞加勢の諸將の人数を合て五百餘騎に不足の小勢之瀧山の柵一重の要害ありといへども再び濱松より歸り來り瀧山の麓所々を燒拂ふ是は敵は足をためさせまじきが爲なり甲州勢奥平が小勢なるを知ての事されべしもみにもみ落さんと勇み進んで瀧山を攻登る奥平父子人数を山より麓に下し切所に敵を引付て鉄炮きびしく打ちかけさんくはに戦へば甲州勢立所に手負死人かさなり道へ切所よて狭し掛引自由ならず多勢の進退途を失ふを奥平父子の兵士田原坂まで追討す甲州勢のうちより奥平助次郎貞包等三度まで引返し戦て貞包始五十余人討れたり其時濱松より石川伯耆守敷正本多豊後守廣孝奥平を救はんと軍勢をさしむくれば築手城中よりも甲州勢赤羽根邊まで出張し迎へ討んどひしめく所石川本多等勇をふるつてかけ破れば此勢も散々に敗走す奥平父子是に氣を得て築手近邊まで押寄て甲州勢數多討取て嶋田の郷に火を放ち加勢の諸將と打つれ濱松へ歸り参る典廐をはじめ築手の城中にある人々甲州の方へかくと注進すれば勝頼は奥平美作守父子が事憤りに堪はず九八郎が妻は甲州に人質として出し置けるを疎にかけ又美作守貞能が末子千丸並一族藤兵衛貞治が女子典廐の方へ質として

出し置けるが是も同じく礫ハコツにかけしとぞ(藩譜の注に貞能が父道文が二男は武田に組すとありて二男を藤兵衛あるべしとせるせしは誤之道文が二男の甲州へ仕へしは源左衛門常勝といふ藤兵衛は三男にて此人は關ヶ原の戦は討死せしあり)奥平父子は爰こゝに於てます
く勝頼を怨讎えんしゆとなしけるなり(基業甲鑑編年)

遠州森郷軍 勝頼出陣の事

武田勝頼は長篠後詰の諸將典廐以下三河へ出軍する頃其手合のため武田逍遙軒信綱穴山梅雪山縣三郎兵衛昌景一條右衛門信龍等を遠州に出し所々放火侵掠せしめたり其將逍遙軒等は森郷に陣を張にけり神君此事聞召大須賀五郎左衛門康高榊原小平太康政本多平八郎忠勝本多作左衛門重次よ命じて遠州へむかひたる甲州勢追拂へて遣はされしに堀越といふ所にて逍遙軒勢と合戦を取結ひ逍遙軒の人数散々に切負て右往左往は敗走す是を見て山縣一條穴山等は鵜飼山梨邊に待て有しが早々二の手を持って盛返して戦はんとすれ共濱松勢の手早く追捨て引取けるを見てかひかく陣へ立戻る(甲陽の説に逍遙軒御心遠慮淺き故家康家老の本多作左衛門本多平八郎榊原小平太三頭に打負給ふ信立公御他界ゆへ武田の御備色

かはる本の是こと見へたり)九月十日夜に成りて逍遙軒山縣一條穴山等の諸將今度の軍度と勝利を失ひ長篠も落城せし上り此所長陣はりて詮なしと評定決し陣屋く紙旗を立並らべ置き深夜に甲州へ逃去ければ味方少く追討して甲州勢數十人討取た四郎勝頼の三遣に出す所の味方みち負軍して逃歸り長篠城も徳川家の御手に入しを聞てやすからぬ事と思ひ風來寺近邊の土人は金銀をわたへ一揆をおさへさせ夫を案内者として三遠を侵掠せんと調略すこゝに植村土佐守恭忠といふは風來寺の藥師の別當にて安養院法印アけるもの元龜三年三方が原の合戦に忠勤せしかば所領下され御家人に加へ給ひ土佐守と名のらしめらる此者一揆共の計策を聞出し早く濱松へ注進す依て渡邊半兵衛同黒右衛門等に其一揆誅伐すべしと仰付らる半兵衛黒右衛門謀をめぐらし其一揆の張本人ども擲取て濱松へ獻じければ大に御威にあづかりたり勝頼かゝるべしとは夢にも知らず一万五千の人数を引兵し九月十日遠州へ出陣し久野懸川に備て見付に陣し近村所々放火し天龍川の上瀬を渡り濱松の城を攻んとす然れども七月このかた甲州勢度々敗北し殊更頼みに思ふ一揆原の生捕と成り調儀を失ひければ軍議兎角二決せずこゝに濱松の城兵に池田喜兵衛とて博徒あり此者勝

頼の陣中へ馬を盗みに入て生捕れ勝頼の前に引出さる勝頼此虜に濱松城中の有様を問けるに城中武具兵糧充實するのみならず城兵皆大將の恩義になつき必死の精兵數多あり攻るも容易に攻取る事を得べからずと答しかば武田の軍士是を聞て將卒すべて色を失ふ勝頼の屋代山をへて山梨に出て須雲原に陣を張しが甲州の諸將兎角濱松は城堅く兵強く急に攻難し今度は早く御歸陣然るべしと諫むるにより勝頼軍を歸して二屢乾高明天方多々羅等の持城をも巡見し入坂の切通を過る時懸川城主石川日向守家成其屬兵味岡市平とて鉄炮の妙手あり此者をして勝頼をねらひ鉄炮にて討取んと計りけるが馬場美濃老練の功者故味岡を見出し生捕しむ(甲陽の説に馬場は信玄代より三十一年の間此心掛にて勝頼廿八才の若大將を失はずいと美濃はじめてほこりたりと見へき)味岡は直に誅に伏したり又馬盜に入たる池田はいかにしてか出奔し濱松に歸り此よしや上る依て罪をゆるされは感にあつかりしとぞ又勝頼は大軍はるく國境を越て功きく歸國するを恥て金谷臺に於て諏訪原古城を取立て此地に堅固の城を築くべしと細張を典廐信豊と馬場美濃に命ず高天神の小笠原與八郎は此城普請を妨げんと人数を押しければ勝頼も先手より兵を出し是を討んどひとめき

しに馬場爰は地の利を得ず此方大軍といへども勝がたしと諫め勝頼を甲州に歸陣せしむ高天神の兵も五六日を歴て取合なければ城へ引取たりさて此城普請成就せしかば室賀一葉軒入道小泉源三郎に軍勢多く添て籠置たり是は高天神城をおとしいれ城飼郡一圓に手に入んどの計畧なり(此一條森郷の軍は基業編年甲鑑によりて考正次勝頼出軍の條は原書編してしるさす甲鑑編手により補入す)

秀康卿誕生付母長勝院殿の事

天正二年甲戌正月五日には神君正五位下に叙し給ふ二月八日には二郎君生れ給ふ是を於義丸殿とす後に三河守にならせ給ひ越前の國を領せられし中納言秀康卿是なり母は三州池鯉鮒の人にて永見志摩守小野吉英が女(吉英池鯉鮒大明神の神主後村田意軒と號す)お方の周といふ神君の北方築山殿の方に見やつかへしけるかいつしかはいつくしみをうけて身おもくなりぬ築山殿の物ねたみふうくおはしければお方殿此事北方の御耳に入てうきめ見ん事を恐れひそかに御館を忍出て本多豊後守廣孝が家司本多半右衛門といへる伯母鯉鮒の家に行てしめりの事ありと告る半右衛門其由本多作左衛門重次に語りしかば重次迎取て介

抱はらむ其後君にもひそかよ上しがいかに宣のたまひしむや重次しげつぐが方に其儘養まかひかしのきて濱松城
 外有産見うらみといふ村にて生れ給ふかゝる事にてしむし御父子御對面ごたいめんもあつしむとす御子と
 も敬たがまへ給ひたりしが於義丸殿三歳の時御兄岡崎三郎信康君さまのよやとよくこらへ給ひ神
 君も御父子の御對面あり後より御子多き中にも殊更頼母ことさらたのりしく思召おもほれたりとぞ聞えし（一説
 にさ方殿懷妊くわいにんの事築山殿怒り給ひ赤裸あかばだにして城の木深所へ捨あかせられしに重次宿直して
 女の泣聲を聞て怪あやしみ尋來り此有様を見て事の故を聞糺し其いましめをとき件とこひ歸り家に
 介抱かいはうして此御子を産せまいらせしと云）後に秀康卿越前國賜たまはり給ひしかばさ方殿も越前
 におりしけるが秀康卿にあぐれ給ひし後かしらをちろし長勝院と號し歳七十三まであがら
 へて元和元年十二月六日福井にて終りをとり給ひ敦賀の孝顯寺こうけんじに葬はならる（以貴傳藩譜）

勝頼濃州軍の事

武田信玄入道さまに東美濃岩村の城を攻取秋山伯耆守を城代とし信州先方衆座光寺大嶋以
 下の衆しゅうすべて二百騎余さしそへて守らしむ秋山の兼々當城の先主遠山内匠助が寡婦くわふをあ
 さむき妻とせんと調議てうぎして當城を手に入し事なれば今のはや彼の寡婦と夫婦と成り遠山が

舊臣きゆうしんともい詮方せんかたかく秋山を主人とたのみ万事其下知を守りける此寡婦織田殿の爲に叔母
 之夫故に織田殿も又計畧けいりやくにや秋山今の叔母おしは御あり和睦して一家親族の好みを給ひんと種々
 かたらしいれしか共秋山の元來詐謀を以て孤兒寡婦を誘引いざないて當城を手に入れ城主御坊丸を甲
 州へ遣つかひし織田家の入質とし寡婦をばあのが妻とし當城にありて岐阜城を押たる事なれ
 ば織田殿方には元よりふかく怨み憤らるゝ事とは察さつしたる故織田殿の調儀てうぎにはのらず少し
 も返答へんたうせず故に織田殿益々憤りふかければ苗木香野申原馬籠瀬戸崎明智飯狭間等すべて十
 八ヶ所に砦とりでを設け美濃先方衆に織田殿手勢十騎十五騎計りを差添さしそへ岩村城の押へとせらる
 武田勝頼是を聞て長信に岩村を乗取のりとりては無念なりと甲州信州駿河三河上野の内分國の五
 州の軍勢三方八千余騎を引率し天正二年甲戌二月十三日遠州さして發向し十八ヶ所の砦とりで
 も片はじより攻落す既に明智砦に攻寄遠山與助を攻立る時に織田殿は城之助信忠父子にて
 六万余騎岐阜の城を出て後詰せんと發向せられ先手の兵を明智の向ひ鶴岡へ取乗る武田方
 には岐阜より後詰の押とて備たる山縣三郎兵衛昌景奇騎打備組とも都合六千の人数にて鶴
 田山の方かたよりばかりかゝるを見つければ信長早々下知せられたちまに其勢を引取んとす山

縣是を喰留んと競懸つて跡を慕ひ上道四里か程追かけて引取れば織田勢は上道八里跡へ下りたり明智には此跡を見て遠山與助力亦く砦を渡し引退く織田殿より籠置れし十六騎の輩其うち九騎は討死す勝頼猛威に乗じ信州衆をして飯狭間の砦に取詰たるに名和無理助并伊彌四右衛門五味與三兵衛をはじめ諸浪人勢勝頼代始の軍に一功を立んと精を勵し力を盡し働いて織田殿より警固に籠置し十四騎の輩は一人も殘不討取飯狭間右衛門信次は降参す(編年信次内通して遠山勘右衛門といふを退出すとして明智城の事とす甲陽の説によれば飯狭間の砦は別城にて其城名を苗字とする時は信次は飯狭間の城主たる事疑ふし且明智と飯狭間は寄手も別人にて甲陽の説尤つまひらかあるに似たり今是に従ふ) 勝頼飛鳥も落る程の猛威にて悦び勇て甲州へ引返す甲鑑編年)

遠州乾氣多軍付菅沼新城軍の事

同年四月六日神君の軍勢を引具せられ廟路を経て瑞雲と言所に屯し給ふ是の遠州周智郡乾の城主天野宮内右衛門景貫近年武田へ降参し敵の色を顯はしたれば是を攻給んとてのとなりしが折節甚雨降つゝき氣多川出水して堀内和田谷迄進みたり御先手の軍士も進み得ずと

かく日數ふるまゝに糧米用意乏しければ一先濱松へ御歸城あり雨の晴に及んで再度御出馬有るべしと軍議既に決しければ大久保七郎右衛門忠世水野惣兵衛を後服となされ軍を返し給ふ所に氣多村の百姓共忠義を志し御陣に來り乾城主天野の今日の御歸軍の時山中の細道にて一戦せんと唯今乾を出馬せりと進注す天野の敵險阻に陥る機を失ふべからずと軍勢を急がせ乾より三里の間を馳に馳て後陣の勢に喰付て挑みかゝれば大久保水野等始め氣多より大窪の間にて幾度か小返して喰付敵を追拂ふ此時榑山高明の城兵も田野大窪の村民と一同して討て出御旗本と後陣の間を取切て谷陰樹間より鉄炮を打かけ先へ廻り後へとりかけ日の目も見へぬ巖石の間道さへなき山中へ追詰て合戦すれば味方大久保勘七郎堀平十郎同小太郎彌服藤五郎小原金内を始究竟の輩二十四人討死せり大久保七郎右衛門水野惣兵衛自身鎗を振つて突戦す其時榑原小平太康政と名乗かけて横合より突てかゝれ伊東清水以下の者ども同じく勇をふるい突破る敵是に辟易して足を亂して敗走するを追討して敵の首三十級得れば大久保水野が手にも二十級得たり神君の早く三倉山まで引取たまひ後陣を待給ふ所へ諸將追々馳來りて見参すさて此所要害の地にあらざとて早々天方の城へ引取給ひ氣

多村の百姓どもへは御朱印賜りて忠義を褒せらる此冬に至り氣多村御退口の戦に忠死せし御家人どもへ遺領を給ふ所堀平十郎の敵二人討取て鉄砲にあたり三倉山入口にて落命せしうづとさら御憐深うりし子一人もなければ其父平右衛門入道に御書を賜はるいと有ぐたき御事

堀平十郎就討死依無遺領爲彼菩提安城之内限酌子堂之通南方有由緒抱之内之地結草巷置所之同所志之寺領爲不入出判形永諸役令免許畢至子々孫々不可有遺亂者也仍如件

天正三年甲戌十一月

家康御判

堀平右衛門入道殿

今の世迄も三州大樹寺の竹葉軒に平十郎が墓印残て西翁心光と言法諱をどいめけるこそ哀なれ是より先に菅沼新八郎定盈は野田城を去年信玄も渡しけれども甲州勢も引去ける然共元來野田の要害の地にあらず陣所淨古齋が舊地大野田に新城を築き住居せんと願ひ御ゆるを蒙り城普請して住居せり武田勝頼の東美濃の勝軍に益勝誇り心中大に驕慢し天下我が

猛威に越る者かと思ふ所長坂釣閑刑部大炊助等の佞臣迎合して其惡を助長しければ彌兵を用ひて息と更になかりけり五月廿八日又三州へ發向し菅沼新八郎が新城を攻落さんと濱松の押へに典麻馬場美濃保科彈正松岡清左衛門等を差向築手の菅沼刑部を案内者とし山縣三郎兵衛小笠原掃部助等を先手とし夜をこめて築手が新城へ大軍進んで出陣す案内の者築手の家人ども元より新八郎を攻殺すに不忍内々其事を告たり新城の壘壁もいまだ淺間あり人數も所々散じ居たり此小勢にて勝頼が大軍防がん事叶ふべからず早々立退給ふべしと家臣ども一同に諫めしかば新八郎も心ならず立退べきに定たりされども敵の山縣が大勢既に攻寄たりといふに新八郎悠然として圃にありて謠曲を謡ひ少しも屈せず唄ひ終り手水の湯を呼んで口をそそぎ手洗ひ寛々として馬に乗り南曲輪より出けるが又士卒に向ひ我が寐所に火をかけず秘藏の鷹を忘れたりと予ける小姓中山與六郎時に十六歳其畏りひとて城へ立歸り寐所へ火をうけ彼鷹を手に居て出けるが城外にて寄手と戦ひ討れけるぞおしむべき若者なれ山口五郎作の新八郎が人數の後殿して退けるが吉祥山の麓にて菅沼刑部余り近く追來れば返して刑部が勢と戦ひ力戦して討死す其際に新八郎は西郷の(西郷ととる本あり

誤れるに似たり)迄延たり勝頼山縣を先手として頻りに軍を進しに新八郎西郷孫九郎家貞と軍勢を合て諏訪を出張し大玉川に待むかへ矢炮きびしく發し寄手多く討取らうや山縣も軍を引返す是より勝頼の吉田二連木をへて遠州に入て鹽買坂を本陣として高天神を攻る用意を急ぎける(乾氣多の軍の基業編年甲鑑によりて改正す菅沼が戦の原書に更之諸書共に見へず今の編年によりて補入しぬ)

高天神落城付横須賀新築の事

武田勝頼の六月三日より諸手の軍勢を進て高天神城を攻かこむ(柏崎物語此城中山上に天神を祭るゆへかく名付く)城主小笠原與八郎長善(長忠氏儀)武功老練の宿將付従ふ九世三四郎廣官坂部又十郎正家木間八郎三郎丸毛修理池田坂平齋藤宗林永田太郎左衛門精屋善左衛門松下助左衛門曾根孫太夫渡邊金太夫木村長兵衛中山是非之助等皆是れ遠州にて一人當千の輩にてたてこもる大河内源三郎政房入道の軍奉行にて諸口をめぐり下知すれば山縣小笠原等の甲州勢も攻めくみてぞ見へにける木戸を開て突出れば寄手の散々敗走す其中にも駿州先手衆岡部丹波同次郎右衛門等の與八郎は今川家にて睦じき舊友なれば互よ名を取

て詞をわけ合て戦ひける與八郎より向坂牛之助光行を以て濱松の援兵を請奉る神君早速御出馬有べしとの御返答にて使を返し給ひ又小栗大六重道を岐阜へつうりされ織田殿へ加勢の事仰遣はさる信長聞給ひ勝頼足長に城洞郡迄出る事願ふ所の幸之城兵等何とぞ會釋し喰留て差置べし信長やがて出馬し徳川殿兩族にて勝頼を討亡し此後長く禍の根を斷べしと仰られ尾濃の人数二万餘催促し近日高天神後詰のため遠州發向すべしと觸渡さる濱松より此趣を城中へ通じ給へば與八郎も城兵も頼母敷思ひいよく矢砲を飛ばせ木石を投下しきびしく防戦す又折々の渡邊金太夫林平六吉原又兵衛伊達與物兵衛小池左近久世三四郎坂部又十郎等鎗を揃て突て出大勢を切なびく寄手も老練の甲州勢追つ追われつ合戦す城兵三十人討取れば寄手の二百五十人も打取らる水の手を取切らんと池の段の堤を切て落せども土井曲輪の水多くて城兵更に渴せず勝頼も織田徳川兩大將兩旗にて近日後詰有るとの事聞て其前早く攻落せと十八日に國安村迄旗本を進め中村又大文字の旗をしたて自身に戰場攻口に乘付てかけよ攻よと下知を加へ烈しく攻れば諸軍息をも附らず俄攻に攻んと穴山梅雪の乾の山手より人数をのぼせ山縣の大手より攻よせ内藤岡部の犬戻猿辰より攻入たり岡部

次郎右衛門并同治部同忠次郎其郎等朝比奈金兵衛猿辰の口を乗破り堀に取付押入れバ城兵鎗を並らべて突て出治部金兵衛の討れたりされども寄手竹東龜甲を付よせ猪垣を破ると見へしが城上より二重の釣堀切て落せば寄手先登の兵の微塵に碎りれ失ふける寄手是に辟易して引返す馬場山縣内藤等古老の者共勝頼を諫て中ける此城の形勢中々急に落べうらず其間に織田徳川兩旗にて後卷あるあらば寄手敗軍疑ひあし兼て聞傳ふる所與八郎剛勇のまり有て義操不足せり義心薄ければ必利欲深き者之元來原と小笠原兩人にて城東郡を押領せし所原の斷絶せしうべ與八郎一人にて其所を知行し近來今川と縁を結び其威をかり國中に權勢をふるひながら今川氏真が衰運に臨みいつう敵と成り徳川に隨從すかく節義知らぬ者かれの調議安うるべしとせし勝頼尤も同意し近邊の僧を使とし城内へ中遣りしける

與八郎が勇略聞しに越へ當時無雙の弓取なり然るに大軍にかこまれ日々夜々苦勞するも信長の表裏第一の姦人徳川の小身にて力足らず後詰を頼まるゝども頼母しうらずまた代々徳川が恩顧被官といふにもあらず此程の籠城防戦の苦辛にて一應の義理の濟たり此上は一身の安危をはかす子孫眷族の苦樂を思ひ早く勝頼に一味し城を開て降参あらば此城東郡に

引替て別に一万貫の地を授け其上籠城の諸士卒悉く木領安堵せしむべし此事さらに偽にあらざると頼母しく詞を懇懇にし又勝頼が誓詞に侍大將どもが誓詞を添て送りたり與八郎元來勇ありて義なければ濱松の加勢延引するを以て徳川殿我等が天王山姉川の忠功を水にせられしといふ者之とて怨み憤を合たる折節勝頼が利を持って誘引するを喜び敵と成り味方と成るも戦國の習ひ何ぞ小義よかゝり空しく家門を滅却すべきや早く勝頼に降参し後業を期すべきとて忽に降参す依て當城の武田方請取て横田甚五郎尹松等に在番せしめ與八郎に駿河不二郡鷲鶴栖にて一万貫の所領を授く此時渡邊金太夫中山是非之助齋藤宗林等與八郎と同じく武田へ降参すれば皆懸命の地をあたへ其中にも久世三四郎坂部又十郎等の義を守りて敵の降らず城を出て退散しおのゝ在所へ引取る此時世上にて甲州へ降り駿州へ赴く者を東退といひ遠州へ引取る久世坂部等の人々を西退とすけると大河内源三郎政局の勝頼一倍の所領を以て招けども義を守て降参せざれば勝頼怒て城中石獄の中へ押込其戸を鎖し置たり同十八日織田殿父子二万餘騎よて三州吉田迄着陣せらるされど與八郎はや降参のよしなれば神君の織田殿を迎へ給ひ與八郎云甲斐なく不義の降参したりと怒らせ

給ひ信長是迄出馬の勞を厚く謝し仰らる信長の勝頼とバく遠三は働くといへども徳川殿
 猛勇を以て押へ給ふゆへ信長の東顧の患なくして旗を中國に揚るの全く徳川殿合力扶助の
 故ありと厚く謝し給ひ又一兩年の遠州禾稼熟のよし承たり是の軍糧の用意とあし給ふべし
 とて黄金二袋進せらる其皮袋重く力士兩人よて漸々さへげ出しとぞ織田殿其夜の吉田城に
 宿り給ふ城主酒井左衛門尉忠次種々饗應し奉る織田殿忠次に真家の短刀を賜ひ織田殿父
 子廿一日岐阜へ歸り給(今年三月十八日信長の從三位宰相に轉せらる)神君も濱松に歸らせ
 給へば勝頼の七月に及び甲州へ歸りける高天神敵城となりければ神君八月二日に馬伏(眞
 虫院)塚の舊壘を新に修築せしめられ大須賀五郎左衛門康高をこゝに籠置高天神の押とな
 され城中より敵に降參せず遠州諸郷へ引取たる久世三四郎坂部又十郎鷲山傳八郎渥美源五
 郎算助太夫松下助左衛門福岡太郎八丹羽金十郎曾根孫太夫小笠原長左衛門大石新次郎門奈
 左近右衛門等の皆本領給はり康高が屬士とせられ康高に城洞郡一圓を賜はりける康高此
 時より城洞郡を城東と改め馬伏塚を改めて横須賀の城と稱し横須賀三社大明神を再興し神
 田二十石を附たり此地の古昔熊野の神領ありし地ゆへ大寶の昔より熊野をうつし祭りし御

社なりとぞ聞えし(基業甲斐編年)

勝頼天龍川陣付進退軒敷雪齋の事

九月に武田勝頼其身の猛勇に誇り跡部長坂が倭辨を用ひ又今度の濱松を攻取んと殊更強
 悍の精兵二万騎を催促し遠州へ發向す折節連日大雨降つゝきたれば天龍川水漲りて渡ると
 を得ざれば川岸に屯せり(原書天正三年三月とす大成記御年譜并家忠日記によりてこゝに
 改めたり)濱松より大物見として大久保七郎右衛門同治右衛門鳥居彦右衛門植村庄右衛
 門内藤半左衛門同四郎左衛門村上彌右衛門日下部兵右衛門加藤喜助山本帶刀服部半藏本多
 本八郎青山藤七郎阿部善九郎高木九助柳原隼之助柴田七九郎天野傳六郎小栗仁右衛門梶金
 平酒井與四郎滋野七兵衛都筑平右衛門松下嘉兵衛わづかに貳百騎を差向らる此輩敵の大
 軍川岸に屯じたるを見て敵川を渡るあらば其半は渡る所を討んと河原表に馬の懸場を殘じ
 て扣へたり勝頼此形勢を見て佐藤一甫齋(伊豫の河野鹿流)名を得たる鉄砲の妙手なれば此
 者に命じ川を隔て鉄砲を打ちめしに川端遙に達りければ時間を見損じけるにや其玉向の
 岸よりうす川面三分二とへて河中に落たり濱松勢の中に早雄の若者ども大音揚て武田の

軍勢の敵を打すべを知らざるや河中を打り河泊水神の咎めあるべきぞと嘲り胡篋空穂を敵
 よ閉ゆる程たゞき立て笑われたるを勝頼大に怒り急ぶ川を渡らんと身をもめども河水流れ
 早き事矢を射るが如く之淺瀬の知らず諸軍見つころひ居たる所に四五丁下に廣瀬あり水淀
 み流れて渡らば渡るべく見へしかば板垣彌次郎信通が勢の中より宇野武井村金右衛門平原
 新藏河野傳左衛門只五騎群を抽て馬を颯と乗入たり是を見て濱松勢より阿部善九郎鳥居彦
 右衛門大久保七郎右衛門同治右衛門等嚮をならべてかけ向ふ板垣勢うなひじとや思ひけん
 馬を乗戻す其時甲州方朝比奈駿河守氏秀が陣より首藤左衛門石原五郎作長谷川左近三騎馬
 を颯と打入て浮ぬ沈ぬちよがせたり勝頼是を見て彼者ども必死の心掛と見へたり彼等を
 討せて恥辱と自身采配取て下知す土屋惣藏昌恒時に十九歳勝頼に並び進んで馬を打入
 たふ是を見て馬場山縣を始め二万余の甲州勢一度に乗入る小笠原與八郎が武田家に降参し
 て始の取なれば殊更眞先うけて中瀬を渡り波を蹴立て岸近く乗寄たりこのとき神君も濱松
 より御山馬あつて天龍川へ向ひ給ふ所に勝頼が大文字の旗を御覽じ七千余兵を分て御自身
 四千余兵を具して小天龍に備給ひ酒井左衛門尉石川伯耆守松井左近忠次等に三千余兵を添

て下流に備へしめ合戦の最中に横鎗を入んどひかへたり此跡を見て勝頼敵に謀ありと見
 へたり軍を班すべしと山縣三郎兵衛小笠原與八郎を後殿とし諸軍を乗もどさせ物分れして
 池田の郷に引入是より二股の城井伊谷邊を巡見し信州伊奈へ馬を納む其頃北條氏政の信玄
 死去の風聞おれども虚實分明ならずもし信玄が死去實あらば勝頼猛勇なりとも終は織田徳
 川の爲に攻亡さるべししうらば此方も早く甲州と手切し織田徳川と一味して甲州方の領内
 を手に入るゝ手立をなすべし虚實を篤と見定て参れと板部岡（後年秀吉公の命にて岡とあ
 らたむ）助成入道雪齋（柏崎物語）に命じ甲州へ遣ひす甲州には信玄が弟道遙軒信綱兄信玄
 が面色容貌よく似たれば面に紅をぬり（信玄常に紅を面にぬりしとぞ）黄帽子を着せ病中あ
 りとて寢所に屏風立廻し其中に臥させ夜中燈を設け江雪齋を呼入て其間を遠くへたて間
 はの家老共座をつらね居たり道遙軒いうにもなやましげに起あぐり少しく物語して歸せけ
 り江雪齋も智慧深き者おれども夜中燈影ほのくらし顔色も能似たり江雪齋實に信玄存生う
 たぐひなしとやにけり氏政も是を實ぞと思ひ甲州と手切の事延引せり（基業編年甲鑑）

遠歌會濫賜付井伊万千代登庸の事

天正三年乙亥正月十七日大野三郎兵衛康景召仕の婢女が夢に連歌の發句を見たり

信玄が首を今年のもちふなり

此女の片田舎の者なれば文字も書得ずまして歌連歌などいふとひさらけ聞も知らぬ身に
てかゝる夢想を得る事いたゞとにあらすいりさま是の年頃の御敵武田が滅亡する瑞夢なる
へしごとて康景此事を申上しうの神君聞召夢の天地神明の感應にて靈瑞をしめす事なきに
らずと仰られ正月廿日御具足開御祝の日に大濱道場の住持を始め連歌の聲を召て此句を發
句とし百韻の連歌興行し給ひける是今の世まで正月御連歌興行せらるる濫觴とぞ聞へける
慶安四年迄御具足御祝御連歌とも久しく正月廿日恆例あり大猷公御忌により十一月に改
じる

按るに御當家正月御連歌始の濫觴は神君御誕生前に贈大納言廣忠卿の御夢想に

神々の長きうき世を守るかないさ句を御感得ありて大濱の僧を召て連歌百韻興
行し給ひとにふとるといふ花下連歌者流に傳ふる所にて是なるが如し然れども大成記
成績譜編年等皆此時を濫觴とする故本文には記しぬ信玄が歌に

立並ぶ甲斐ころなけれ櫻花松に千年の色はならはて

又信玄死するの年の春高坂彈正夢想に

家光る山の松か枝千代の春

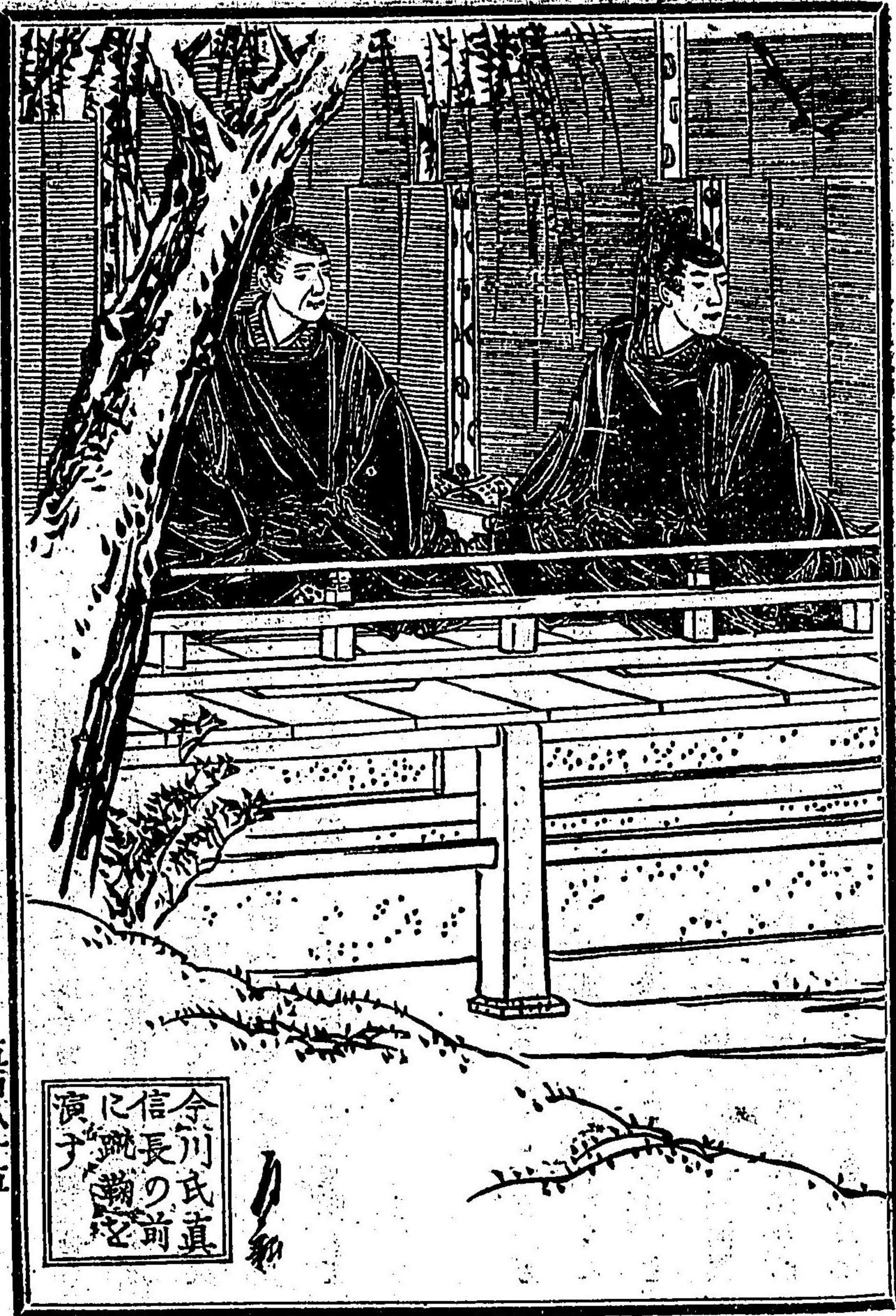
と見たりし事もあり國家興らんとする時は禰祥ありといへるたぐひにて皆是らばるげ
の事あらす

さて二月十五日神君其頃御鷹野に所々成らせ給ひし一人の童子容貌都雅ある者の御道の
側にあり召て何者の子ぞと尋給ひければ松下源太郎の子にていと答へ奉るさまも伶俐に見
へければ御歸城の後彼童子をまいらすべきよし仰下されしかば松下大に悦び早速に御城へ
同道す其童子万千代といひたり直に召出され近習につかへ奉る時に十五歳ありたい容貌美
麗なるのみにもあらず生得聰敏にして心忠直されば暫時も御膝下をはなれず御寵愛他にと
なりある時汝は松下が妻の連來りし子なりと申者あり實の由緒包まらずせと仰ありしかば
去る永祿三年今川殿桶狭間にて討死の時井伊信濃守直盛同所にて討死せしかば某が父肥後
守直親其跡嗣ていしか被官小野但馬と申者の讒言を今川氏真信用して父直親の永祿五年朝

比奈備中守りためし失われし其時某も討れすべきを新野左馬が情により漸ゆるされて二歳の時より左馬助養育を受し所又程もなく左馬助引間の城の戦に討死し其後の左馬助が妻のもと養われ五歳にさるまで罷在ししが氏真またいうなる讒言を聞給ひけん井伊が小兒を誅せよとて某を尋らる左馬助が叔父浄土宗の僧なりしかば左馬助が妻此僧を頼み某を出家させんとて僧のもと遣はし其僧が引具して他國に参りたりとて某を捜さる事先やみぬ然るに永祿十一年今川没落の砌りかの僧某を負て三州風來寺へ逃來りしがやがて新野が妻松下が家に迎へとらるゝに及び某も又呼とりて養ひければ某も今の松下が子の如くありしこと(井伊が家系ハ八の巻にわれしことハ略しぬ)神君聞召きてハ井伊が孤にて有けるか不便の者哉とて是より彌御いつくしみ厚く馴つかふまつりけるに誠にさるものゝ子にて尋常の人にまさり末頼母しき器用なりと思召ければ井伊が家の舊領井伊谷を二圓に取領に賜へり彼井伊谷三人衆近藤登之助秀川鈴木平兵衛重好(秀用が父康用ならびに重好が父重路此時既に死す)菅沼次郎右衛門定治其外木俣清左衛門守勝原治右衛門西郷藤左衛門等を万千代に附屬せられ万千代を守立べしと命せられける(成績藩譜)

奥平九八郎賜長篠城付氏真蹴鞠の事

長篠城ハ去年九月より御家人交替して勘番せしを今年二月廿八日奥平九八郎に下し給ふ是九八郎が最愛の妻をすて一族を離れ父美作守父子打つれおのが居城を出て御味方に参りし志一方ならず御感あり其賞尤輕かるべからずとての事なりとぞ今川氏真ハ此頃濱松にありて徳川家御扶助により月日を送りしが京都よりむつまじくかたらひかせし歌連歌の友達もわりければ徒然あぐさむかたもあるべしとや近日京攝津邊徘徊したりける所織田信長卿も折ふじ上洛せられ相國寺慈照院においしける氏真三月十六日信長卿旅館に参り拜謁し釣花瓶の百端帆と名付しを獻じ又先にも千鳥の香爐を獻ず是皆今川家重代の寶物とぞ同日にハ信長卿兼て氏真が蹴鞠進能の事を聞及び給ひければ今日御所望ありて三條大納言實枝卿(三光院といふ)を始とし飛鳥井鳥丸廣橋高倉庭田五辻等の月卿雲客と同じく招請せられ善盡し美盡したる響應尤盛筵なり其上よて此人々と同じく蹴鞠の場に列じたり飛鳥井其家のとされば信長卿を始め見物の諸人皆く感賞するのさるとにて氏真の進能飛鳥井にあどるべからず古今めづらしき鞠足なりとて信長卿も感老給ひ諸人聲をたつて稱歎せざ



今川氏真
信長の前
に演ず



るいなし事終りければ信長卿此人をへとり引出物せられしに氏真もあなじく纏頭せられ恩を謝して退出す其席より木下藤吉郎秀吉此跡を見て氏真父義元信長卿のために討れたれば信長卿の全く不共戴天の仇あり父の仇の前におもぬり詔て鞠を蹴て御覽にそあへ又引出物賜り心よげに御禮上る跡更に武士の心と見へずあの心ゆへにこそ先祖より傳へたる駿遠兩國を信立に奪へれ漂泊の身となり諸國を經廻り恥をさらす淺間とさよと爪弾して嘲りける(藩譜編年)

勝頼三州出張 大賀彌四郎の事

徳川家長篠の城を與平九八郎に賜りたる事武田勝頼聞て安からぬ事に思ひ四月五日又二万七千の人数を催し甲州を打立信州を歴て遠州平山を越へて三州八名郡宇理に着陣すこゝに徳川家に大賀彌四郎といふ者ありもとは御中間ありしが才覺ありて地方の事に達し算勘をよくし物毎には働きある者ゆへに地方賦税會計の方に用ひ給ふ所追々御用立ければ三河奥野廿余ヶ村の代官仰付られ濱松に有ながら岡崎へも時々参り信康君御用をも勤れば今は何方にても彌四郎なくては一日もかなはずと上下どもに用られ専ら出頭の人とぞありにけ

る此者追々奢侈につのりいつしか逆意を思ひ立今度勝頼三州へ出陣を幸と内通し兼々むつまじき朋友小谷甚左衛門倉地平左衛門山田八藏をかたらひ一味して連名の密書を勝頼に送りけるは勝頼設樂郡築手まで御馬をよせられ先手二三隊岡崎へ進め給はれ我偽て徳川殿の御出なりと呼はり岡崎の城門を開かしむべし其時御勢乗入に於ては三郎殿を弑せんに何の難き事あらん其上に岡崎には三遠兩州の人質を籠置給所なれば此人質を取給はれ三遠の諸士多くは皆御味方に参るべし然る時は徳川殿も濱松にたまり兼て尾州か勢州へ立のかるべし是勝頼又血ぬらずして三遠を手に入らるゝといふべきなりとの事なれば勝頼是を聞て大に悦び此事成就に於ては大賀は中に不及一味のものども迄所領十倍授け恩賞尤重かるべしと誓詞を授け勝頼は旗を築手にすゝめける然る所に叛賊與黨の中にて山田八藏重英忽ちに悪意をひるがへし利祿を貪り君に叛ん事大逆無道ありと後悔し急に此謀を信康君に告奉りもし疑あらば近臣を某が宅へ遣はさるべし其人をかしく置て我を共相談の跡を聞しめ給へとすける故信康君驚き給ひ近臣を八藏が宅へ遣はされ親せられければ八藏は彌四郎以下一味の者共を招きて其謀略を相談す近臣よく聞て立歸り委細ナ上げ

れば信康君より逐一濱松へ仰上らる依て大賀彌四郎をば岡崎町奉行大岡孫右衛門助宗承
 頼りて早々擲取大久保七郎右衛門忠世に命ぜられ大賀が妻子を五人念志原にて磔にかけ置
 彌四郎をば馬の三頭の方へ顔をむけ鞍に縛りつけ濱松中を引廻し念志原にて妻子等磔に
 かゝりし有様を見せ其後岡崎町口に生ながら土に埋め竹錐にて首を引切らしめられしよ
 七日に及びて死たりとぞ小谷甚左衛門渡邊半藏召捕んとて行向ひけるが逃出し天龍川を
 よぎ越して二股の城に入終に甲州に逃去たり倉地平左衛門の今村彦兵衛大岡傳藏討取ぬ山
 田八藏の御加恩ありて祿千石に成りぬるの今度の回忠の恩賞あり(原書に勝頼より大賀
 に風托して叛逆せしむるとするの誤り之基業編年によりて改定す又山田八藏重英の此後天
 正十六年岡崎にて喧嘩して討れたる故采地千石は收公せられ其子清太夫重次郎時に父の仇
 を討しうべ同十七年召出され追々戦功ありて又千石賜ひたり今の山田清太夫政親此子孫に
 て家祿七百石と成りし元祿の頃第へ分地せしが故也)

勝頼吉田軍 付長篠城一事

大賀彌四郎等が叛討既に露顯し誅に伏しけるよし聞へければ武田勝頼大に怒りたどひ此内

通を美たりとも功きくして空しく歸陣せんは我せざる所とて四月廿二日小山田高坂室賀小
 泉相木等の侍大將共に二千餘兵を添て長篠に向ひせ又向城所々に設て藁集山の武田兵庫二
 百五十餘兵山中山の浪人組七十餘兵君が伏床の和田兵部五百人焼が懐の三技勘解由左衛
 門三百五十餘兵久間山の和氣大戸倉賀野波合等二百人餘旗本の醫王寺山典庵の大道寺穴山
 の西川岸に備へ城中の粮道を取切たれば翼なくして通ひがたくぞ見へにける五月六日に
 勝頼旗本勢一万許を分て渥美郡二連木實飯郡牛窪を放火し摺尾の堰を切崩し東三河の用水
 を落し去て早損させ三州飢餓せしめんとこの悪計なり依て是を防ぎ給へんと神君吉田まで御
 出馬あり信康君の法藏寺に御陣を張給ふ吉田の城主酒井左衛門尉敵の大軍にて小山に登り
 戦ひを仕掛んとす味方小勢なれば城中へ引取守備を設て戦ひ然るべきにやと上る神君
 も御同慮ありて左衛門尉を後殿にし引取給ふ所山縣三郎兵衛が五組の人數追付喰留て戦ふ
 大津土左衛門左衛門尉と共に引返しく敵を追拂て難なく味方を城中へ引取ぬ翌七日に甲
 州勢吉田城を取かこむ左衛門尉城門押開き突て出山縣が厲兵廣瀬郷左衛門と鎧を合せ奮戦
 すると三度に及び山縣とも詞をうけ互に馬上にて鎧を合せ戦ふ土左衛門の敵三科傳右衛門

と決戦す(武田亡びし後廣瀬三科降参しければ井伊に属せられ廣瀬美濃三科肥前といふ)其
 時水野惣兵衛戸田左門渡邊半藏其外御旗本の勇士三十餘人突て出敵を追拂ふ寄手突立られ
 散々に敗走する中にも廣瀬郷左衛門登人馬を静々と乗廻り引取たる武者振り敵味方とも天
 晴の勇士かなど感ぜぬ者さうりけり(原書此戦を二月の事とす誤れり御年譜大成記家忠日
 記によりこゝに改む)爰に徳川家普代の士に小栗長三郎といふ者あり近年御勘氣を蒙り甲
 州に身を寄て居たりしかば勝頼此者を岡崎へ遣へし徳川家形勢を探らせけるに此者奮思を
 忘れやらす本多平八郎にたより御免だに蒙らば某反間を仕るべしと申平八郎其旨申上げ
 れば早速御前へ召出され御盃を賜り汝立歸りて勝頼へ申さんなり信長當時四方に手遣
 多くして長篠の加勢かないがたしとの事にて濱松の手勢のみみれば後詰の事思ひもよらず
 吉田を敵に取られぬ用心のみして長篠は是非なく捨殺にする内談ありと申す計を授
 け給ふ長篠の城に奥平九八郎が加勢として松平彌三郎伊昌(編年には松平彌九郎景忠と
 す景忠の伊昌が父あり三松録に此父子一所に籠城とす)松平又七郎家忠松平三郎次郎親俊
 等籠城し大軍にかこまれながらちつとも屈せず防戦す勝頼は小栗長三郎が反間の事を聞て

彌長篠を攻取れと晝夜を分ず攻立たり十一日に寄手二丸渡合口の門迄攻寄て乗破らんとす
 城兵切て出散々に戦へば寄手大に敗北して逃走る城兵寄手の攻具を奪い竹束を焼拂ふ勝頼
 大に怒り十三日夕方大手擲手一同に攻寄て力を盡し攻取ひ終ふ瓢丸を攻破る(柏崎物語吉
 田川の上白山の方より春日町の方へ岩代川流る上野の方より上野川流る兩川の落合上湯の
 方へ流る其落合に城あり扇の形岩代の形十八間程ふくべ丸百間程空地扇の峯の方一方向と
 わり)されども城兵防戦烈しく横矢しげく射立ければ寄手八百人計討れ引返す夜中寄手大
 手近く井櫻を上て城内を窺ひ金堀を入れて地道を鑿ちいらんとす松平彌九郎景忠討て出て寄
 手を散々に追散らす是より先織田家へ小栗大六を御使として加勢として出馬有べしと仰
 かはさる信長心得たりと返答ありながら出陣延引すれば奥平美作守石川伯耆守を以て仰遣
 はされしは早も出馬有べしとの返答有ながら兎角遅々に及べば神君後詰以前に九八郎討死
 させてはせんな上御手勢計りにて是非後詰あるべしと仰ければ老臣ども再三諫めやて又々
 小栗大六を岐阜につかはされしかば信長漸々十三日には岐阜城を打立れける(基業編年)
 按るよ信長卿此時諸將を集め長篠加勢是非いかにと評議有るに毛利河内は敵今度は大

軍なれば必定味方負たるべしは出馬は無用とて才佐久間右衛門は今度味方負軍は疑な
 しといへども是非は出馬然るべしといふ其意如何にと尋らるゝに今度は加勢なるゝ
 時は徳川終に甲州へ一味と成るべし徳川武田一味にて敵とならば當家甚危くありし
 夫故味方負軍を知りあぐら御加勢あくていりあふべからずとすければ信長卿は面
 き積りなりとて出陣に定られしといふ説あり又一説に小栗大六再應の御使に参りし
 時矢部善七郎を以てひろかに信長卿へすけるに徳川殿に最前の盟約を守り江州佐々
 木征伐若狭陣姉川の戦等身命を抛て織田殿の御爲に大功を立たり然る所今度舊約を
 違へ御加勢なきに於てい今より後武田に一味して兩旗を以て尾州を攻取べしとの事
 りとすければ信長卿聞給ひ大に驚き給ひ急に
 出馬ありしと二説孰か是なるや不知姑
 らく兩説を爰に附して後考に備へる者
 鳥居強右衛門忠死 武田軍議の事
 長祿城中にいたる後詰の沙汰もなく兵糧次第に乏しくあれは今は城兵皆打て山花々々
 呑戦とどげ有無の勝敗を決すべしと評定する所に九八郎が家人鳥居強右衛門藤高時に三

十六歳大剛無雙の者あるが某當城を忍び出岡崎へ参て城中の形勢を告て御加勢の事情すべ
 し尤書狀あらば敵に生捕られし時味方の虚實を敵も知らるべし某口上にてす述べし若敵に
 生捕らるゝとも書狀の証據さへなからんに幾度拷問に逢骨を碎くるゝとも白狀の仕べか
 らずと思ひ切ていへば九八郎然らば汝にす付べし汝岡崎へ参りやさんゝ城中矢玉不足せ
 しよもわらず城郭の完からざるにもわらず只兵糧や盡んとす早く後詰なからんには九八
 郎一人自殺し士卒の命も代るべしと存る旨をよくくすせと命じたり強右衛門畏りし只此
 大軍にうこまれ生捕となるまじきにわらず此難を忍び出ししに是より向の寒防が峠に
 烟を揚ては覽に入るべし又後詰いよく来るゝとあらば三日過て又彼時に烟を三度揚べし若
 後詰成がたしとの事ならば兩度揚すべしと十四日の夜に入て城を忍び出寒防か峯又烟を揚
 て城中へ難なく忍び出しを知らせ大敵の中をやうく身をもひそめて岡崎へ参る(基業よ
 は此時吉田へ参るとす)神君其す所を聞召織田殿はや牛窪迄御着陣あり汝牛窪へ参り此旨
 直に織田殿へすべしと仰ければ強右衛門牛窪へ参り信長卿へ直に此旨す上彌兩大將後詰
 の形勢見定て立歸り又寒防か峯にて三度烟を揚しかば城中には此烟を見て悦事限りなし

是は十六日の事ありて強右衛門はいかよもして城中に紛れ入んとせし所寄手嚴重に柵を
 結ひ砂を置き足跡を改め其上打かこむ敵軍其腰巾の甲州勢と違へるを以て終に見咎め大勢
 にて追詰穴山梅雪が屬兵河原彌六郎が爲に生捕られ勝頼の前に引來る勝頼子細を尋るに強
 右衛門某與平九八郎が郎等なりとて岡崎へ密使に趣きし旨少しもつゝまずければ勝頼聞
 て汝が一命を助くべし我に従ひ城近く參り城兵を呼び出し信長も徳川も當時諸方に軍を取
 結びたれば當城の後詰は思ひも寄らず此上は是非もあじ早く城を開き寄手に渡し各一命
 を助るべしと高聲に呼わるべし然らば汝恩祿をあたへ勝頼が家人とし追々重く用ゆべしと
 申けるに強右衛門大に喜べる顔色してかく生捕し上に一命を助給ふのみか恩祿たまはり直
 參に召仕はれ下さればいかで仰を背きすべき畏りいと答へけり勝頼大に悦び早速いまし
 めの繩をとき士卒五三人差添城をばへ遣はしける強右衛門城をばにて城兵の名を呼て織田
 徳川の兩大將七万餘の大軍にて一兩日中に後詰あり夫迄堅固に籠城すべしと高聲に呼われ
 ば差添て來りし士卒ともこのいかにと大に驚き俄に鳥居が口に手をあて手足を引張とも甲
 斐あじ勝頼たばかられたりと大に怒り強右衛門を荒海原に磔にかけたり此強右衛門はじ

め城中を忍び出るとき

我等さへの命にかはる玉の緒へ

なにいとひけん武士の道

と物に書付て出しとぞ兼て覺悟のほど哀ありし事ともあり(柏崎物語に鳥居が忍びし後鈴
 木金七不淨穴より忍び山岩代をあよぎて敵より掛あきし鳴子繩を切て吉田へ參り後詰急に
 仕かけて敗をとり給ふべからずと九八郎が上る口上をのべて城中へ立歸るとあり)是の
 十七日のとなりさて信長の當月十三日岐阜を打立給ふとて連歌興行せらる

松高くたけたくひさき朝哉

しろふの見へぬ卯花かきぬ

入月も山方うすく消はて

小田はさかりにあひく秋風

是武田調伏の心なるべし其後熱田に參詣せられ十五日牛窪に着陣十六日神君室川迄御出馬
 ありて信長卿出陣を謝し給ふ十七日信長野田に着陣せらる菅沼新八郎先に野田籠城の勞を

信長

久菴

紹巴

信長

稱せられ根小屋に着せらる武田方よの織田殿大軍にて後詰ありと聞へしうバ馬場美濃守山
 縣三郎兵衛内藤修理亮小山田兵衛原隼人以下古老の侍大將ども勝頼の前に出て諫ける
 大敵に逢ての隠れ遊の術をすると申事の先此度の甲州へ御歸陣して然るべく以前に長
 篠城有て攻れども落す後に織田徳川兩家七万餘の大軍を引受ていうて勝事を得べきや早
 々引取て敵の方より跡を暮ひ競ひかゝる其時信州まで引入て合戦をせば敵大軍なりとも味
 方打勝べし若強く戦へんどの思召ならバ長篠の城を俄攻にし味方手負死人をいどのはず無理
 無跡に乘取て屋形様の城にましく遣送軒等の御一族をバ後に備へ我々の先手にありて時
 々小迫合志て長陣に日敷を送らバ信長方に河内和泉の人数多し長陣かなはず引取るべき
 か夫ども万全の術にのわらず只今早々甲州へ引取給ふを以て上策とすべしと申時よ長坂釣
 閑跡部大炊介進み出て申新羅三郎殿より信玄入道殿迄御家廿七代敵を見て引退逃籠り
 給ふ事あり勝頼公にいたり始て敵に押付を見せて御國まで引籠り給へ武田の録曲りたり
 と天下後世批判も恥うし敵よりかゝるも味方よりかゝるも勝敗の天運なり何ぞ武田家瑕瑾
 を残し給へんといふ勝頼元來血氣の大將長坂跡部が申詞を大に悦び御旗無楯も照覽われ明

日是非一戦に勝敗を決すべしと申渡す此御旗無楯といふの御旗の八幡太郎義家朝臣の旗無
 楯の伊豫守頼義朝臣より新羅三郎義光へ給ひし鎧よて是皆武田傳來する所の寶物之武田に
 て此誓言を以て申出す詞の善惡ともひるがへさる古例されバ馬場山縣を始め古老の而々
 此上の力あり御説畏り奉りし我々も御馬先に於て死狂を致し御覽に入へしと苦笑ひ
 して銘々退出せり(武邊咄といふ書に信長佐久間右衛門謀をめぐらして長坂跡部へ賄賂を
 送り今度裏切して勝頼方へ降参せんと約したり長坂跡部是を信用し己等が功にせんと古老
 の者どもへの隠してときりに合戦を好み勝頼をいさめ戦をすめたりと見ゆ基業にも此説
 を用ゆ)馬場山縣をはじめ古老の侍大將ども此夜集會し屋形に長坂跡部等が古法も弁へ
 ざる無謀の詞を信用ありて我々が諫を少しも用給ひはず我々詮なき命ながらへて武田の
 滅亡せんを見ん事心うし今度の一戦に花々しく討死し信玄公數年の恩遇を黄泉の下に報ひ
 奉るべしと誓約して互に水盃をくみうし夜明るまで語り合ひ各別れて陣所へ歸りけ
 る(基業編年)

正校 三河後風土記卷第十四終

校正 二河後風土記卷第十五

織田徳川兩將軍讞付齋巢久間軍の事

天正三年乙亥五月十七日織田信長卿は設樂郷極樂寺山を本陣とせられ城之助信忠は矢部村天神山三助信雄御堂山に陣取らる神君は竹廣村の奥高松山の正樂寺に陣し給ひ信康君は草部村松尾鎮座の山に陣し給ふ織田家の先陣は瀧川伊豫守池田紀伊守水野遠藤安藤兄弟三好氏家三好宗三蒲生忠三郎木下藤吉郎瀧川左近將監丹羽五郎左衛門丹羽勘助不破河内徳山五兵衛佐久間右衛門尉明智十兵衛丹下備前柴田修理亮森庄藏稻葉伊豫守等を始とし五畿内若狭衆近江衆丹後衆其外寄合組都合十三段に備へたり徳川家の先陣大久保七郎右衛門同治右衛門松井左近松平主殿助菅沼小大膳松平玄蕃頭本多豊後守鳥居彦右衛門大須賀五郎左衛門本多作左衛門御前には内藤四郎左衛門植村出羽守本多平八郎柳原小平太次に信康君並石川伯耆守平岩七之助備ふ兩家の惣勢七万二千にて十八日には長篠近く押出す勝頼方にも都合一万五千余の人数を十三段に備ふ右の一番は馬場美濃守二番は眞田源太左衛門同兵部三番は土屋右衛門四番穴山梅雪五番一條左衛門太夫は明智が備に向ふ次に内藤修理安中左近和

田左衛門五廿永根白倉松木兵部等は消通軒を大將にて瀧川が備に向ふ三に山縣小笠原掃部助松岡三河守多峯小山田兵衛跡部大炊廿利三郎四郎小幡上總同左衛門助兄弟は典廩を大將にて徳川家御陣に向ふ四に勝頼の旗本は望月右近義勝を前備とし武田左衛門佐を後陣とし是も徳川家に向ふ五は武田兵庫頭信實を將とし三枝勘解山左衛門飲尾彌四右衛門五味與惣兵衛名和無理之助を齋巢山に殘し六に高坂源五郎昌貞小山田備中守室賀一葉軒相木市兵衛正朔四人の長篠城の押へどす此地左の鳳來寺右の飛巢山にて乘本川流れ出る鳳來寺山の根より瀧澤川北より流れ南にて乘本川に落合長篠城の南にあたり川より西に有荒海原へ三十町程張出す敵味方の間わづらに十二三町に過ぎ信長卿の岐阜出軍の時より一人毎に柵木と繩どを持せられしが今度神君と御相談ありて諸備への前に堀をうがち壘を作り柵を二重三重にかまへ下知なき間の柵の外へ出て戦ふべからず敵進み来らば鉄砲數千挺打立て討取べし足輕鉄砲にての敵を間近く引付て打立事覺束なし武功の輩をして鉄砲を打たしむべしと信長卿の佐々内藏助前田又左衛門塙九郎左衛門稻富平左衛門野々村三十郎等を隊長とし鉄砲をうけるく打べしと命ぜられ瀧川左近將監を木下藤吉郎丹羽五郎左衛門に添て先陣と

せらる徳川家も大久保七郎右衛門石川伯耆守鳥居彦右衛門本多平八郎内藤四郎左衛門平岩七之助大須賀五郎左衛門を先備とし鉄砲を以て敵を打すくめよと仰付らる廿日酒井左衛門尉忠次密に神君の御前に出て申ける勝頼の宗徒の侍大將どもを齋巢久間の要害に籠るよしに以某三河の人々を引具し此所より南へ廻り山路を傳へて齋巢久間を攻落し以のんに勝頼前後よりみみ立られ明日必味方の勝と成るべしと神君聞召尤之さらば汝信長卿の方へ参りて此よしを申せと仰らる忠次直に信長卿の本陣に参り諸將列座の中にて此謀を申けるに信長卿聞もあへず大に怒れる顔色にて汝の嗚呼なる男ありたる大軍にて何ぞ左様なる小謀を用ひんやと仰けれは満座の中にて忠次辱らしめられ赤面して退ける跡より近臣追て来り忠次を閑所へ呼入て信長卿小聲に仰ける汝計策尤奇之先に衆人列座の中よて申けるゆへも敵の忍共聞付て敵方へ告る事も有んうと恐れわざと罵りて汝を恥しめたり唯速に打立と仰けれは忠次大に悦びさらば檢使を給ふべしと申に信長卿御感淺うらず金森五郎八長近佐藤六左衛門則定武藤彌次兵衛に鉄砲頭青木新七郎幸忠加藤市左衛門景村鉄砲五百挺ろへける(基業の一説に信長より忠次に盃を賜り其盃を信忠に進めしめ忠次峴

すくひの舞せしも此時の事ありと見ゆ。忠次急ぎ陣所に歸れば神君よりも本多豊後守同彦次郎松平主殿助同又八郎松井左近牧野右馬允菅沼新八郎西郷孫九郎松平立藩頭阿部四郎兵衛定次も老功の者なりとて差添給ふ與平美作守貞能の案内者に命ぜらる其勢三千餘兩軍合て八千餘五月雨の強く降り道の暗し終夜嶮岨を越廣瀬川を渡り吉川村松山をへて鷲巢山に取登るしのめやうく明る頃敵の後陣を焼立關の聲を揚げたり武田兵庫頭信實和田兵部少輔信業三枝勘解由左衛門守友飯尾彌四右衛門五味與惣兵衛貞成名和無理助等皆名を得たる甲州士少しも屈せず突て出る味方に天野宗次郎西次一番に鎗を合せ戸田半平一西もついで鎗を合せたり此折節長篠の城よりも城門を押開き與平九八郎を始め城兵突出て武田方より押へどしたる高坂源五郎小山田備中室賀一葉軒が陣營に火を放て息をもつうず捲り立れば武田方の前後の敵にもまれ防ぎ兼散々になりて敗走す兵庫頭信實の信玄が弟あり松井左近が家人平岩松太夫に討れ名和無理助は渡邊忠右衛門小栗又一と相討にし和田兵部少輔の戸田半平に討れ飯尾彌四右衛門三枝勘解由左衛門五味與惣兵衛以下鷲巢山に籠りし軍士二千餘人討取られ高坂小山田室賀の三人のからふじて逃延たり味方にも松平主殿助伊忠

の落行敵を追うけ深入して小山田が五百余人の軍勢に圍まれ討死せり時に三十九歳とされとも味方勝り乗じたる事あれば祖父山君が伏床久間山等の敵の附城とも悉く攻落しこの守兵どもは立足もなく敗走するを追詰討取る事はわけがからず(其業編年)

三州長篠大合戦の事

五月廿一日武田四郎勝頼は夜中より軍勢追々操出したまた曙に備を立て一備毎に別れて掛る有様なれば織田徳川の兩將は兼て仰合されし如く軍勢柵外に出べからずと堅く制し鐵炮三千挺つゝ用意して待設けらる信長卿は今日敵兵をば練雲雀の如くせん物ぞと仰給ふ其頃徳川御陣には大久保治右衛門兄七郎右衛門に向ひ今日の軍は當手は本主織田勢は加勢あり方一織田衆に軍を始められれば當手の恥辱是に過べからず某進んで足輕軍を始めしべし鐵炮の歩卒を添らるべしといふを神君聞召尤と仰有て柴田七九郎康忠森川金右衛門氏俊江原孫三郎利金日下部兵右衛門定好成瀬吉右衛門正一等の属兵大久保兄弟に差添て先登に進めらる成瀬は徳川の家人なりしが一度子細有て甲州へ立越此年頃武田家に仕へしか今度の内意有て歸参せり其故に武田家の侍大將共が旗指物をもよく覺たれりとして先手に加へら

れしとぞ大久保兄弟は此輩と一同に柵より外に進み山武田が先手侍大將山縣三郎兵衛昌景が備に向ひ鐵炮を打かくる山縣も始の程は輕卒を出して足輕追合をしたりしが次第に欺き引れてこらへかねぬの柵悉く押破進と三千の赤備一同に押かゝる大久保兄弟下知して思ふ圖に引寄三百余挺の鐵炮透間あく打しむれば先登に進し山縣勢散々に打立られし其時大久保兄弟渡邊半十郎政綱同彌之助光池水之助等は山縣が屬兵廣瀬郷右衛門景房小菅五郎兵衛元成三科傳右衛門形幸とて名を知られたる者共と挑み戦ふ廣瀬小菅三科も詞をかけ姓名を名乗馬上にて突戦八九度及び手負て引退けば半十郎水之助等は高名と山縣は夫には目もかけず三千余騎を手よ付筋違に織田勢佐久間右衛門信盛が柵をかけ破らんと押かゝれば信長卿下知有て柵中より鐵炮はげしく打立る山縣勢もゝにて人塚をつく程打殺さるれば山縣もこらへかねて引退く二番に西上野の小幡上總貞政二千余徳川勢の備たる柵を破らんとするを大久保兄弟内藤三左衛門信成是を會釋し柵中よりは三百挺の鐵炮筒先を揃へて打かくれば小幡が人数も半に過て打殺され殘兵は竹廣柳田さして逃走る内藤彌治右衛門家長同信成梶金平都筑惣左衛門櫻井庄之助伊奈圖書追討して高名す三番に小山田兵衛信成が一

隊徳川勢を目かけて馳來ると雖ども徳川勢の鐵炮に打立られ小幡勢も立歸り押寄しが同じく敗れて逃走る内藤兩人都筑櫻井梶等追討し四番に此組の大將典麻信豊が一隊閑々と柵際近く押寄しか是も鐵炮きびしければ怱兼て引退く武田右備の先手馬場美濃守信房が一隊魚鱗に備て金鼓を鳴らし寒防山の麓より信長卿の本陣に押寄めきさけんで柵二重まで破らんとす織田方は少しも取合す佐々内藏助前田又左衛門福富平左衛門野々村三十郎等下知して三千挺の鐵炮にて段々打立れば寄手も走り寄者打倒され打落され爰にても人塚を築たり真田源太左衛門信綱同兵部昌輝土屋右衛門直村穴山一條等の侍大將入替りく三の柵を破らんと近寄る依て前田福富野々村爰を専途と鐵炮の玉つき早く打立しむ真田兄弟穴山一條等こらへず引退く土屋右衛門直村生年三十一歳衆に抽て柵際近く進み我こそ甲州にて音に聞へし土屋右衛門なるぞ三年前に死べき命を高坂彈正に異見せられ今日迄生延いたり唯今軍門に屍をさらす首取て高名せよと高聲に呼はり柵を破らんと馳かゝる所忽鐵炮にありたり馬より落て死たり勝頼が本陣中軍の先手内藤修理昌豊が一千余騎魁して安中和田原永根五威白倉松本は逍遙軒信綱を大將として段々に進みしがみな鐵炮にあたりて引退く其

中にも道邊軒並跡部大炊助勝資が勢は裏崩し四角八方へ敗走す此勢に乗じて織田方瀧川左近將監佐久間右衛門は柵外に出張す神君是を覺して兼々軍令の如く早々引入べしと使ひ遣はさるれども兩人是を用いず信長卿よりも使を立られ制し給ふ其間に馬場は敗せし手勢を立直し佐久間が勢を追崩し四十余人が首切て佐久間が勢を柵内へ追入其跡へ白地に黒き山道の旗を挿立る内藤修理は引返し瀧川が三千余騎の勢の中へ突て入瀧川勢散々に突立られ柵内へ逃入信長卿此跡を覺して柴田修理亮丹羽五郎左衛門木下藤吉郎よ命せられ此三人千五百余騎にて森長村の方より横に討てかゝる内藤是を見て馬の鼻を立直し白地に赤の旗御弊の馬印を眞先に進め打てかゝる此時山縣三郎兵衛は小山田甘利等と共にうち残されたる勢を立直し柴田丹羽木下が勢の横合より眞鷲に討てかゝれば柴田丹羽木下が人数は散々に突立られ敗走す山縣は追討するかと見る所に左はあくして忽備を立直して徳川家の御本陣に打てかゝる陣よりは鐵炮はげしく打立れば山縣が勢又打殺さるゝ者若干人山縣は白糸織の具足に金の天鍬形打たる兜を着味方討るゝを事どもせず猶馬を進る所本多平八郎忠勝あれこそ山縣あれと下知すれば筒先是を向て打つ（山縣を打し大阪新助と

いふ者こそ勇士一言集に見ゆ）其玉飛來て山縣がゆるき糸の間より當りければ山縣の持たる采幣を口よくわへ兩手を以て鞍の前輪をおさへしぱらく怖しが終にたまらず馬より眞逆様に落れば味方其首を取らんとかけ集るを山縣が從兵志村又右衛門敵に首を渡すまじとかけ寄て其首切て引返す勝頼も齒かみをなし下知して進めかゝれどもみ立れば典麻道邊軒を始とし原隼人小幡上總小山田兵衛望月甚八郎安中左近甘利三郎四郎等諸軍をすゝめて討てうゝるこなたの織田方にて佐々内藤助が内藤修理が備淨立て見えし一責攻てい如何あるべきと信長卿尤とゆるし給ふ其時はや徳川陣の先隊大須賀五郎左衛門柳原小平太本多平八郎平岩七之助鳥居彦右衛門石川伯耆守の諸將自身鎗をふるつて竹廣の方より眞鷲に諸勢に抽て突てうゝる武田方も和田安中以下是を迎て突戦す勝頼旗本を進むれば前備望月右近後備武田左衛門信光も今日を最期と思ひ切て働けば爰にて本多作左衛門重次七ヶ所まで手疵を被り右の眼を切らる本多甚九郎土屋次左衛門はじめ討死の味方も數多なり敵も味方も討つ討れつ手負死人數を知らず大須賀が屬兵久世三四郎坂部又十郎實助太夫同龍之助伊藤鴈助淺井九郎左衛門鷲山傳八柘植又十郎鈴木角太夫淺原孫七郎松下助左衛門其中にも渥美

源五郎勝吉生年十九歳の初陣父におどらぬ剛勇にて深手負なから敵の首若干討取後々高名
 わげてかぞへがたし首取源五と異名取し此勝吉が事之けり神原が属兵に村上彌右衛門
 富田三右衛門伊藤彌三伊奈源左衛門神原仁兵衛鈴木半兵衛も同じく奮戦して伊奈討死す
 典麻が勢一千あまり返し合々突戦すれども遂に徳川勢に切立られて引退く此時信長卿下
 知有て惣軍一同に閨を揚げ勇進み追討すれば勝頼もせんかたあく武田勢惣敗軍と成り鳳來
 寺の方へ敗走す橋邊といふ所に至り大軍に追かけられ瀧川に蹈り溺死する者又多し眞田源
 太左衛門信綱は渡邊半十郎政綱に討れ典麻弟望月甚八郎信益は鳥居彦右衛門が同心永田蘇
 父助に討れ望月右近は永田淡之助に討れ堀無手右衛門は渡邊忠右衛門小栗又一兩人に相討
 し奥津十郎兵衛は高力權左衛門討取其外河窪兵庫助信賢下曾根源六政利弟源七政秋同彌右
 衛門政基横田十郎兵衛忠重油川宮内顯則同左馬允顯重高坂又八郎助宣甘利藤藏吉利杉原日
 向正之土屋備前直親高林惠光寺岩手左馬助胤秀原隼人胤長小山田五郎兵衛昌晟高力源五郎
 昌宣根津甚平伊廣眞田兵部幸運安中左近廣隆馬場彦五郎勝行米倉丹後正繼等思ひく奮
 戦して討死す内藤修理昌豊今は討死の時至れりと勝頼押付を見せて引返すを見て殘兵百余

人すぐつて半途より引返し徳川家御本陣を目に掛て討てかゝるは御大將と直の勝負を決せ
 んとする心と察し本多平八郎忠勝蜻蛉切の鎧をふるつてかけだて、戦へば神原小平太康
 政大須賀五郎左衛門康高も中を破られしと弓鐵炮の足輕を先に立射立打立決戦す内藤修理
 は手勢みち討れ其身も鎧に立矢は簀毛のとく流石は信玄が家に隨一の勇士と呼ばれし内藤が
 死狂獅を奮迅の怒をさせば近寄難く見えける所に流矢一ツ飛來り是にあたりて馬よりたま
 らず落けるが又起上り鎧追取つて敵を突んとする所を朝比奈彌太郎泰勝（今川氏眞の臣氏
 眞より御見廻の使に來り御陣ありしとも言又はもと今川の家人にて此頃は小田原の北條
 家に仕ふ北條氏政より御見廻の使に來りしとも言又は眞も此時信長と共に爰に來りし事は
 手記に見へたりともいふ）鎧つけて其首を取る泰勝は此高名により御家人に召加へられし
 どぞ爰に於て小幡上總信貞小幡備前貞員河窪備前小山田十郎兵衛國次等皆勝頼をのりさん
 が爲踏止りく勇猛の働して死す穴山梅雪が一隊の跡をも見ず寒防が嶺をさして遊行に
 一條が一隊も散々に打なされて敗走す三遠の勢勝頼を討とめて高名にせんとおめきさけん
 て追かける馬場美濃の討殘されたる手勢廿騎計りをまとめて勝頼が旗本の太文字の小旗の

影見へずなりしかば馬引直し長篠の橋際迄取てかへす馬場が其日の出立の卯花威の具足は
 鋪毛の星兜鍬形打たるを着なし月毛の馬の朱に染みたるは白覆輪の黒鞍置たるに乗白旗を
 胸板の鑲にさし鎗を馬の平頭に持添て敵に向ひ是の武田家にて古老の馬場美濃あるぞ
 各討取て高名にせよと大音聲に呼り鎗をふるつて敵四五騎突落し其後刀に手もかけず塙
 九郎左衛門直政が郎等川井三十郎が爲に首をさづく時に六十一歳勝頼に今度の軍御無用な
 りと諫めし時跡部長坂の兩人に向て合戦を進めらるゝ方々の迹らるゝとも諫る某の討死す
 べしとやける詞を守り退りべ退べきをかく踏留て討死にすることを哀されどをしきぬ者ある
 かりけり勝頼の此間に落延けるが相傳の旗を捨たりしを本多平八郎が属兵原田彌之助拾ひ
 取る梶金平大音あげていかよ武田四郎たどひ命をおしみ敵に押付を見するとも相傳の旗を
 敵に取らるゝ事やあるとさんくゝに罵りたり武田方の旗奉行是をきゝ其旗の舊物なれば捨
 たりといへば金平猶も聲高く山縣内藤馬場等の古老共もふる者故捨たるうと聲を放て大に
 笑へば武田方に聞ぬふりして落行けり神君此事を聞召金平當意即妙の中よふなりと御感
 にわづらる本多平八郎の猶も敵しく追行し所に岡邊の松を楯に取て矢を放つ敵あり本多か

郎等多門傳十郎峰須資彦助馳向ひしが彦助は敵一人討取て其身も討死し傳十郎は手疵負て
 敵を追散らす又味方の輕卒等一人の敵を生捕しが雜人かと思ひ着せし衣類を剝取て見れば
 緋屯子の下帯せり扱は唯者にあらずとて其姓名を問へば多田淡路守滿頼が子三八なり信長
 卿聞給ひ扱は伯父葬送の時火車を切たる勇士あり我召仕はんとて長谷川竹丸に命じ其繩を
 とらしめられしに三八其繩引切て近邊に居る者の鎗追取て其邊に群居せる者四五人突殺す
 依て竹丸鎗付て三八を突倒し其首取て信長卿御覽に備ふ凡今日の合戦卯の始に押出し午の
 終りに武田方は惣取軍とぞなりにける(紀聞基業大成記家忠日記甲鑑用談)

勝頼敗走 高坂彈正海津出軍の事

此戦いまだ半なるは勝頼が右備の穴山梅雪旗本の後備武田左衛門佐信光並上野介信友等
 は勝頼を捨て甲州差て逃て行此中にも上野介信友は信玄入道が父の信虎我が子信玄の爲に
 本國甲州を追出され御今川義元を頼み駿府に寓居せし頃かこにて設たる子なり信友駿河
 にて生長し父信虎と謀を合せ信玄に内通し今川家の諸功臣をかたらひ終に氏眞を追出し
 信玄に駿河を奪はせ其功より今勝頼が方に扶持せられたりし所近年頼を煩ひ面相かはり

人の交りかなはず依て今度は是非幸と目を驚かす動して花々しく討死すべき事よと甲州勢は頼母しく思ひけるに人より先に逸出しければ諸軍興さめてぞ覺へける又典成信豊は度々敵と決戦し勇をふるひしが味方物取軍となりければ手の者ども、或は討れ或は落うせて相従ふ者僅に三騎典成は小櫻を黄に返したる鎧に龍頭の兜を着紺地に金泥にて經文を書し幌を掛たり此幌は信玄の遺言にて勝頼より典成に譲りしなり勝頼は土屋宗藏昌恒初鹿野傳右衛門信昌只三騎を従へて長篠を落延て三州黒瀬の小松が瀬を渡るとて馬を扣へ傳右衛門を呼て我典成に譲りたる幌絹の裏書に四郎勝頼といふ名を記し置ぬもしや此幌敵の爲に奪はれては勝頼が恥辱と思ふに汝跡へ引返し典成よ此よし告て受取て歸れとあれば傳右衛門畏まりしとて引歸し典成に逢て此由中典成聞て某も左様も存ずれば先刻幌をば抑た、み青木尾張守信時に渡し置たりとてやがて青木を呼びて其幌の絹を取て初鹿野へ渡すとていふやうは信豊が父左馬助信繁は信州河中島の戦に信玄の爲に御身代として忠死せり信豊も随分父信繁におどるまじき數年の干戈の間に粉骨碎身とする所いつの程にか勝頼に見落され信玄は遺言にて賜りたる幌を戰場にて取かへさる、事身の恥家の恥口おしくこそ存ずれとや

けり初鹿野馳歸りて云とてやせバ勝頼典成が詞は耳にも入さる氣色にて其幌取て腰よはさむ初鹿野が往來する間勝頼寛々と馬をどいめて待たるは流石に猛將かあと敵味方どもに是を感じけり三遠勢は是を大將と見ければ雲霞の如く追かくる勝頼引退んとすれども馬疲れて進み得ず笠井肥後守高利(紀聞には川西肥後守滿秀とす)是を見て馳付て馬より飛下り是に召されし得とやせば勝頼扱は其方討れぬべしと有る時肥後守命は義に依て輕し我は君に代て討死すべしと勝頼をおのが馬に乗せ我身は勝頼が馬の手綱取ておしいたき其疲れ馬に乗り響を引返し元弘建武の亂に新田義貞の命に代て討死したる小山田太郎高家が十二代の孫笠井肥後守高利今日先祖の跡を繼ぎ主君に代り討死するぞと追來る敵二騎突落し三騎よわたる敵と引組差進て討死す是より後追ふ兵も少くありければ勝頼靜に落行所に一日の暑氣に倦疲れ信玄より譲られし諏訪法性上下大明神と前立にじりたる秘藏の兜を脱て初鹿野傳右衛門に持せけるに傳右衛門も疲れければ殆ど持わぬみ勝頼に斷り其兜を道に捨たりされ共跡より來る小山田彌助是を見て名高き兜を敵に取れて如何なりと拾ひ來り勝頼に追付て捧ぐ勝頼大に悦び再び是を着し菅沼刑部が居城に立寄しばらく梅酸の湯

を休め又乗出と爰に越後の押へとして信玄時代より信州海津の城を守りたる高坂彈正昌信
 (一説虎綱)のさる老剛の宿將あり三年以前信玄死せし時より勝頼血氣の勇にはやり必ずう
 る大敗を引出す事あるべきを推察し青貝の持鎗に小熊のたれの鎗印二十本龜甲の鎗二本
 鎗持の羽織迄綴子にて制し用意せり長篠大敗の風説聞とひとしく城に雨宮小諸寺尾小田
 切屋代等を残し置我が身の手のもの八千餘騎をしたがへ兼て用意の長柄の鎗等引具し駒場
 (一説に小満場)まで出むかへ勝頼を警衛し見苦しうらず旗本備取つくるひ甲州へ歸陣せし
 めし高坂が老功流石信玄が遺烈りなど感ぜざる者なし今度武田が家にて鬼神の如く呼れた
 る老功武勇の將卒馬場山縣内藤土屋原真田を始めとし數を盡して討死しければ是より武田
 が武威の大に劣りたり味方に討取首一方三千餘首其中に七千の徳川勢討取となりとぞ織田
 徳川兩手の討死の六千人に過ず甲州にも都の町人國々の商賈共道々集り居けるが此者と
 もの仕業にや其頃甲府の門前に高札を立て落書をしたりとぞ
 信玄のあとをやうく四郎殿敵の勝頼り名をばさぐしの
 また一首の

勝頼と名のる武田の甲斐もなくらしくもまけて信濃のわるとよ

甲斐信濃の勝頼所領ゆへかくよみしかり(紀聞甲斐基業)

織田徳川兩將凱旋付與平恩賞の事

神君の今天正三年尊齡三十四信康君の十七歳信長卿の四十二信忠朝臣二十歳武田勝頼の三
 十歳勝頼甲州へ歸陣し今度戰場にて見る所信康といふ三河の小冠者の志やれ者が士卒の掛
 引を見るに成長の後思ひやらるゝ徳川の果報者之彼小冠者成長せば必天下に旗を立てし
 と評しけるとぞ信長卿の信玄只今迄死を秘すといへども今度古老の侍大將ども數を盡し
 て討死せし有様全く信玄死して彼家滅亡せん事を知り彼等早く討死したりと見へたり且の
 味方の悦び且の調伏の爲なればとて今度討死せし武功の者どもが死骸を取集て一ツ穴に埋
 め其上に大きな塚を築き信玄塚と名附らる此時神君仰らるゝ我等の又土屋右衛門が討
 死に依て信玄が死を慥に察し其故の彼討死に臨んで三年前に死べき命を高坂彈正に異
 見せられ今日迄命あがらへたりと大音に呼りひ彼土屋少年の昔より信玄無二の寵愛を蒙
 りたりたる者なれば三年前に信玄死去せる時殉死の志有しを信玄が喪を秘するが爲に高坂



三洲長篠の大戦
に勝利を得て織田
徳川の両将凱旋
の圖

異見して殉死を定めたる事明らかありされば信玄三年前死去せしに必定之と仰らる信長卿
 大に感ぜられ徳川殿明悟先見凡慮の及ぶ所ならずと稱し給ひけるに此所へ水野三四郎は御
 勝軍御祝儀に徳川家御陣へ酒樽を獻じければ能折柄直に信長に参らせらる信長卿大に悦び
 給ひ左右此樽を開て左右の將士にも給はり終日の軍勞を慰め給ひける此三四郎戰場にて首
 二取たるよしを信長卿聞給ひあの樽か手柄したるやと宣ひける是より人毎に樽と呼て終に
 は苗字と成る今江戸町年寄樽屋といへる者は此樽が後胤ありとぞ(柏崎(物語)又今日大久
 保忠世忠佐兄弟 戰場の 働を信長卿御覽有て徳川家の中に金の揚羽蝶と淺黄に黒餅の差
 物したる者は何とや男にやと問はれければ大久保兄弟のよし答給ふ徳川殿にはよき人を持
 給ふあ兄弟が働はよき膏藥の如し敵に付て離れずと仰らる扱信長卿御父子は長篠城に
 入て神君と共に今度軍功の將士に數々恩賞を施さる其中にも酒井左衛門尉忠次鷲の巢の功
 を褒詞有て長刀を授らる奥平九八郎家老一族其外加勢の人々も皆く拜謁し籠城の忠を褒
 美せられしが九八郎方六町に足らざる掻場に籠り數万の大軍にかこまれ終に一度の不覺か
 く勝軍せしは古今希ある大功あれば今より名を武者助と改むべしとて御盃を賜り信長卿の

諱の一字を授られ信昌と改めたり(世に是より先に貞昌といふ由傳ふされど貞昌は曾祖の
 諱之今其家譜を問に定昌と云しといふ不審之)神君も大般若長光の刀を九八郎に下さる
 是は姉川の戦功を感ぜられ其時信長卿進せられ給ひし御刀之其上に築手田峯長篠吉良田原
 並遠州刑部吉備新庄山梨高邊等の地を添て三千貫の所領を加へ給ふ又勝頼方へ人質に出し
 置たる九八郎妻を勝頼 磔 にかけしゆへ神君の姫君を遣はされ信昌御尊とささるべしと西
 尾小左衛門吉次を御使にて信長卿より仰遣はさるやがて神君第一の御長女龜姫君を婚嫁し
 給ふ(盛徳院とす是之)今度長篠城に於て神君別段に奥平の一族七人家老五人召出され此度
 の粉骨を盡すの旨御感あり是例により此者共の子孫今の世に至るまでも歳首の拜謁する事
 とぞ聞へける(寛系)信長卿宣ひけるに今度長篠の一戦に武田方爪牙の士ハ大半死亡す此威
 勢に乗じ甲信兩國を攻取べしといへども勝て兜の緒をしむる道理なれば一度凱旋して兵馬
 を休め其後我等ハ秋山伯耆が濃州岩村の城を攻取べし徳川殿より駿遠を平均し給へど約し
 給ひ信長卿歸陣あれバ神君も班軍し給ふ既にして神君ハ岐阜におはしまし信長卿今度の加
 勢を謝し給へバ信長卿厚く響應せられ御供の人々へも若干かつけ物有しが長篠にて見たる

髪へ來りたるやと問給ふ其時大久保治右衛門進み出て兄七郎右衛門事の供に參らずいと
せば汝兄弟の今度の功拔群之とて手づうら衣服を取て纏頭らる大久保大に面目を施し神
君も殊更悦び給ひ濱松へ歸り給ふ(御年譜大成記大久保物語基業)

二股高明諏訪原城攻 松井左近改名の事

同年六月二日神君の遠州の敵城を攻給へんとて城東郡鳥羽山に御着陣ありて二股の城を攻
給ふ此城の守將の依田下野幸政其子右衛門信番(幸致とあるはじめの名)隨分の剛士あれ
ハ鳥羽山下迄突出て散々に防戦す其中にも朝比奈彌兵衛の射手なれば寄手を的にして射落
す松平彌右衛門忠長が弟彦九郎の此矢にあたり倒るを見て彦九郎が妹嫁内藤彌次右衛門
家長射藝の妙手少しもこらへず例の大矢を以てねらひ寄て彌兵衛が胸板より総角付迄管の
隠る程射込たれば彌兵衛の其儘倒るを見て彌兵衛が弟彌藏兄の首を敵に取られじと兄
を肩より引退んとする所を家長又二の矢をつぐひ追様に射るに彌兵衛が草摺の端を射
ぬきて彌藏が腰のつぐひを筈深に射込たれば彌藏も共に死たるを城兵大勢はしり寄て兄弟
共に城中へ昇入りたり櫻井庄之助勝次敵を追て城際近く進み寄首取けるが差物城門にかゝり

抜たるを覺へずして引取んとせし時錠者かくと告しかば庄之助又立歸り其差物を取て歸り
鳥羽山へ來り首級を獻じける神君其勇功を感ぜられ遠州の内にて加恩の地を賜りしとぞ
翌三日城將 依田下野の昨日内藤家長が射たる矢二筋に札を付て此矢何人の射られたる矢
なるにや爲朝う教經うとしるし石川日向守家成陣に送りけり神君かくと聞召家成に仰付ら
れ家長射藝を褒美し給ひけるが上に胴服をかつけらる扱二股城の守將下野幸政大病にて終
に危篤に及びけれども右衛門信番よく守り急に落城すべくも非ざれば毘沙門堂鳥羽山和田
嶋蟻原よ砦を築き大久保七郎右衛門忠世に命じて兵を籠て二股城に迫らせ長陣の形勢を敵
に示し且の味方の兵氣をたすけんため猿樂の興行せられ軍中さゝめき渡り賑はしく歡呼の
聲近邊をひいかし神君の軍を引卒せられ高明(大成記高名編年高明とす)城を攻給ふ此城に
ハ武田方より籠置し朝比奈又太郎泰方天野宮内右衛門景貫突出く烈度防戦す此地險阻に
て容易に攻破り難し本多平八郎柳原小平太二王門口を攻破り神君御旗本勢を以て横川に軍
を歸し鏡山に取登られ敵の後より城中に攻入給ふ守將朝比奈かなひ難く思ひ降参して城を
開渡し其身の甲州へ逃歸る此城にハ大久保忠世が兵士を籠て守らせ給ふ(編年記)高明の

落城以前より諏訪原田中等をも攻給ふとあり七月始より八月に至り諏訪原の城を攻圍み晝夜を分たず攻立らる此の馬場美濃信房が細張したる名城にて守將室賀一葉軒小泉源三郎海野遠方等力を盡し防戦すれば寄手も新手を入替く攻けれども急な乗取がたくぞ見えにける鳥居彦右衛門元忠七月廿日城際へ物見に出しを城兵狸々緋の陣羽織を見知て鉄砲を打懸しに左の足を打ぬうれ落馬せしを郎等杉浦藤次郎肩に掛て退く元忠此疵の平癒しければも是より跛と成りにける八月十八日に酒井雅樂助正親城にむうひ勇を勵しければ神君白旗を賜り正親子孫に後榮を發しける此後味方築山井櫻を構て日夜に攻れば廿四日室賀小泉海野遠山等の城將の夜中ひそかに城を逃出て小山城へ引取ぬ此城の武田方高天神往來の要路しうも駿州田中持船の城どの大井川一流を隔たり尤要地なれば神君誰をうこし守將とせられんと仰有しに松井左近忠次某不肖の身ながら身命を抛て此要害を守るべしと申上る神君大に其忠勇を感ぜられ御諱の字賜り御家號をゆるされ松平周防守康親と改らる(寛永系圖にハ此人松平氏を賜りしハ永祿六年東條の城賜りし時の事と有り)諏訪原の名を改め牧野と名付給ふ周武王殿紂を牧野に攻たりし例を引て周防と稱せしめ給ひしも周の

字を思ひよせ給ふとぞ其上は遠州樽木川尻七百貫の地を加恩せられ四千七百貫にさされたり小笠原丹波安次同安藝信元とも康親にそへられ其外牧野右馬允康成をも加勢として籠置給ふ(成續基業大成記大久保物語蘆田覺書寛系)

小山城攻 勝頼出勢の事

同年八月廿八日高明諏訪原既に落城せしうべ此勢に乗じ直に小山の城を攻らるべきり又御歸陣有てしばらく兵馬の勞を休め給はんうと軍議ある所に酒井左衛門尉忠次申ける既に甲州方持城二ヶ所迄乗取給へば此後は甲州方の城兵共の御威光に恐れて追々降参仕るべし味方の兵を曝す事月をかさぬ人馬漸々疲れたり今度ハ御歸陣有て然るべし万一小山に攻らん勝頼元來血氣の勇將是非後詰仕るべしといふ松平周防守康親(原書松平左近大夫親乗とするハ誤なり大成記基業に従て改む)進み出て申今度勝頼長後にて頼みに思ふ將卒悉く討死させ小山の後詰思ひもよらず今此小山をだま攻落さば高天神の不日に御手に入べしと申ければ神君御許容有て小山の城に御馬を寄らる此城より武田方三浦右馬助義教朝比奈兵衛太夫秀盛小原下野守忠國其外諏訪原より逃入し室賀一葉軒小泉源三郎等皆武功の

剛士共なれば突出し防戦す寄手の松平周防守を先手とし松平善四郎康安先登し本多平八郎松平又八郎家忠勇を振て諸手に下知し首級を得たり此時甲州への駿遠の早馬馳付て武田方の城々追々に攻落さるよよし告ければ勝頼大に驚きいざ馳向て濱松勢を追散さんと長篠にて戦死せし者共の子孫親族歳十二三以上あれば出家山伏町人と成たる者をも一度に取立て父祖の姓名を名のらせ漸々二万余騎に取集め九月十五日甲州を出陣す神君此由聞召前に堅城あり後に大敵を引受ての大事あり敵長篠大敗の恥を清めんと必死にかゝる銳氣を避て露を見て動くの軍の善謀いざ軍を班すべしと下知し給ふ内藤信成の山路より引取べしといふ酒井忠次富永孫太夫山にかゝらば敵を恐るゝに似たり川にそひて敵に向ふ如くして引取然るべしと諫む神君此謀を用ひ給ひ十七日よの小山城を巻はぐし川よそひ伊呂崎(基業大成記伊呂崎に作る)に掛り引取給ひんとす其時城兵喰留んと討出る酒井左衛門尉戸田左門大津土左衛門返し合せて敵を追ちらし首を取る勝頼の先手の五六千騎岡部藤枝にうゝり大井川向に至る時信康君是を御覽ありて唯今迄の敵を前にして向ふごとく引取以得共是より後の敵を後に受て以御免を蒙り某後服仕らんと仰らる神君聞召此所地理險阻之追來る

敵の大軍之我自身後服せんとの先達て退るべしと答給ふ信康君かゝる大事の退口を望所の幸なれ信康稽古のため引残りいへ軍門に父子の禮をしたとへ御免の蒙らずとも御跡に備へしとて引下り給へば神君の御先に立せらる折節黄昏に小雨降かゝる神君の上の臺迄乗上給ひ後を顧み給ひ信康天晴の武將哉あの形様にての勝頼の大軍十五騎ありとも挫く事めたふべうらずと御賞詞有て牧野の城に入給ふ勝頼勢の伊呂崎の岸に臨む味方も大久保治右衛門小林勝之助中根善次郎池水之助川涯に踏止る高力權左衛門正長(後土佐守)日下部五郎八重好以下馬の轡を引返し懸合て首をとる武田勢大軍といへども新に募求せし人数故軍令どゝのいず進みかねて見えけるを勝頼大に怒り急に川を越せと下知す高坂彈正長篠大敗の後百日之間に出勢し敵に城を巻はぐさせしひいまだ武田家弓矢盛なる故之輕を敷血氣の圖して軍威を墜さるべうらずと強諫しければ勝頼古老の諫めにもどりがたく小山城へ馬を入れて籠城の將卒に褒美行ひ十八日甲州へ歸陣すれば神君も牧野城より濱松へ凱旋し給ふ(基業甲鑑編年)

武田北條結婚の漢州岩村軍の事

武田勝頼の長坂跡部兩殿臣が粗暴の詞を信用し馬場山縣等の古老の剛士怨望し長祿にて多
 半討死し信玄が武威も衰滅に近きを古老の忠臣高坂彈正大に歎息し五箇條の諫書を捧げ勝
 頼を其諫の中に織田徳川兩將の威光日の昇るが如きを敵に請其上越後の謙信も信州へ時
 を働きて徳川と手合の軍せんとする時節されば小田原北條と講和し氏政を頼み給ふべし幸
 よ氏政は妹ありと聞ゆ是を迎給ひ妹嫁とせられ北條と一家の好みを結び給ひ少しく
 安心せんうと申ける勝頼も股肱の輩過半失ひ心細く思ひたる折節なれば此諫をば信用し松
 山喜兵衛敏次を使とし北條家妹君を定婚し永く一家の好を結び給ひ勝頼此後の甲信二州
 上野と三ヶ國の勢を以て御先手を勤むべしと禮を重く詞を卑くして申送る北條家にも氏政
 氏直父子のやに及ばず老臣共も勝頼といふ猛將降参して味方とあるに於て天下に恐るゝ
 者も我關八州の大軍を以て勝頼を先手に用ひ八十年を待たず天下を一統せんと悦び早速同
 意の返答す（北條の妹甲州へ入興ありし天正五年の正月之原書に今年とするの誤之又原
 書又結縁を長坂跡部が進めしといふもあやまりなり今の甲鑑による）かくて信長卿の此十
 一月大納言の大將に昇り給ふ同月十日に御子の城介大將にて濃州岩村の城を攻らる此守

將秋山伯耆守晴信の甲州第一の美男子あり色を以て先城主遠山内匠助が後室をたぶらうと
 詐謀を以て遠山が遣臣等を欺き城を乗取彼後室を妻とす遠山の家督とせられし信長卿の御
 子御坊丸を生捕て甲州へ送りたり此後室の信長卿に伯母ありし故別て信長卿怒り強く度
 を此城を攻給ふに甲州よりも加勢に座光寺勘左衛門氏定大嶋空介等を籠置たり甲州へも注
 進して加勢を請により勝頼も後詰すべしとて信州伊奈まで出陣するといへども長祿大敗の
 後の兵氣進まざる故大雪にて通路ありずと申す伊奈に滞留して日數を送る其中に岩
 村城内の糶米盡果ければ財寶のいふに及ばず甲冑馬具兵具迄も忍びくゝ近郷へ持出て糶
 米に交易し餓を凌ぎけれども其方術も盡しうに秋山座光寺始城兵等河尻與兵衛毛利河内守
 が屯せる水精山の柵を破り切抜んとしけれども柵を破り兼し所へ信忠朝臣烈しく攻られし
 うに物頭廿一人雑兵二千百餘人討取られ残る輩のみな城内へ退入らる廿一日より至り彌甲州
 より後詰も来らざれば秋山座光寺等塚本小大膳にたより降参を請ふ所信忠朝臣是をゆるし
 城を請取秋山座光寺大嶋の三人を生捕て岐阜に送り残る遠山七家の者共の悉く討果す勝
 頼は此事を聞て伊奈より引返せり（威狀記に服部といふ甲州士あり今織田家に仕ふ彼者

謀を廻らじ岩村城に向ひ討たゝかひて城内の勇士龜井善六をうたがはしめ善六討死して岩村城を陥るよし見へき信長の秋山を得て年來の恨を散じたりと大に悦ばれ秋山座光寺大鳴を捕へ是を磔にかけ秋山が妻をば信長卿手討せられける此妻が悪行の論に足らずといへども流石は伯母がれば是程迄の沙汰にも及ぶまじき物をと時人あさみ評しけるとぞ聞へじ(基業甲鑑編年)

水野信元讒死 土井利勝の事

爰に不慮の禍のおこりし三州刈屋の城主水野下野守信元が身の上あり此下野守元來佐久間右衛門尉信盛と其中不快にして折々争論に及ぶ事多かりしに今度岩村の城攻の時城内糧米欠乏しければ財寶武具馬具取出し近邊なれば下野守が取領尾州小川と三州刈屋へ縁を求て賣出し糧米を買ひ入たりとの沙汰を聞出し佐久間は下野守を罪科に陥る第一の事と大に悦び家僕等に守含め水野下野守密々勝頼と内通じ岩村へ兵糧を見繼んど約せしかど人の耳目を憚り城内の財寶武具等を小川刈屋へ出と賣らせ其身知らざる跡にして郷民等に交易させ糧米を城内へ持入しめたりと所々に雜説をいはせ其風説尾三兩州は流傳する時分

をばうり佐久間竊に信長卿にすけるの君のいまだ聞召さるやとて其事委細實がましく申述まうし某一人の聞所覺束あく其役々へも能々御吟味仰付られ彌風説の如くあらんに速に實慮をめぐらさるべきにや既に内通の者味方にある時のゆゑときき大事ありと眞實面に顯したるにぞ信長卿も大に驚き給ひ其役人に命じ風説聞糺さるゝ所に佐久間が申詞に少しも違はず依て刈屋へ使者を立て下野守が其虚實を尋らる信元夢にも知らぬ事故大に仰天し心知る家人一人撰み出し岐阜の使梶川重實へ差添更に覺へあきむね陳謝せんため遣のしける水野が使の近松長兵衛といふ者とぞ兩人旅宿にて酒のみ酔に乗じて互に討果して死たり是より後のいよく佐久間が讒言時を得て信元冤罪に陥れける信長卿の怒り大りたならず濱松へ使を立て信元反逆露顯せり急ぎ信元が首切て出し給へど仰送らる信元も罪を恐れ岡崎へ來り無實の讒を歎きければ神君元來御外戚のよしみあり殺に忍び給はず大樹寺に忍ばせ置信長の怒り和らぐ時節を待せ給へども佐久間が虚受の祖巧あれば信長卿暴怒烈火の如く早々信元を誅し給へど度々催促せらるれば神君止事を得給はず久松佐渡守俊勝を御使として仰談じ給ふとわきとて信元を大樹寺より招かせ給ふ信元は佐渡守に誘引せら

れ濱松差て赴くとて来る所を平岩七之助親吉兼て仰を頼り松應寺邊に待合て討取たり(編
 年への石川數正先達て討たりと有)水野が従者も十餘人抜つれ七之助に討てうりしが此
 時の追々濱松より御家人來りければ終に從者等残らず討取たり久松佐渡守の元來水野が旗
 下ありしが是より甚怨望して濱松への出仕せず籠居せしとぞ信長卿の信盛が讒を信用し徳
 川家の御手をかりて水野を誅し水野の遺領刈屋の城をバ佐久間信盛も賜りける信盛奸邪
 の穢人なれば水野太郎作清久等の一族譜代の者ども悉く追退け其身榮耀にはこりけれど
 も心有人爪弾して憎まぬ者のありけり信元の讒者の爲に家國を失ひ遺跡絶たりしかど
 女子二人あり是の女の事されば子細有べからず外に二歳の男子あり是の如何計らんやと家
 人等も思ひ煩らひける又其頃水野が家に容人と號せし女房有しが此女房心きたる者にて
 我子なりと披露し其子を懐にして濱松に赴き民間に隠れ養育せしに此兒成長に隨ひ聰明
 英才に見へければ徳川家外様の士土井小左衛門利昌が養ひ取て子としけるがさる由緒を
 や聞召れたりけん天正七年四月七日長丸殿の御誕生の時此兒七歳なりしを召出され長丸殿
 又附けられしに其頃の甚三郎利勝といひたり後にの追々出身して下総古河の城主となり十

六万石領し大炊頭とて天下大老職より昇りたるの此利勝にぞ有ける(一説に神君御鷹野に出
 給ひし時一人の女小兒を抱き御乗物をひうへ涙にむせびくどきて事有しに其小兒を直に
 召具せられて歸らせ給ひけり後に土井大炊頭とすたるの此兒と見ゆ原書に利勝が妹二人
 朝倉筑後守宣正が妻と三浦五左衛門正重が妻との事をのせたり其意の此二人の妹を水野信
 元が女と思ひ違へたるあり此二人の土井小左衛門利昌が子にて水野の子にのわらず依て此
 本文よめるさす)

二股落城の事

今年六月より大久保七郎右衛門忠世の蜷原の砦ありて二股の城を乗取んと謀を廻らし
 ける守將依田下野守幸政の先より病危篤なりしが六月十九日終むむなしくありぬ其子右衛
 門信蕃弟源次郎信行善九郎信慶等亡父遺命を守り堅固に籠城し濱松よりもまづ軍勢を
 むけ攻らるれども信蕃兄弟嚴しく防戦して義を守りける十二月に至れば城内次第に糧米盡
 果て今は籠城もろくなひがたし甲州よりも勝頼印書を遣はし唯今後巻の人数を遣はし難けれ
 ば是迄籠城の義忠天晴手柄なり今の早く城を開て甲州へ歸るべしとや送るされども依田兄

弟の猶も義氣撓まず城を枕に討死せんと思ひ定めたる所に神君より大久保新十郎柳原小平太を以て依田兄弟七ヶ月籠城して義心勇氣を顯したる條感ずるに餘りあり然りといへども後詰の頼みもあき孤城を守り餓死せん智慮たらざるに似たり速に城を渡し命を全くして後の功を建らるべしと利害を説て和睦を進められしうに依田兄弟も漸々得心して十二月廿三日城を開くべき定り新十郎小平太證人として城内に入ば依田より源次郎善九郎兄弟を證人に出したり然れども廿三日雨降ければ箕笠着て城を出るの見苦しとて翌廿四日快晴を待て城内をよく掃除せしめ城兵悉く引拂ひ二股川にて互の證人を取返し閑々と引取て高天神の城に入田中の城をも守りける(依田の蘆田を領せし故蘆田とも稱せしとぞ)神君にも此兄弟が舉動天晴頼母しく思召御稱美有けるとぞ扱二股の城をば大久保忠世に賜りける(蘆田覺書基業編年)

横須賀軍付乾禰山攻の事

天正四年丙子正月廿日濱松城には御甲冑御祝并連歌始ありて賑はしく目出たし(家忠日記)今年三月上旬に武田四郎勝頼遠州へ發向す灘坂より横須賀迄の間盤買坂をば遠慮して濱手

をめぐる真田喜兵衛昌幸(後安房守)兄源太左衛門におとらぬ剛士にて少しも臆せず山道を押通る(甲鑑)横須賀に高天神の押として大須賀五郎左衛門康高籠りければ勝頼の先手小笠原與八郎長善并山縣三郎兵衛が陣代小菅五郎兵衛の兩隊を以て此砦に押寄て短兵急に攻むむ城中より筒助太夫正重輕兵を引卒して突て出る寄手小菅五郎兵衛の助太夫と詞をかひし突戦す扱濱松へ此戰の事注進すれば神君八千の人数を以て速に御出馬あり信康君も同じく岡崎より出馬し給ふ勝頼元來血氣の猛將敵を物の數とも思はず自身三十騎計にて横須賀近く斥候をなす高坂彈正馬をばせよせこの輕々しき御舉動以外の事に以敵の去年長篠にて勝ほこり味方の過半新參の兵にて軍令どゝのらず此所より濱松迄の五六里もいへし敵の地の利を得たり味方の高天神城迄の五右路もいへばもし負軍せば一騎一人も引取事かあふべからず早く此所を引取給へと諫む勝頼聞て徳川一人にて信長に加勢を得ず勝頼合戦がなまじ直に合戦を取かけんといさみ立を高坂又諫ける信玄公時代の侍大將に其計り生残りて以其某をも又殺んと思召にや兎角勝頼公御鏡の強過たり大將強過い得ば大敗の基と再三強諫せしかば勝頼もよん所なく引返す徳川勢にも血氣の若者勝頼引取るぞ追

かけて高名せんと勇みけるを内藤四郎左衛門正成味方を制し只今此方よりかゝりて戦ひ
 三方が原の敗軍に同じかるべしと抑留す神君も正成中條尤ありとて合戦をバ仕かけ給はず
 御備を移し芝原に陣を張給ふ勝頼が備どのわづかみ三里を隔たり勝頼もし掛川の城に取か
 けんかど氣遣ひ給ひ大久保七郎右衛門本多豊後守二隊を其押にあされ松平周防守康親をバ
 瀧坂鹽買坂に備へて敵の餉道を塞がしめられければ勝頼高天神に兵糧運糧を得ず高坂彈正
 に命じ榛原郡相良に彈正が繩張にて新城を築らせ軍勢兵糧若干を籠置き今度は彈正が諫に
 まり甲府へ歸陣したまけり七月に至り乾に勝頼味方として天野宮内左衛門景貫籠城す此
 者の鎌倉右大將家の御家人藤内遠景が未葉にて代々遠州に土着し族廣く家頗る富て兵士若
 干養ひ近郷に暴威をふるひ近年今川に屬しける今川氏眞國を失ひて後一旦徳川家に偽り降
 り所領の御印書御誓詞迄賜りしを甲州へ持参し信玄に降参し去べく遠州を侵掠す依て
 神君彼を征し給ひんとて御出馬あり先彼が設けたる榎山の城を攻給ふ(原書乾の城を攻給
 ふとする)誤之御年譜大成記落穂集によつてあらむ)此城の忽ちに攻落し安部大藏元眞
 に守らせ天野が勝坂の砦に攻り入り給ふ(原書勝坂の砦を去らず天野勝坂の道を透るとす

誤之)宮内左衛門景貫乾の城より討て出湖見坂の險阻に軍兵若干賦り置て時分を見合せ突

てかゝれば奇手散々敗走す鶴殿善六氏長(後石見守)引兼たりしを大久保七郎右衛門水野
 惣兵衛等援け救ひて引取らしむ大原大助大嶋(基業大濱)平左衛門等の討死せり石川伯耆守
 柳原小平太本多豊後守等が士卒を下知し鳥居彦右衛門安藤彦兵衛統卒に命じ鉄炮を打かけ
 水野惣兵衛の後殿し大久保兄弟渡邊半藏返し討て敵を柵中へ追入たり此砦の僅ある播磨赤
 れども四面の岨々たる巖石を壁とし前の谷川流れ松柏鬱々と生茂る神君御覽じて是究竟の
 要害力攻にせんとあらず味方大に損ずべし大久保忠世の此所の地利に委し汝石が峯又登り
 城中を見下し鉄炮きびしく打て攻べしと命ぜらる忠世畏り人数大勢引卒し閑道をめぐり石
 峯の頂に至り城中へ大筒を打りくる大手搦手より一時をばうり攻立れば天野防兼て勝
 坂砦を逃出し鹿が鼻の城へ逃籠る此所地利峻にして急に攻ば人数損すべしとて神君の濱松
 へ御馬を納め給ふ此後景貫終に力盡て乾の城を開き降参しければ御免あければ甲州へ逃去
 り武田没落後其子小四郎の武州岩槻北條陸奥守氏輝に身を寄しが北條も亡し後に御當家へ
 奉仕して漸々先祀を絶さず國恩よぞ浴しける(基業編年)

舞坂 漆 船軍付酒井正親病中遺言の事

これより先四月三日に、駿州に屯じたる甲州軍士遠州海上に兵船を取装ひ遠州の地方を侵掠せんとする聞へ有ければ、濱松よりの中嶋與五郎大將として人数を差寄せ舞坂漆より兵船に取乗り深夜に相良の浦に乗付四日、曉に敵の船に乗付大筒を打ちくれば、敵船是に恐れて進み得ず與五郎急に船をすゝめ敵の船に乘移り從兵と同じく敵をまた討取て其身も主從討死せり神君大にをしみ給ひ其孤子を扶助せられ後に與五郎重好と名づけて遺領を給へるこゝに御雷家門閥の功臣酒井雅樂助正親の清康君廣忠君の御時より當時三代に仕へて御家の事大小となく司どり軍謀密策預らずといふ事なむ戰場に臨んで城を攻堅を破り終に一度の不覺をどらざりしが近來多病にて西尾の城に病臥せしうの神君大に御心をなやませられ平岩七之助親吉を付置給ひ醫療の事をはからせられ御みづからも西尾へ渡らせ給ひて其病を問ひせ給ふ然るに正親病体漸く衰へしを憐れ給ひ汝や置事あらば直に聞べしと仰らる正親重き枕をもたげ嫡子與四郎重忠次男與七郎忠利兩人を召出じ御前に於て君の御恩を以て此二人の子共奉公の節を致さんよ其器量に隨て淺深こそしゆめ忠を盡し義を盡さん心

のまごめ同じからざるべき唯兩息共が忠義を盡し家名を墜さるやうにとのみ願ふこ是より外君に向ひ何事をかやへきとすて打臥けるが神君も汝心安かるべしと仰られ御涙に咽ひ歸らせ給ふかくて程なく六月六日正親のうせにけり齡五十六君の臣を憐み給ひ臣の君に忠を盡す君臣合睦のさま世に有がたきためしにて君の臣を見る事手足の如くなれば臣君を見る腹心の如しなどいへる古言迄も思ひ出されていどかこしこされば天下一統太平に歸せし後にては神君常々汝等正親が心を以て心とすべしと執政の人々に仰られけるとぞ（此一條原書にのしるさず基業編年酒井譜に仍て補ふ）

明治十七年六月三十日出版御届

改撰者

東京府平民

故成島司直

南葛飾郡須崎村百九十四番地

出版人

東京府平民

近藤瓶城

深川區富岡門前町七十番地

東京府平民

辻岡文助

日本橋區横山町三丁目貳番地

各卷頭ニ校正トアルハ改正ノ誤植

校正 三河後風土記卷第十六

三遠兩國 躍流行付永井傳八直勝の事

天正四年丙子夏の始より三遠遠海の地に風俗の躍をさす事流行したり其始ハ市中商人の子ども等が夏の暑を凌ぐため夕方より涼みあぐら五十人計催して躍けるを見物するとして年とりし男女どもおどり出れば僧山伏も躍り次第又興に乗じておどり暗夜に提灯松明ともしつれて夜を盡とあしておどりさわぐやがて農民も打群ておどれば武士もあなじく隊をわうち群を連れね踊るを近日の風俗とし始は白布の湯衣を着て踊りしが後に衣裳も金銀の摺箔し綾羅を身にまとい金襴を鉢巻とし思ひくりに華麗をあらそひ風流を盡し百姓町人岡崎へおどりをうくる信康君の御年若く猛勇血氣の大將此踊をめで給ふ事斜ならず日々夜々踊をのみ御覽せらるもし踊子ども鹿服を着し踊も思召にくなひぬの忽ちに射殺し給へば後々の錦繡を取かさね金銀をとりため日々夜々士民是がために財寶を費しける心ある御家人どもも先年今川氏真師を好み士民ども家業をわすれ踊に財寶を費しけるほどに國中の武備すたれゆるみし虚に乘じ武田信玄駿州を奪ひとり大股も此時遠州をば御手に入れ給ふ前車

の覆るを見て後車の戒め般監違うらず御心得あらせ給ふべきにやと諫る者も少くはた
 いに三州碧海郡大濱より岡崎へうけし踊の中に十四五計にて容顔美麗ある事玉をみぐぐが
 如く風姿たをやくなるその青柳の霞をふくむとき美童あり此美童大鼓をうつに其拍子の
 艶に妙なる事天人も此音に引かれて天上より影向すべく感ぜぬものなりけり信康君
 彼童が美麗にて然も其藝堪能なりしう近く召て何者の子と問給へば大濱の長田平右衛
 門が子ありと答ふる其詞凡下の者の様成らず信康君ふりくめて給ひ近習の徒をして其地
 者に尋給ふ所大濱に住ける長田平右衛門（諸書に重元とあり藩譜に羅山の碑文により直吉
 とあるす後に改めしにや原書に紀貫之が末葉とするの誤之直勝今の永井にて大江氏あり長
 田の平氏され何れにも紀氏にあらざ）の子なり彼の由緒ある地士にて家富饒故此子を養
 育するよ諸藝を習ひするとして京より能役者其外諸藝人を呼下し稽古とするに此子又さどく
 して諸拍子の才造も亦く讀書手習武藝まで年にいまさりて器用なりとすければ信康君悦び
 給ひ然らず土民の子にあらざ召出すともくるしからざるべしとやがて近習に召出さる傳八
 直勝と名乗しが直勝容姿美麗のみにもあらざ才能拔群にして文才智略も勝れば日々

君寵ふかゝりけり信康君御事ありて後には濱松に召れ仕へけるに長田といふ苗字の源家に
 ありて不吉ありとて由緒により永井傳八と召れ天正十二年長久手の戦の時傳八廿二歳に
 て池田勝人を討取て高名も後の永井右近太夫とて下總古河の城主たりし此傳八が事之け
 り（基業編年藩譜）

佐橋甚五郎の事

其頃信康君近く召使われし者に佐橋甚五郎といふ者有り義左衛門義賢といふもの、従弟に
 て召出されしとぞ此者いなる怨みありしにや同役の近臣を討果して岡崎を逐電し三州の
 山里へ逃て塾居せしが今度武田勝頼より遠州小山の援兵として三百餘騎其大將に甘利二
 郎三郎といへる當年十七歳あるを差添てつうのしたり甚五郎此事を聞てひそくに濱松へ参
 り此度小山の加勢大將甘利を討て参るべし其功とげば歸參をゆるさるべしと願儀て縁を求
 め甘利が方へ奉公に出たり甚五郎元來伶俐にて其上笛をよく吹ければ甘利大に寵愛もある
 時甚五郎の膝を枕とし笛を吹を聞きながら眠しを甚五郎折こそよければと首討取て濱松へ歸參
 せしかば所領賜り御家人にさされたりされども岡崎にての先に同役を討て立退しう信

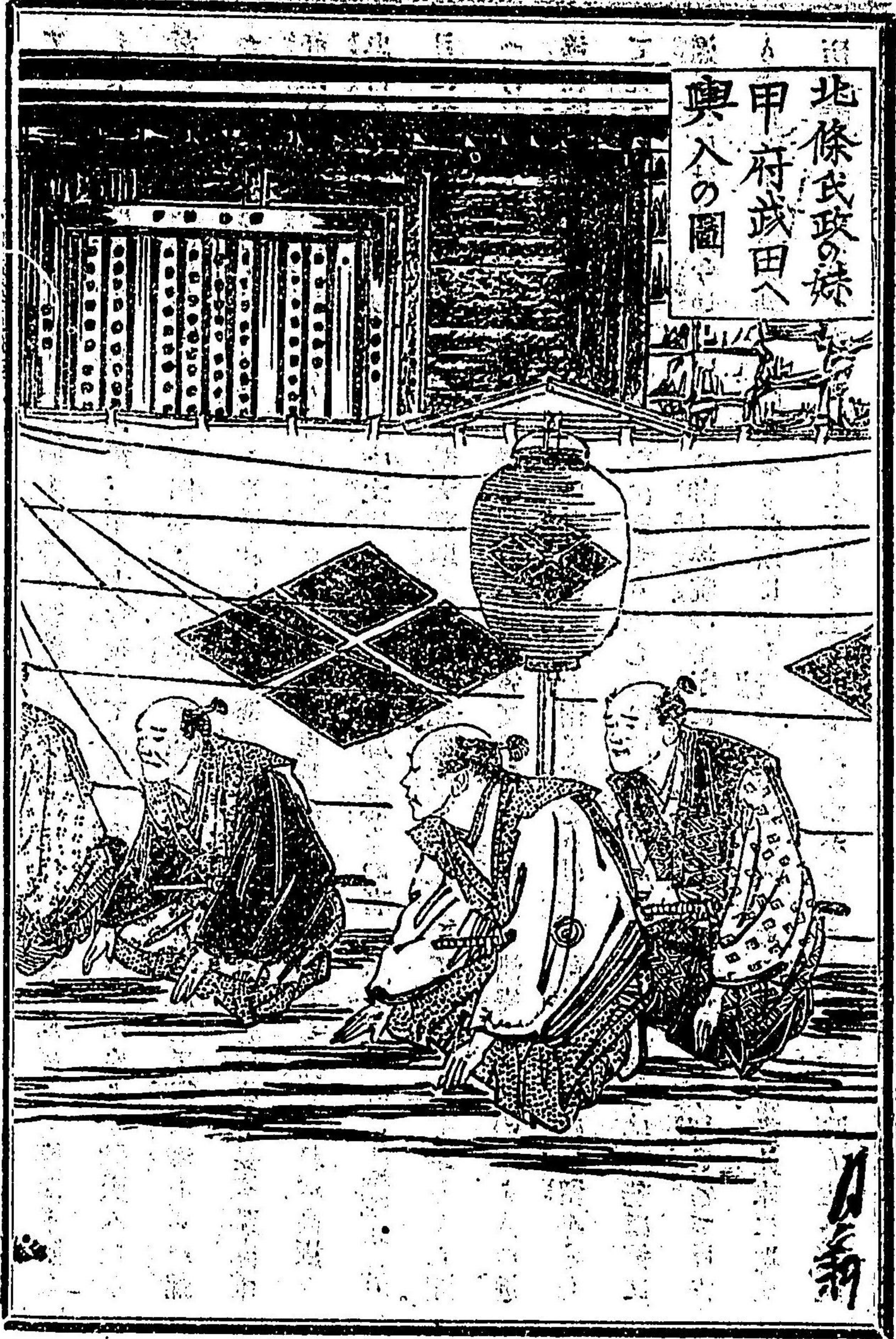
康君御怒とけず神君も又甘利が寵愛をうけながら眠りし首を討たるの人情もどり不仁なる者として御賞断もあければ甚五郎心安からず又濱松を逐電し行衛知れざりしが後に朝鮮國へ渡り慶長の末に朝鮮來聘の時三使にくいり來りしを神君御見知り有つて一族とも文通せむ事を禁せられ其身のさりなく歸國せしめられたりとぞ(編年續閑談の説によるに原書に甚五郎此後甲州若御子軍の時歸參してよく働たりされども姦邪あらはれ阿部善九郎正勝に仰せ誅せられたりとあり是と殊に續閑談の説より所あるに似たり仍て本文を改め注文に附しぬ)

北條氏政妹甲州入興付今切大船の事

天正も五年丁丑にうつりぬ織田信長卿の去年の十一月大納言より内大臣に登らる威勢いよく盛なれば甲州武田方よりいよく北條を頼まんと去々年結縁の後常々使者を小田原に送り氏政を尊敬大方あらず兎角妹君一日も早く婚儀を行はれん事を急ぎける民政も縁組の事約しながら織田家をや憚りけん今年迄延滞ありければ武田方よりしきりに催促もたしがたく今年正月下旬に至り小田原より入興あり早野内匠助清水又八郎劔持與左衛門興添と

て參る勝頼婚儀無滞行ひ兩家合縁の盟約定めければ甲州にても相州にても悦ぶ事限なし其中にも高坂彈正の長篠の後三年此方今夜初て心安く寐入たるの小田原より御興入たる故あるぞと悦びける彈正兎角武田家長久を思へば此うへ謙信とも和睦して御入魂わらば彌たのもしく安心すべしと諫しかど勝頼血氣の猛將にて人に遜順する事を好まず長坂跡部兩奸臣の彈正諫行れば我々身の上危うらんと思ひ兎角高坂の事を譏言し妨げれば高坂が忠言もむなしく用ひられず國中土民一同に長坂跡部を惡まぬ者になりけり(甲鑑編年)五月に至り遠州の今切に甲州軍勢大勢取乘たる大船風待する様子にて湊に日數をふるよし聞へければ夫れ討留よとて濱松勢小船五六艘漕寄て彼船を乗取んと漕寄る大船の中より近邊に寄付じと鉄砲きびしく打ちけ其間に順風を得て帆をうけ走り行是を追うけ打留んとし先登に進たる寺嶋弁之丞鉄砲にあたり死しければ味方少し猶豫する其ひまに敵船は終に逃れ去にけり此今切といふ所の御小松院の御宇に是よりして此湊の切口を今切と名づけたり慶長五年徳川家御一統の後より此所に關を置く事となり成りぬるとぞ(原書此末に堺山田長崎等に奉行所をたてられしことを記す全く此事にのつからざるをきれば今剛り去る又此

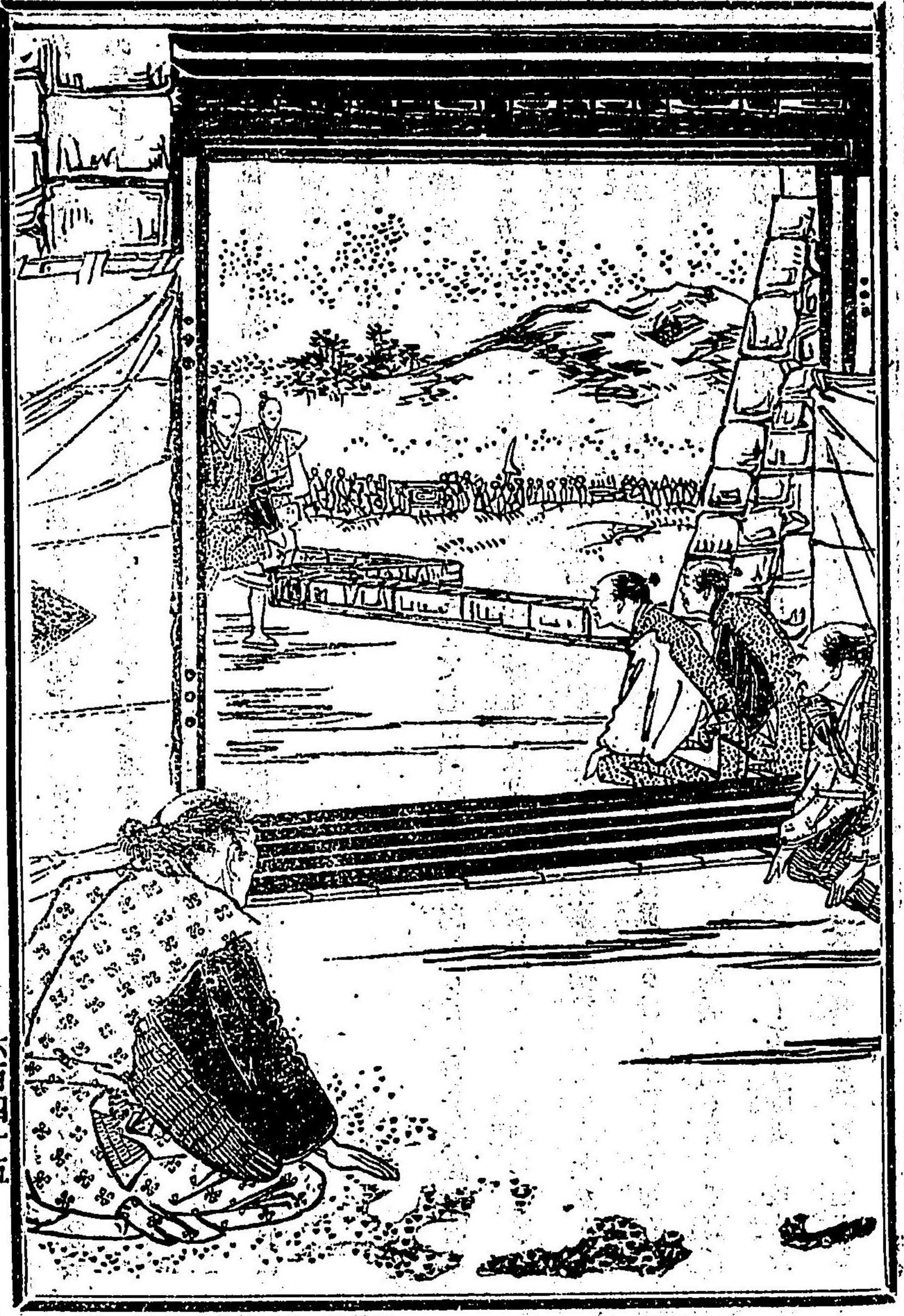
北條氏政の妹
甲府武田へ
輿入の圖



六百四十四

刀新

後風土記卷第十六



六百四十五

條の前に伊賀の倫人等高天神を責誤りしとを記す大三河志に四月廿七日とす又勝頼國安の兵をして高天神に糧を入大須賀伏兵を設けて之を遮ぎり破るとをのせたり此年十月十三日城介信忠卿の從三位中將にのぼられ十一月十六日に父内府信長公右大臣にわがり二十日從一位にのぼり給ふ十二月十日は神君從下の四位に加階せられ二十九日に右少將に任じ給ふ(編年)

田中國安横須賀軍の事

天正六年 戊寅三月神君駿州を征し給ひんとて七日濱松を御山馬あり井伊万千代直政始て御供命せらる万千代當年十八歳甲冑の菅沼藤藏定政に仰付られ若せしめらる初陣の事なれば屬兵近藤石見鈴木三郎太夫菅沼次郎右衛門木俣清左衛門松下嘉兵衛等別て勇み進たり八日まづ御先手をして駿州志田郡田中の城に押寄しめらる万千代眞先うけて手勢を下知して城責する有様天晴の勇將と見へければ見る者驚歎稱美せざるなり屬兵も銘々首取て高名す九日鷄鳴の頃酒井與九郎内藤甚五左衛門熊谷小一郎小栗又一拔ぐけして城際近く攻寄たふ城の守將一條右衛門信龍伏兵を設け置て相戦ふ又一等の勇をふるひ其兵を城内へ追入る

然れども此輩軍令を破るにより御勘氣を蒙りければ是より横須賀城に入て大須賀康高に從ひて猶も軍忠を勵しければ高天神落城の後召返され歸參して御家人と成るさて田中城にて先陣本多平八郎榊原小平太松平甚太郎松平主殿助等諸軍を進め火水にあつて働き既に堀を越へ柵を破り外郭に入て本丸へ攻入んとする時城將一條信龍が手の者共鎗を揃へ橋の上に備ふ大須賀が屬士久世三四郎榊原屬士中根善次郎本多が屬士高坂惣十郎其外万千代が屬士等粉骨を盡して苦戦する所一條信龍必死を志て防戦すれば勝取いまだわかつたるに御本陣より渡邊半藏同半十郎御使として軍を引揚しめらる渡邊兄弟の早速先手に馳向て寄手に命じ一同に進ましむ敵軍是を見て少し開き靡く時渡邊早々乘廻り味方をこどく引あげたりかくて神君の牧野の城に御馬を納め給ひける此十三日越後の上杉輝虎入道謙信の四十九歳にて卒を實子なれば北條氏康の三子三郎景虎甥の喜平次景勝を養ひ子とむけるが此兩人國を争ひ越後大に亂れける故勝頼の一方の先心遣ひなくかりて彌徳川家と戦を交んどぞ軍慮をめぐらしけり五月四日に神君御出馬ありて又田中の城を攻給ふ大須賀康高雨により運參しけれども一番に進み屬兵坂部又十郎塀を乗て數勢押かへり外郭を破りて引あげ歸陣

七給ふ八月八日に高天神の城兵等城下國安川邊へ出張す横須賀より先達て押寄坂部二十郎近藤武助柴田三十郎柘植又十郎寛助太夫渥美源五郎神谷六平等百六十余人路に伏兵となりて城兵をやりすこし起り立鉄炮を打かくれば敵は思ひもよらず驚き騒ぎ散々に成りて逃るを追かけ坂部真先に進み高名す其外追討して五十余人が首を討て騎兵を城におひこみ本多平八郎石川日向守久野三郎左衛門此趣を濱松へ注進すれば大に御感を蒙る同月廿二日神君信康君とも大井川を越て田中城邊が季田をしめらる城將一條信龍人数を出し戦をかくる味方柳原が従兵清水久三郎鎗を合す味方追々大軍の形勢を見て城兵狼狽して引取を追かけて柳原従兵中根善次郎鈴木藤九郎等勇をふるひ城へ付入にせんとするを見て城兵門を開て出されば味方は操引にして遠目持舟にいたり石川伯耆守後殿と牧野の城に御馬を納めらる此後大須賀康高は度々人数を出し川上村三峯山にて高天神城兵も合戦すれども横須賀勢一度も不覺を取らず久世坂部渥美等いつも勇をふるひ高名す十月勝頼甲州を出て大井川を越たるよし聞へければ濱松勢も見付宿まで出陣す十月晦日夜半に高天神城兵一人城を忍び出て寄手の圍を突て通らんとす渥美源五郎見咎て生捕しに勝頼の印書を首にかけたり依

て其首討て印書に添て奉る大に御感を蒙る十一月二日勝頼小山相良に着陣すると聞へしうば神君信康君横須賀迄御出陣あり三日大淵郷熊野鎮座の三社に御陣を移さる八千の御人数の山麓に備たり勝頼は横須賀に攻寄んとすれども三社山御在陣あれば搦買坂の本道を恐れ濱邊にかゝる先手小笠原與八郎小菅五郎兵衛等は海手を押して横須賀を攻れば城中には大須賀康高寛助太夫小鉄炮を打立防戦す勝頼は軍を十七段にわかち入江をへだて、陣を張る信康君御自身敵陣近く斥候し給ひ一戦をかへしと仰あげらる神君敵入江をこして進まば三社山より押かゝりて戦ふべしともなきに此方よりはかゝるべからずと仰らる内藤正成も味方を制して抑留す勝頼も水を渡つて一戦を挑まむとせしかども侍大將等諫て引返し高天神に馬を納む其時横須賀より渥美源五郎鷲山傳八郎淺野九右衛門柘植又十郎討て出追討して首數多く討取つたり神君渥美が數度の勇功を御感ありて革の道服を賜ふ(原書に此横賀須の戦を天正四年三月の戦に混す今成績基業によりてこゝにときなふ)勝頼は十一月廿五日高天神より甲府へ引入るれば神君御父子は晦日に三社山より濱松へ御歸陣あり此十二月武田第一の老臣高坂彈正昌信(虎綱晴久)信州の海津の城にて病死せしかば是より長坂跡

部時を得て奸邪讒佞専らなれば國人ことごとく怨惡ととなり

台徳公御誕生付寶藏院殿の事

天正七年己卯正月のころ簀笠之助といふ者夢想に發句を感得と

駿河なる富士の山にて甲斐喰て

此句目出度句とてのし付の太刀を賜はり其句を買はせ給ふ又其頃内藤四郎右衛門正成が夢中に感得せしとてす上ける和歌は

咲花に和泉河内の治りて

黄金の橋をわたす米倉

とりく目出度ととて御館の人語り傳へしか此歌夢見たるを百日に満る夜三郎君生れ給ふ是台徳院殿大相國の御事あり遠州敷地郡濱松の城にて生れ給ひ御幼名を長丸君とす御首服かへ給いて秀忠公とす奉る此御母君の愛服といひ西郷の局と稱す西郷彈正左衛門正勝が女戸塚五郎太夫忠春に嫁して愛服を生り忠春天文二十三年遠州大森の軍に討られければ其妻も愛服を伴ひ服部平太夫正尚より再嫁し愛服服部が家にて生立し後外祖父正勝が孫右

近進義勝が妻となりて男女の子一人づゝ生れたり然るに義勝元龜二年三月武田が手の者と

戦て討られれば愛服繼父服部が家より歸りてあはせしを母方の叔父西郷左衛門佐清員養て子とし天正六年の春濱松へ宮仕にまいらせしか西郷局と召されて今年四月七日に此君をうみまいらせられし之扱も愛服翌年九月八日にも又四郎君を設らる此四郎君御幼名福松丸後に三位中將兼薩摩守忠吉卿とす愛服にはかくさしつゝきて男子君も出來給へば御行末の榮知られていと目出度渡らせられしに天正十七年五月十九日わへさくうせられぬ年の三十八にぞあはしき駿州にて生れ給ひし事さればとて駿河の龍泉寺におくりまいらせ法の證をば寶藏院殿松譽貞樹大姉とぞすける大相國家御代志ろしめして後の御母上の御事されば殊更尊崇まじく寛永五年五月從一位を贈らせ給ひ勅使駿府の御寺に參向せられ寺號を改め寶藏院として住持にも紫衣をゆるされたり御供の料も三百石よせられぬ御齡のまた盛の御ほどにて殘多き御事成りしが後の世までの御果報いみじき事どもあり(以貴小傳)

築山殿凶悍 信康君猛烈の事

神君北の方の今川治部大輔義元の家人關口刑部少輔親永が女にて御母の義元の妹ありしか

いまだ駿河の國府におはしませし時義元のはからひにて北の方に定させ給ひし之永祿三
年義元桶狭間にて討死有し後神君の御舊領岡崎へ歸らせ給ひしめと北の方の猶駿府に定め
られおのしけるを同六年の春岡崎に迎ひ取らせ給ひ築山といふ所に住らせ給ひしうに築山
殿どのすける之此北方御腹に三郎信康君も生れ給ひ又龜姫君も設け給ふ然る所より北方凶悍
にて物嫉みの深くまじしければいつしか御さうらひも疎々しくおらせ給ひぬさる程に濱
松に御いつくしみを蒙る人々もあつからあまたに男君姫君もさしついき生れ給ふを聞
給ふゆへにいと物思ひもいやまじ方にそなましくぬたましとのあまりある日女房御使し
て御消息を濱松にまいらせ給へり

我身こそ實の妻にて御家督三郎ためにも母なればあぢからに御賞斷有べき事之其上吾
父刑部どのの御身故に失はれまいらせたり其娘さればうたぐ人にこへて御憐みわら
んこそかねての思ひはるに思ひの外引うへてかくすめられまいらせ郭公の一聲に
明安き夏の短夜だに秋の八千夜どわうしわび片敷袖のうたぐ兼に夢見る程もまごころ
ぬべ床の涙の海と成り唐船もよせぬへし今こそつらくわたらせ給ふとも一念の悪鬼と

成りやがて思ひ知らせるらすべし

うらみの數々書ついでり参らせられしうに濱松よりいといわづらひしくおとまじげに思ひ給
ひしなるべし其後ついでり玉琴の緒絶て雲井の鴈の便りさへかれぐにぞならせ給へり
築山殿に其恨まじてやらんかたなくぞわたらせ給ふ三郎信康君の北方の織田右大臣殿の
姫君之(徳姫とす)築山殿さるひうくしき御本性なれば信康君の御夫婦和鳴の御中むつま
じくわたらせ給ふ事嫉ましく常に其間に入り彼是讒言のみ仰られ御夫婦の御中をさまた
げさせ給ひけるといかなりし御心なりけん信康君の北方姫君生れ給ひければ濱松岡崎内外
の御家人目出たしと悦びあへるに築山殿の是によりてもあを嫉まじさのやる方なく御夫婦
の御中をめしさまの事のみはからせたまふ其翌年も又信康君の北方身おもくおらせ給ふ今
度はせめて男子あらんかと信康君も悦び給へば濱松にもいかにくんと待せ給ふその月數ま
でやすらかに生れ給ひしかば此度も姫君成りしかば御悦の中にも物のばえなき様にて濱松
にも御本意なく思召たりけむ(此姫君三所姉君は小笠原兵部大輔秀政の北方とあり給ふ妹
君は本多美濃守忠政の北方とありたまふ)築山殿の信康君に凡大將たらん人のはやく男

子を設けざれば頼母しからず女子のみ設けたりとも何のかひかあらん國主の御身に一人の妻のみを頼み給ふべきにわらず兎角御子の多く出来給ふよふにはかり給へ國の爲家の爲御孝心第一あらめどかきくとき仰らるれば信康君も御母上の仰理りと聞召是方して宮仕の女房御寵愛蒙るたぐひもあまた出来ぬ築山殿又はからはれ其頃武田が家人日向守昌時が妾服の女嫡母の説言により其家を退出され三河國へさすらひ來りしに此女容色媚媚にして大液の芙蓉未央の柳をわさむく美人之歳は二八の盛りにて築山殿聞給ひ其頃は岡崎の市人養育せしを金わまたにかへて召出し信康君の御方へまいらせける君も御母上よりの御すゝめといひ元より其艶色を御覽し給ふより忽に御心うつり御寵深くなり行は只其方ののみ毎夜わたらせ給ひ御酒宴に夜の更るをも忘れ給ひ翠帳紅圍の御むつ言明るをわびしく驚蕪の姿を重ね給へば北方の御方へはいつしかめかれくにならせ給ひぬ北方始のほどりさりともあるやうあるべしと思ひをどめてわたらせ給ひしにあまりに御夜かれもかきさり行は流石に御物妬みの思ひやるせなく恨めこと給ふ此事小侍従といつて北方の御方は宮仕する女房の告奉りて北方の御恨深きよし聞召物荒き血氣の大將怒氣忽に猛火のとく直に北

方の御方へわたらせ給ひ北方見給ふ前にて小侍従が髪をとらへ御膝の下へ引伏せ給ひ汝の夫婦の中を妨ぐる曲者思ひ知らせむと氷の如き御腰刀を引ぬきて水もたまらず切て捨口に御手を入れて引て引き給ふ北方の御舉動を見給ひ恐れわなきて御涙にのみむせはせ給ひ此殿猛勇剛氣の大將にて今の世に並ぶべき猛將と聞へたる武田勝頼さへ舌を巻て感歎せし程の事あれ御みづからも我に勝る者わらじとの御心も有しなるべし近頃の是のみにてもかざらず暴横粗厲の御舉動のみ多く御内外様の御家人等諫兼て歎きける信康君ある日鷹狩に出給ひしに鳥一ツも御手に入らぬば御氣色よからず歸らせ給ふ御道に一人の僧に行逢ひ給ふ近習の若殿原何哉して御氣色をさんと思ひ凡狩場にて僧に行合ふ時必ず御物さしどや者有り其故の彼のもの業盡有情、離放不生、故宿人中、同生佛果とす咒文を唱ふる時其日生類忽に命を助りし由とすせば扱ひぬの坊主めこそ我狩場の妨をみしつらん今日の御物には此坊主をさすべきぞと其僧を生捕て首へ差繩をつけて力革にくくりつけ其馬に鞭をめて馬をばせむれぬかの僧を馬の引つりて逸足出てはせ出れぬ其僧の命の忽ち絶にけり是等を始としてさうも御意に背く者の忽御手討にさるれば町人百姓

共迄も只鬼神の如く恐れ此君御代とされ御領内に養生のため絶はつべしとぞすける築山殿には又とら浅間とき御心出ぬるういかある天魔の仕業にや瀬津神に忍ぶるをれ給ひけんいどあまじきひが事こそあこりけれ其頃築山殿例ならぬ御心地にてわつらせ給ひければ宮守の御膳のさら名ある醫師とも召寄られ御藥をすゝめ給へどもかきやましくのみ打臥給ふ甲州より來りし滅敵と言唐人あり此者醫を業としまづ其驗あるよしす者ありとて是を信康君に請せ給ふいと安き御事とて彼滅敵を召れければ其藥をまいらせし後の御心地もやうとせばやうせ給ひしとて是より滅敵をめでいとちしみ給ふ事並やならず常に闇の中にとり置き給ひ花鳥の色にも音にもあらずむつみうたらはせ給ふ様古の遺鏡うためしも引出すべし夫とへもいとけしからぬ事とやうく世にも泄れきこえつるに又此滅敵にたよりて内を武田勝頼へひそりに仰入られし信康の我子あればいうにも徳川織田の兩將のわらひ計らふ手立ひ得べかまへて失ひすべし此事成就せんに於て徳川の舊領の其儘信康に賜りなむ又わらひ事の御被官の内よてさりぬへき人の妻となし給ふべき此願事うみ給ひいかたき御請文を賜へるべしいまより信康を教訓し御味方につけ

すへきことこの事之滅敵甲州へ歸り急ぎ勝頼にすせ勝頼の渡りに舟を得たる心地して早を自筆に誓詞を書て滅敵にぞ授けしる

今度滅敵に仰越されし趣神妙に覺以何ともして息三郎殿を勝頼が味方にす進め給ひはかりとを相構へ信長と家康とを討亡し給ふに於て家康の取領のやに不及信長が所領の内何れなりとも望にまうせて一々國新恩としてまいらすべく以次に築山殿をば幸郡内の小山田兵衛とや大身の侍去年妻をうしきひやもめ居にて以得ば彼が妻とみこまいらすべく以信康同心の御左右の築山殿を先立て甲州へむかひどりまいらせべく右之段相違するに於ては

評文

かくしたくめて滅敵に持せて進せられければ築山殿には悦給ふ事大かたならず滅敵は是によりても双方より金銀錢帛を貪りし事若干ありしが其後は何方へ逃失しにや行衛も知らずありにけり築山殿にも流石御母子の御中にも此事何かとむひがたくいまだ信康君へ御進め成がたければ月日を過し給ひけるが勝頼先達て甲州へ迎取て小山田が妻とせむとや越た

る嬉しさに旅立の用意内々急がせ給ひけると信康君北方は仕ふる藤川久兵衛は女三人あり
 其一人は柴田修理亮が家人廣瀬源右衛門が妻とあり妹二人の一人名を琴といふは築山殿に
 宮仕し御髪揚を役とし御氣色にかきひ何事も隔なくつかふまつる其妹はまた北方は宮仕し
 ぬ築山殿甲州にわたらせ給ふとて内々其用意急がせ給ふを此琴あやしき事に思ひしか秘置
 給ふ手箱の底に文篋あり其中は服紗に包し物あるをひそかにかいまみれば勝頼が誓詞にて
 織田徳川兩將を討亡すよといふ事の見ゆれば大に驚き其誓詞はもとの如くつゝみあいて
 早々其事を妹に告げ是大事あれば妹も急ぎ北方につけまいらす北方は此程はねたみ恨みの
 やるせなき折から父右大臣殿討參らせんどのばかりとぞと聞給ひいよく御憤も深くあ
 り此事捨置べきにわらずとて信康君あしき御舉動も築山殿のまさなき事ども委しく御文に
 かへせ給ひ父右大臣殿の方へひそかに奉り給ふ

一築山殿悪人にて三郎殿と吾身の中をさまく譏して不和し給ふ事

一我身姫ばかり二人産たるは何の用にか立ん大將の男子こそ大事あれ妻あまた召て
 男子を設け給へとて築山殿すゝめにより勝頼が家人日向大和守が娘を呼出し三郎

殿妾にせられし事

一築山殿甲州の唐人醫師滅敬といふ者と密會せられ刺へ是を便とし勝頼へ一味し

三郎殿をすすゝめ甲州へ一味せんとする事

一織田徳川兩將を亡ぼし三郎殿には父の所領の上に織田家所領の國を參らせ築山殿
 ぞば小山田といふ侍の妻とすべき約束の記置文書で築山殿へ送る事

一三郎殿常々物あらしき所行おほし我身召仕の小侍従とす女を我目前にて刺殺し其上
 女の口を引さき給ふ事

一去頃三郎殿踊を好みて見給ひける時踊子の衣裳よろしめならず又あどりさまわしき
 とて其踊子を弓にて射殺し給ふ事

一三郎殿鷹野に出給ふ折ふし道にて法師を見給ひ今日得物のあきり此法師に逢たる
 ゆへなりとて彼の僧が首に繩をつけて力草とかやに結付馬をはせて其法師を引殺
 し給ふ事

一勝頼が文の中にも三郎殿いまだ一味せられたるにはいはず何ともして進め味方に

すべしとの事にいへば御由断まじきまき末の御敵に組しむべきと存し態をす上
以事

右大臣殿この御消息を御覽し大敵武田に一味と聞給ひていゆしき大事あればどかと思慮
めぐらと給ふ六月十六日には徳川家より織田殿へ御馬をまいらすとて其御使に酒井左衛
門尉忠次参りたり信長公忠次を閑室に招き北の方より参らせ給ひし御消息の趣をひそか
に仰り信康が武畧は比論希なる若者ありといへども暴虐不仁の性質凡不仁にて強暴を
る人國家を保つべきにわらず万一人隣國の大敵に誘はれ敵に一味せば蕭牆の中より禍
を引起しゆしき大事に及ぶべしとかの御消息を取出し一條づみづみづから讀てきかせ給ひ
汝此事は知りたる事にやと問はせ給へば忠次承り某も一々承りぬる事どもなり敢て浮
たる事におらずと答ふ(大久保が物語に此文にのせられし十二ヶ條をよませ給ひしとあり)
信長公此うへは力なし速に失はるべき旨徳川殿にすべしと仰らる忠次うけたまはり仰の
如く三郎殿武勇絶倫にて父上よりまさらせ給ふ様に世にも評するゆへ其身も嬌慢心近頃追
々猛厲殘急の舉動のみ長じて我々が諫言を用ひられざる計にもいはず結局金言耳に違ひわ

れくをば寇警のごとくうとみ思まれ近く召寄る事もいはず國中恐懼怨恨して一日を安ず
るものなしいかさま虎を養ふの恐れなきにわらず御意の旨徳川殿にすて計らひいへしと御
請して退出せり此忠次の譜第重職の老臣にて又古廣忠卿の御妹君にさひまいらせ神君の御
伯母御なりしかば御當家に於て肩を比ぶる者なし忠次身に引請てす開く旨わらば信長公も
信康君の死を命ぜらるゝ迄の事よは及ぶまじきを忠次兼々信康君を恨み奉る事ども多かり
しかば幸に此事を領掌して歸りしとぞ聞へける(大久保物語藩譜編年)

按るに世に傳ふる所の説は信康君少年にて猛厲の大將故常々老臣共を土芥の如く賤し
め罵り給ひける故酒井忠次大久保忠世等常々怨望して有ける寂警の如き思ひを以て信
長公の仰を幸に禍を醸しなせしといふ又一説に忠次三郎殿御方におけうといふ女
房年の三十に餘りければ姿色世に勝れしが宮仕せしを悪想してものか圖の仰をささん
として北の方に媚諛てかの女房をや請歸り家に引取寵愛せり三郎殿後に此事を聞召北
方忠次をふりく憎ませ給ひ毎更忠次を辛くもてあさせ給ひければ忠次終に罪に陥らん
事を恐れりるはうり事をあしぬることも云此説々不審なきにわらずまばらく兩説を

爰に附して後致に備ふ

信康君築山殿御生害 平岩親吉忠言の事

酒井忠次の岡崎の城下を過けれども立もよらず直に濱松へ参て織田殿仰の旨上しうバ神君大に驚らせ給ひ兎角の御答もなうりしが如何思召さだめ給ひけん八月朔日に織田殿への仰に隨ふべきとの御返答ありて三月に信康君を岡崎より大濱へうつし給ふ五日に神君西尾の城へ渡御あり七日に岡崎へ渡らせられ城門厳しく警衛を命ぜられ九日信康君を大濱より遠州堀江の城にうつされ十日に同國二股の城にうつし大久保七郎右衛門忠世にあづけらる是忠世が伴ひて山林僻郷へ落し参らすべきうとの思召なりしかど忠世其御心を得ざりしか又思ふ所も有けるにや嚴しく警衛して日懸を送りける築山殿にのさる恐ろしき巧ありしをまがふべきにあらねば八月廿九日野中三五郎重政に築山殿討て参らせよと命ぜられ白岩奥山中根といへる侍三人をそへらる重政小藪村に於て討奉り御遺骸を濱松の西來寺といへる禪院に葬りまいらせたり法の御諱西光院殿政岩秀貞大姉とや後に延寶六年百回の遠忌にあたり給ひし時寺領をも歸し加へられ清池院殿と改られしかど大樹寺にてい猶

西光院殿とやよしへ大成記此御使を村越茂助直吉とし編年并原書よの岡本平右衛門石川太郎右衛門兩人とす野中重政が家譜の説基業以貴小傳と同じ家譜の説尤つまびらか今是に従ふ其説には重政築山殿を討て歸り其由すければ女の事あれば尼となし何方へか落しすべきを心おさなくも討取しかど仰ありしかば重政大に恐れ古郷遠州堀江村に蟄居せしと見ゆ平岩七之助親吉の信康君の御傳なれば心もどなく思ひ濱松に参りて三郎殿に御謀反の聞へわりてうしなわれ給ふべしと承る御父子の御中に何の御恨わりて只今かゝる結構のいへき是の偏に讒者のいたす所なるべし其御糺明もいへざらんよは御後悔遠きにあらざるべし詮する所親吉年頃御補導の役にいひしうへの此度の罪を親吉一人が身の上とせられ速に某が首切て信長にまいらせられ信長まばし宣ふむねもいはず其中に仰ひらるべきも亦く信長の御疑もまどか解やらしていへきとく親吉が首をめさるべくいしとや神君聞召信康が謀反の聞へ實どの思はぬありさりながら我今亂世にわたりて大國の中にさしはさまれ頼む所い只信長の助けのみ今日彼たすけをうしなひなば我家亡びあん事明日を出へからずされば我父子の恩愛の捨がたきに累代の家國亡さんの子を愛るの事を知て先祖の

御事思ひ参らせぬに似たり我此事を思さらんにのちどか罪なき子失て難面命をながらへん
 と思ふべき汝が首切て信康が首つかせむ事のかあひなば汝が諫めに随ふべしといへども信
 康とても運るまじき者ゆへに汝が首迄切て我が恥ふた度重ぬんも念なと汝が忠の志い
 づれの世にかわさるべきと御涙にむせび給へば親吉重て申す詞もあく聲もをしまさず泣て
 退出せり(原書に此事をもらせし平岩が著作にあらざる一證とすべし今大久保物語藩譜
 編年によつて補ふ)岡崎の城に此十二月より本多作左衛門重次に守らしめ三連の人質ども
 をも預らる切あるべきにもあらぬば信康君には御腹めさるべきにさだまり九月十五日天方
 山城守浦經服部半藏正成二股の城に御使し仰を傳ふ信康君兩人に向はせ給ひ今更何事をか
 すべきにわらずといへども我謀反して勝頼に一味するといふ事はさらに思ひもかけぬ事
 此事のみは我が死後にも父上へ汝等よく聞て上てくれよと涙にむせび給へば山城守半
 藏も其儀の某等一身にかへて申上べしと申上れば信康君もいと嬉しげに打笑給ひ今は此世
 に思ひもく事なしと仰られいささよく御腹めされ半藏馴染あれば介錯たのむと仰ある仰御
 姿見上るより鬼と呼ばれし半藏もあまりの御傷はしさに伏沈み涙に咽びて手も出じやらず山

城守手間取ては御苦痛の程も忍入し某御免かふむらんとて御介錯をつとむ(此時の刀は村
 正ありとぞ)當城の山つゝき小松林の庵室にて火葬し騰雲院殿達岩善道大居士と追號し御
 葬送懇に營み山城守半藏濱松へ参りありしやう一々に申上れば神君さらに物ものたまは
 ず本多平八郎榊原小平太等はあまりの御いたはしさに三軍を抽る勇氣も撓み果て御前をも
 憚からず聲をたてゝぞ泣にける榊原七郎右衛門清政は歎のあまり所領を返し弟小平太が方
 に盤居せり(慶長十九年再び駿州久能城を預かる今久能山門番を代々勤る榊原は此末の子
 孫)信康君の御葬地には後に御寺を營まれ清瀧寺と稱せらる御法名をも改め清瀧寺殿と
 申奉る大樹寺にては常法院殿隆岩長越大居士とぞあり御年もわづかに廿二歳よわたらせ
 られ父上にもまさせら給ふほどの御武容なりしをと當家も他家もあしめておとしまいら
 せぬ者ぞなかりける(編年藩譜服部野中家譜大久保物語)
 按るに信康君の御事は實に止事を得たまはぬ勢に出し事にて今是を語れば扼腕發憤
 して涙どいめあへず父子恩情の尊卑貴賤賢愚の別有べきあらねど其時の盛慮のほどお
 しはかり奉るもいとわづかし此後服部半藏御前に有し時鬼といはる半藏も主の首を

討つたかりしやと仰ありしを天方山城守聞傳へて大に恐れ終に逐電して高野山に閑居し年を経て後越前の秀康卿に仕ふといへり又大賀彌四郎が説にて父子の申平らうならざる事として後に悔仰せられたる事もあり又幸若といふ者が満仲の舞をうまてたるを御覽したるに其舞に満仲が子美女丸を郎等の仲光に討て参れと命せしに仲光吾が子美女丸と同年成しうべ其首討て出しける様を舞しにつくくと御覽じ大久保忠世にも天方にも此舞を見よとて御涙をもよふされし事なども世々傳へき兎にも角にも其思召うしこくも哀れありける御事なり(原書より御母子の怨靈など怪靈の説を考るす今ことごとくとらざ)

北條精三和陸 付三峰山伏兵の事

上杉謙信没後其養子三郎景虎喜平次景勝兄弟國を争ひ合戦止む時ある三郎は北條氏政の弟なり北條と武田の縁者の事あれば氏政より四郎勝頼方へ三郎を見繼がせられよと頼まつつゝはしたり勝頼早速領掌し小田原よりも江戸の遠山は常永中條爲岡太田小笠原北條治部等都合二万五千の人数出動するよしなれば勝頼は其手合に二万の人数を催し越後の追津とい

ふ所迄出陣す喜平次景勝かくと開て大に驚き思慮をめぐらしけるに勝頼の出頭長坂跡部每度賄賂を貪り是非黑白の沙汰するよし聞たれば忽計を廻らし謙信が貯置たる軍用金若干取出し長坂跡部へ縁をもとめ二千金つゝ賄賂を送り勝頼への金壹万兩を進物せし其上勝頼の妹君を中受て妹嫁となし下されば永く御旗下と成り御下知に隨ふべし又謙信より傳來せし上野の所領をも寸地も残さず進上すべし景勝に加勢して三郎を亡ぼし給へらば此恩永く忘るべからずと送る長坂跡部兩人忽に二千兩つゝの賄賂を悦び信玄公御在世に國中の僧俗おしなへ課金を召されしにやうく七千兩集り然るに今手もぬらさず一万兩の金に上野の國うへて御手に入る事信玄公にも優りし常御代の御武威之懦弱表裏ある北條とは手切して景勝に御一味あらん事眼前の國益之天の與ふるを取らされば殃ありとの古言もい得べ信玄公御代長嶋の一向宗寺へ御縁組ありしお菊御領人を引かへ景勝妹嫁君とせられんゆゑ尤相當の御縁あるべしと種々詞を巧にすめしかば勝頼も利慾に耽り忽に北條と約束を違じ人数を引返す氏政大に憤りしかと初春の事故越路は雪深く馬蹄あつみて北條勢遅延する間に三郎の景勝がためよ討負て腹切てうせぬ勝頼の一万兩の金と上野の所領

を得て大に悦び七月に至り妹菊姫を景勝の妻として入興せしかば北條一家の怨恨骨髄に徹し氏政朝比奈彌太郎泰成を便とて濱松に使し勝頼の不義を告て今より永く和睦し其上徳川殿御媒介にて織田殿への交通せん事を願ひけり神君御領掌まじしく九月四日御誓詞を取かひし給ふ織田殿も神君の御媒にて北條と和睦し給ふ勝頼是を聞織田徳川北條の三家一味して勝頼一人を抑倒さんと内通すれば終に勝頼滅亡するまでも信長如きの旗下にあらむ事御旗楯無も照覽われ中仕るまじと屈せし色もあく冷笑して居たりし流石猛勇の大將なりと聞人悉く感ぜし之九月十三日には勝頼また一万六千の人数を以て駿州沼津に出張す北條氏政も豆州三島に旗を立て對陣すれば其由開召北條御手合のため近日御出馬あるべしと御陣觸あり同日大須賀康高は高天神城外三峯山に伏兵を設け城兵をおびき出して討むと計る敵是を知て其伏勢を退拂はんと城兵討て出しが横須賀勢嶮岨に據て戦ひければ味方大に勝利を得て城兵あまた討取る其中にも坂部三十郎城中剛兵中根剛右衛門を討取たり久世三四郎は敵若干射落しけるが一の矢は敵を射通し其矢松樹にあたりて立しとぞ城兵残少なに打ちされ皆く城へ逃入たり凡康高日矢高天神の城兵と苦戦して久世坂部渥

美等堅を破り強を討て高名枚舉に暇わらず(基業編年甲鑑原書此外に高天神殿手更替軍次に高天神刈田軍また北條にも渥美が高名數々をのせたり皆諸書にのす且年月もしるさず證とすべき事あり故に今此類の無證の言はみあけづり去るなり)

駿州持舟落城 伊呂退口の事

九月十七日神君は北條と御手合のためはや遠州掛川迄御出馬あり酒井忠次は小山高天神を後になじ嶮岨大河を越て深く駿州に入たまはん事謀事さきに似たり瀬戸に屯して敵の變を伺ひ給ふべしと謀ける神君我北條と約せり何ぞ食言せんやとて直に御馬をすゝめ給へば忠次さらば某は瀬戸に屯し敵の變を見はかるべしとて殘たり神君十八日又は田中城を左に見て海に隨ひ二上山より陣せらる十九日には松平甚太郎家忠牧野右馬允康成松平周防守康親を御先手にて持舟(用宗と書しも同じもちむねとよむよし)神原一學長俊が駿河國志に見へき)の城に攻かゝる城將三浦兵部義鏡向井伊賀守勝政等少しも屈せず失炮を飛し防戦するといへども守手火水になつて力攻にして牧野が勢一番に乗入たり周防守が隨一の郎等岡田竹右衛門元親城將三浦を討取る一色左京義堯此頃此勘氣を蒙り周防守が旗下に寄食せしに

竹右衛門の三浦が首を討せ此首を御本陣へ持参せしめしかば一色御勘氣も御免あり竹右衛門が情ある舉動御感に預る（原書に一色左京尾崎半平を城兵にして守將を討に作が誤之今柏崎物語によつてあらたむ）向井伊賀守勝政をば松平甚太郎家人尾崎半平重政討取て城の忽ち落たりけり神君直に軍勢を進め由井倉澤邊まで焼拂せしめらる勝頼の其頃沼津に新城を取立てて築地の上にわがりて指揮して居たりしに由井倉澤放火の煙見ゆる所へ蒲原の地下人來りて其よしを注進す勝頼衆人の中にて是を聞て高聲に叫けるに北條徳川も合せ相狭て勝頼を討むとする北條の關八州の大守たり徳川の海道一の弓取なり此兩人を前後に敵とし合戦を遂る事勝頼が悦着是に過ず去ながら氏政の大方合戦のいやとやべし徳川も勝頼が向ふと聞は駿河に足り留むまじと傲放なる大言し扱北條方へ使者を以て遣しけるにかねく仰合されし通り徳川の今度駿州へ乗入て持舟城を攻落し只今由井倉澤邊まで焼働す其陣所へも烟先見へやべくし勝頼の徳川と戦んより北條殿の大軍と一戦を遂たく存し黄瀬川を此方へ御越ひて雌雄を決せらるべきか又勝頼黄瀬川を打越しての勝負を仕るべきや貴客次第にいと送り直に陣備を定る所に使者歸り來り氏政の返答をすの我等領分用心

のため是迄出馬せしといへども更に戦を望むにあらす徳川どの御合戦の御勝手次第にいとの事なれば勝頼聞て氏政が柔弱とこそ思ひつれど大に嘲り笑けり廿日には典麻に高坂源五郎城意港父子三千餘人を添て北條が押とし勝頼の直に徳川勢と一戦を遂んと進む所に長坂跡部兩人長篠にて左様に血氣にはやらせ給ひて大敗を取給へり今日は浮島も御滞留有べしとすは此兩人が予詞は善悪是非をえらまず用る勝頼おればやがて何成に備を立て時刻をうつす間牛時頃より大雨しきりに降出て富士川漲り越がたく見ゆ勝頼怒て自身一番に進み逆巻水に乗入を見て一万二千の軍兵とも何かは少しもためらふべき一度に乗入て押渡らんとするゆへ歩卒溺死せる者若干之徳川勢此時は伊呂尾に陣したる所大久保忠世が從兵島孫右衛門が切越後といふ僧殿府より來りかくと注進す神君然らば此所より逆寄して勝頼を討取へしと仰せけるを石川數正大須賀康高田中の城を後に置て敵地に戦はん事然るべからずと陳て藤枝の稻をかりとらせ大須賀と松平周防守を後服にし大井川の上伊呂漸を越て遠州の地へ引取給へば酒井忠次はかねて瀬戸崎へ扣しが此時出て後服し勝頼安部川を越る頃味方物軍何事なく騒動す大久保忠世御本陣に大挑灯を高く竿の先に結付立置て只今より軍を引

返し合戦有べきぞ御本陣の跡を見よと呼はりたれば惣軍夫にて静り馬筏を組て各無難に伊呂を越たり勝頼身をもみにもんで長驅して来て見れば徳川勢先刻引拂ひあど寂々空々として人影も見へず勝頼長歎息して言けるはかゝるまじき長篠にてはかゝり又慎まじき此度は慎て何成に陣し徳川を伊呂まで取逆したる事返々も残念之駿河の内にて押詰て徳川をさへ討て取る時は信長大軍ありとも一人にて合戦はかゝるまじき今度徳川を討取三遠を一統し明春尾州へ發向せば勝頼が鋒先を二度立て直すべきものを今度徳川を取逆たる事勝頼が運の盡なりと涙を流し廿五日甲州へ引取ける氏政の高坂源五郎が足輕大將小幡山城につき立られ相州へ逃歸る神君の勝頼が歸陣を聞召十月朔日に濱松へ御馬を納め給ふ(此一條基業編年大成記等簡に過たり甲鑑の説尤審なり但し甲鑑に八年とするの誤なり)

今川氏眞響應付遠州所々軍の事

今川上総介氏眞の小田原を逃出て濱松に來りければ神君の舊好を思召懇に御扶助有しが近年都にの哥達歌蹴鞠の朋友多ければ徒然慰む事も有るべきりと京洛の方に徘徊せしに今度遊倦て又濱松に歸り來る神君猶も舊好を捨給はず氏眞今の雲水にまうせし涙ををりく戀

にもてなし給ひ十月九日濱松城に招き給ひ善美を盡し響應し給ふ御仁心ありがたりし事なりと氏眞のや迄もなし見聞もの感歎せざるありし是より先九月末に武田勝頼の高天神に守兵更替せしむとて岡部丹後守相木市兵衛に上野士數十人孕石主水大河内傳左衛門に千余八江馬右馬允横田甚五郎を監軍としてつういしける十月九日神君懸川城へ入らせ給ふ廿一日大須賀康高の川上村にて高天神の城兵と軍と坂部三十郎久世三四郎渥美源五郎例のとき勇を奮て城兵の首七級得たり十一月七日に松平主殿助家忠渡坂に伏兵を設け置甲州勢の來るを待て急て討て出る甲州勢思ひもよらず大に敗走するを追討して騎士の首五級討取小荷駄三十疋を奪ふ二十一日大須賀康高また川上村にて高天神の城兵と戦ひ久世坂部并鷲山傳八氏家金四郎近藤武助菅沼兵藏等高名す廿五日勝頼又駿州田中まで山陣し二十六日高天神城に入らし聞へければ徳川勢松平主殿助家忠をはじめ諸將見附の脇に出陣す勝頼何とぞ思ひけん戦を交えず國安川を越て駿州へ引入れたれば味方も濱松へ引返す(基業編年大成記)

天王馬場軍付遠目坂軍の事

今年も合戦の間に年の矢もいるが如く光陰うつり天正八年庚辰になりぬ正月五日神君從四位上に上階し給ふいとめてたし三月十六日高天神城兵等天王馬場に出張すれば大須賀康高中村砦より軍をすゝめて合戦す例の如く久世瀧美坂部菅沼鷲山傳八氏家金次郎等先登して合戦し首級を得る本多平八郎忠勝が屬兵内山忠三郎日置小左衛門等も争ひ進んで本多古人數にて的場曲輪を乗破る味方の御目付松平嘉兵衛之綱より此旨濱松へ注進すれば神君も今日御出馬あり高天神の向城大坂三井山を修理せしめ中村の砦を改築し田中の砦をも築りしめ閏三月五日高天神邊御巡見有て八日濱松へ歸らせ給ふ持舟の城の先に攻落すといへども地利よりらされば味方捨置しを勝頼再度修築し朝比奈駿河守氏秀を籠置ぬ五月朔日また濱松を御出馬あつて三日駿州田中の城を攻られ四日花澤の早苗を踏荒し五日の田中の麥を刈らせて惣軍を引返し給ふを見て持舟の城に矢部彌三郎等味方の退口を喰とめんと打て出たり石川伯耆守後殿して味方の人數ことごとく遠目坂を下り終て返し合せ安藤與十郎正次眞先も進む矢部彌三郎を切て落す松平周防守鳥居彦右衛門平岩七之助をはじめ諸將大返しに打てり、れば城兵散々に敗北す味方水野彦九郎深入して討死せしが菅沼藤藏其敵を二騎討

取又朝比奈小隼人を馬上より二刀切て落し朝比奈監物をも討取る天野小麥右衛門重次の朝比奈市兵衛を討て敵の殘兵の皆城中へ逃入り御勢の難あく牧野の城に歸陣あり此後も神君度々御出馬ありて或時の高天神の外廓を放火せしむ或時の城邊の稻を刈とらせ又或時の田中小山邊の稻を刈らせ給へば城兵大に困窮す七月廿五日にも小山城まで御出馬ありて刈田させ給ひしに松平周防守家人岡田竹右衛門當時洪水の時節あり勝頼又甲州より出馬せし聞へあり早く御歸陣然るべしと諫め奉る神君尤とて早々大井川を越て牧野城へ歸り給ふ其夜大雨にて大井川暴に漲り又翌日勝頼大軍馳來るといへどもはや御歸陣の後なれば後悔すれども甲斐ぞあき（原書是等の事皆脱して記さず瀧美が首とする數件のみのせたり今の大成記基業編年によつて改む但基業遠目の軍に三浦兵部向井伊賀討死す誤之編年によりて改む）

高天神城兵請援于甲州付笠原新六郎の事

秋に至りての高天神の守兵岡部相木等困窮してものゝ運署を以て甲州へ送らける織田徳川の武威次第に強くあり當城も秋山伯耆守籠りたる濃州岩村同前終に城をも取られ番兵の悉く討果さるべく候只今の内は御屋形様後詰を成れ番兵共を御引取下さるべしとあ

りしに横田甚五郎一人別に飛脚を以て送りし今度屋形さま高天神へ後詰の儀は思存と
 いまり給ふべし其子細の假ひ屋形さま御旗出されしとも番手の衆御引取なるとりかりに
 て城を御捨あるへく又例のごとく城を御捨さるとの事に候ゆ徳川勢會釋して
 喰留をき信長の大軍を引出し可なり其時の味方又大敗軍とあり武田家の武威滅すべし織
 田徳川の兩勢にて金谷を打越本道を駿河へ働き御跡を取切すべし北條其時甲州郡内上野信
 濃へ働き出ゆゆ由敷大事なり織田徳川合て北條國の大守を敵としむかも海道一番の弓
 取徳川の居城へ上道五六里隔し高天神へ番手に參るにより命の捨たる者共之此所にて君の
 爲義の爲に命を落さず又何時を待べきや夫とも是非御救ひ有べきとあらば割符を下さ
 れ月日を約定せられ惣買坂まで御旗を見せたまひ城兵切て出べくはそれにて十に九の
 生て歸國の覺束なくし考うし左様に仕らば城兵共後詰を待りぬ切て出討死仕たるも有て
 屋形さま御威光の疵に成るまじくし屋うた様後詰なくして番兵共切て出ゆとも甚五郎の
 強敵を切抜歸國仕べくしとの事之勝頼大に感じ甚五郎が祖父横田備中大剛の兵にて信務上
 田原にて討死し其父十郎兵衛ももとらぬ剛の者三州長篠にて討死す父が實父原美濃の甲州

の摩利支天と呼れ隠なき猛士今甚五郎父祖にもとらぬ武功者年のわづらに廿七歳弓矢の
 つもりの五六十の者にもとへたり我等が爲の忠節格別にて感稱大方ならず長坂跡部の長
 篠より後の以前と相違し畏縮したる評議計りして今度高天神後詰の延引になしたりされど
 も勝頼猛將ゆへ此儘手を空しくして高天神を救はず世上的批判いりあらんさらば東上
 野を巡見し小城の一二も攻落すべしと甲府を出馬し大胡山上膳等の城を順見し侍大將共も
 旗計りもたせ諸勢素肌にて供せし處俄に土屋物藏手より膳の城へ攻付即時に城を乗とる此
 猛勢を見て東上野の城を望て降參す父信玄のやに及ばず昔の義家義貞よりして素肌の
 城攻のいまだ聞も及ばぬ手からり勝頼のたゞ是神將ありと世人驚歎するを聞北條家隨一
 の老臣松田尾張守窓秀が長子笠原新六郎範秀豆腐戸倉城を守りし此者資性貪慾無道の佞奸
 人されば譜代重恩の主を捨て忍に心を離し勝頼へ所縁を求め十二月下旬勝頼へ降參し豆州
 へ打入給ひ先手を勤んどて城を開渡す勝頼大に悦び戸倉の城へ信州先手海野に新六郎差
 添て籠置たり徳川家にて高天神附城橘谷にむかひ野部坂火が峯鹿が鼻大坂山小笠山万福
 寺六所に砦を設け日夜に高天神を攻らる同月廿二日織田殿より檢使として長谷川藏五郎西

尾小左衛門猪子兵助福富平左衛門來りしかば城攻の諸柵を見せしめ響應あつくもてあして
歸し給ふ(甲鑑編年)

高天神落城の事

はうあくる年も暮て天正九年辛巳にうつりぬ高天神城兵糧米のつきはてたり甲州より後詰の
來らず城を捨て切ぬけんと思へども城下諸柵嚴重にして翼あければ此城を脱出へき様もな
く進退爰に極まりぬ其時大久保忠世が守りたる林谷口の高山深谷わりて前より六笠掛川牧
野の城番に大坂横須賀の皆之神君横須賀に御陣を張り給ひ忠世是を頼み纒に守兵六騎を置
たり城中にも此口守兵少を知て此口より切抜んと岡部丹後長保横田甚五郎尹松相木市兵衛
昌朝始め究竟の逞兵共今夜の二更の頃二手に分て切て出たり忠世が弟平助忠教等守兵六騎
に合て十九騎是に向て戦ふ所に平助の岡部丹後を突落し其家人本多主水首を取る時に主水
十八歳之(寛譜)横田の兼ての大言に違はず大久保と大須賀が柵を破て甲州へ立歸る殘兵の
石川長門守康道と足助勢の守る鳥原へ切てりゝるもの三百餘人石川が備嚴重にして三百人
散々に敗れ深谷に陥り死者も少うらずされども殘兵猶圍を突て出んとするに本多平八郎鳥

居彦右衛門むかへ討て肘金曲輪まで追込て討立れば水野惣兵衛其子國松(後日向守勝成)大
須賀五郎左衛門争ひ進む此時久世三四郎は城兵依田空右衛門を討取松平孫六郎康忠は大手
の櫓を燒落す松平主殿助が家人板倉空右衛門勇を振て力戦し其弟喜藏討死し大須賀が屬兵
坂邊齋山渥美以下高名せざる者あし是より先神君高天神落城せば敵必ず國安へ落行へしと
内藤三左衛門信成と菅沼次郎右衛門忠久を國安へ遣はされしが果して落行敵十三人討取つ
たり既にして味方に討取首七百三十級城すてに落ければ石川伯耆守城に入て小笠原與八郎
が武田へ降参せし日より石獄の内へ入られ戒め置し大河内源三郎政局を搜し出し御前に伴
ひ出ければ神君多年の艱苦を憐み給ひ刀脇差並金銀を下され後に所領の地をも賜はりき又
忠世家人三倉忠右衛門は城兵孕石主水を生捕たり主水はもと今川家人にて神君は幼稚にて
今川が方にましくける時も種々不禮をふるまひ三河の倅にあき果たりと罵り其後武田へ
降参してつねに御敵をさしければ今度生捕と成りしに孕石は昔より我に厭果たりとすせし
者なれば我に用なき者として誅せらる小栗又一も度々高名し今度もよきもの生捕來れば御
勘氣をゆるさる抑此高天神の城は去天正二年小笠原與八郎が勝頼へ降参せしより今年に至

り八ヶ年が間大須賀康高横須賀に有て日々夜々攻戦ひ竟久世坂部渥美柘植鷲山淺井松下に死を願す働しが今日終に攻落し二十四日神君濱松へ凱旋まし〜大須賀を始め數年の城攻今度の戰功を賞せられ各恩を謝してしばらく居所へ立歸り休息しけると之（此一條原書尤誤多し基業編年によりて改む）

正校 三河後風土記第十六終

正校 三河後風土記卷第十七

三州十八松平家の事

松樹千年の色常盤堅盤よ改まらず本文百世聖子神孫の御あがれにや榮に榮いせ給ふ御吉瑞十八公の名にしめいて三河の松平御一門十八流に分れ今も其末よの天地とにもに長久に繁茂し給ふと是まうしあがら天徳に叶いせ給ふ神慮に應じまじませし御事を仰ても猶仰ぐべき事ならずやそも〜三河より出たる十八流といへり

- 一第一 徳川家は是の御本家をさしていふ
- 一第二 竹谷家和泉守信光君御長子左京亮守家の流（松平兵庫頭信善が祖）
- 一第三 形原家信光君御四男佐渡守與副の流（松平紀伊守家忠祖）
- 一第四 岡崎家信光君御五男紀伊守光重の流（光重より彈正左衛門昌安に傳へ岡崎家と稱せし所昌安より岡崎城を清康君に獻じ徳川家安祥岡崎を兼領し給ふにより光重が流は太草村に居住し太草松平と稱す（水戸家司松平壹岐守志摩守祖）

- 一第五 御油(又五井)家信光君御七男彌三郎元芳の流(松平外記忠實祖)
- 一第六 深澤家彌三郎元芳二男大炊助忠景の流(松平主殿頭忠總祖)
- 一第七 能見家信光君御八男次郎右衛門光親の流(松平市正英親祖)
- 一第八 長澤家信光君御十一男源七郎親則の流其子益親より重親昌親直親直忠政忠康高七代の間皆源七郎とて後に上野介と稱す康高が上野介康忠に男子あり女子三人あり有馬玄蕃頭豊氏遠藤修理亮慶利本多出雲守忠朝が妻と成る神君長澤の家の斷絶すべきにわらずとて上總介忠輝朝臣をもて相續せしめらる直親が弟右馬助某が家の大河内金兵衛秀綱の二男右衛門太夫正綱をして繼しめ給ふ(松平伊豆守信綱祖)
- 一第九 岩津家右京亮親忠御長子親長に岩津城を譲り給ふ岩津太郎と稱す此流の斷たり
- 一第十 大給家といふ親忠君御二男源二郎乘元の流(松平和泉守家乘祖)
- 一第十一 瀧脇家親忠君御九男加賀右衛門乘清の流(松平丹後守重信祖)

- 一第十二 (長親君御流)福釜家長親君御二男三郎次郎親盛の流(松平右京亮康親等祖)
- 一第十三 櫻井家長親君御二男内膳正信定の流(松平遠江守忠政祖)
- 一第十四 東條家長親君御四男甚太郎義春の流義春子甚太郎家忠死て子ありしうば薩摩守忠吉朝臣を以て相續せしめらる松平周防守康親は此家人にて勳功により松平を賜ひし
- 一第十五 藤井家長親君御五男彦四郎利長の流(松井山城守忠國伊賀守忠晴の祖)
- 一第十六 三木家藏人信忠君御二男藏人信孝の流(松平九郎左衛門忠利祖)
- 一第十七 鵜殿家信忠君御三男十郎三郎康孝の流(松平與右衛門政重の祖)
- 一第十八 押鴨家櫻井信定より六代宮内少輔忠頼が庶子談路守忠直が筋といふ都筑が家の譜には信忠君の御子に佐渡守親直といふものあり清康君に御弟にて三州押鴨に住居し其子を宮内太輔忠康といふ是都筑が家の祖ありと云此家の中には絶たるもわれども又寺流數十家蕃衍せしも有りて神君より御代と分流し給ひしも數多にて世々をかかねて益盛り成る事こそかこけれ

三州諸士元三御禮の事

御當家三州岡崎御居城贈大納言廣忠卿の御時より正月二日御一族并國主衆御禮次第を定め
 左右の着座を分たる着座の一番の鶯殿八郎三郎康定二番西郷孫九郎家員三番形原の紀伊守
 家忠四番大給松平和泉守親乘五番櫻井の松平内膳正信定并東條の松平右京亮義春兩年隔年
 に一人づゝ着座す先年信定義春兄弟の事されば信定の次は義春着座の事なりしが信定の度
 御敵と成りし後降参しても兄弟兎角不快にて毎度座班を争ひければ夫より日を替て出仕
 する事との成りし之(大久保物がたり)義春が病死後甚太郎家忠が時其家老松平右近忠次櫻
 井と東條とは兄弟の家筋なりといへども櫻井の度と叛逆し東條の二代忠義を怠らず此子細
 もい得ば櫻井の座席を東條に下さるべしと願出たり廣忠卿其願ことわりありと聞召御許容
 有し故甚太郎家忠の五番の座と定まる一兩年過て信定降参し其翌年正月早朝より出仕し東
 條家にもこといらす五番座に着す甚太郎出仕して見れば信定はや五番の座に着して居たり
 甚太郎氣量ある者あれば物もいはず信定が上の座につく信定是を見て此座の我が座之甚太
 郎庶子の筋にて殊更我等が爲にの甥なり何ぞ叔父を越て上座に着べけんそのけと罵れば

甚太郎うらくと打笑ひ不義不忠の働して叛逆し漸々只今降参したる櫻井と二代迄忠勤を
 盡す東條と何ぞ座席を争んやといへば信定いよく憤り是の我が本座之只罷立とのしる
 東條の家老松井左近進み出信定宣ふ所更に心得いはず此座席の東條二代の忠義によりて廣
 忠卿下し置れたる甚太郎が座席にてい左程此席がほしく何ぞ度々叛逆不義の働をふる
 まられたるや降参せし不義者が忠義無二の東條家の席を奪ふ事叶ふべきやと罵れば信定語
 塞りて益怒り刀に手をうけ松井左近を討果さんとすれば此方にも甚太郎左近は一所に成り
 て信定を討んとし雙方鬭争に及んとす一座の面々やうく雙方を抑留し信定を追歸し甚太
 郎本座に於て御禮す其後御一族の面々もさまく甚太郎を宥め廣忠卿も御内意ありて以
 來の兩人隔年出座すべしと定りたり六番の長澤の松平上野介康高此康高始の竹谷の松平御
 汕の松平より下座ありしが廣忠卿妹君にそひ給らせたるより其上に座する事と定らる康高
 卒して此妹君の酒井忠次に嫁し給へり七番の竹谷の松平立藩頭親善八番は御汕の松平外記
 景忠九番の深溝松平主殿助家忠十番の二連木の松平丹波守康長是の元來戸田氏之しが忠勤
 によりて松平を賜ひし是より以下群衆の御禮衆數多ければもらしつ

御謠初着座の事

正月二日御謠初着座の人々の座班の

左座

鵜殿八郎三郎康定

松平紀伊守家忠

松平内膳正信定

松平甚太郎家忠 壹人宛

松平外記 景忠

松平主殿助家忠

右座

西郷孫九郎定員

松平和泉守親乘

松平上野介康高

松平玄蕃頭親善

松平丹波守康長

斯の如く座班の上下毎年相定る所之此下座席へかゝる衆の年々替りて上下不同あり然ども大概着座の輩の

本多豊後守康重

菅沼新八郎定盈

鈴木兵庫助重顯

松平周防守康親

鈴木越中守重愛

本多總殿助康俊

牧野右馬允康成

牧野新次郎忠成

其上の此輩の外一人も出座せざりしが追々今の數輩出る事と成りぬ凡元日の近習二日の國衆其外與力の輩の定日なし又御一門の輩にも松平藏人信孝三左衛門忠倫三藏忠就權兵衛重弘宮内少輔右馬允善兵衛二郎右衛門右衛門助十郎出雲守喜藏其弟彌右衛門勘四郎信一とどの定まれる座席あり又設樂甚三郎貞通の其始藏人信孝に従ひ座班に入らざりしが近頃出座して西郷孫九郎が下に座す與平九郎信昌の松平丹波守より次なりしが近來の御謠君にありければ上座と成るされども毎度着座の爭論あるにより御謠初にの出座なく其後遠州濱松御在城よりしては松平御一族上座と成りて他門の輩競望を得ず按るに以上の三條此所に載るいわれなきに似たり然に中興系圖纂に十八松平の名目を引し又畠山牛庵が家藏とて系圖纂に改めたる古書の中に三河松平座席次第といふを載る所本文に同じければ古く言傳へし事有りとい見ゆ仍て今姑く原書の次第のまゝ愛又載て少しく斟酌削正するものこ

木曾左馬頭謀叛の事

信濃の國木曾左馬頭(大成記伊豫守)義昌は左馬頭義仲十七代の後胤木曾源太郎義康が子也
 世々信州木曾を傳領す(木曾世數寛系並系圖築馬場系に寄る)然るに近年甲州の武田信玄
 近國に猛威をふるひ村上左衛門督義清小笠原大膳大夫長時等皆信州を追出されしを見て木
 曾も其威に恐れ武田と和睦して其旗下に屬しければ信玄大に悦び其女を嫁して義昌と一家
 同族の好みを結び禮遇を厚くして懇にゐてなむけりしかる所信玄歿後勝頼は長坂跡部が
 讒言を信用し木曾に待遇以外の外薄く其上被官郎等同様に不次の課役をかけ暴逆をふるまふ
 依て木曾が一家の輩家人下々迄大に怨を含みしかども是非あく年月を送りしに長篠敗軍以
 後勝頼が武威漸々衰へ國中叛者多きを見て時節よしと思ひけん濃州苗木の遠山久兵衛友
 政にたよりて織田殿へ申入けるは義昌身不肖にはい得共清和源氏の嫡流八幡殿の末流武田
 は新羅三郎の後胤あれば庶流之しかのみならず當時義昌は信玄の望勝頼が爲には姉姪なり
 かたく禮義厚く受くべき所勝頼無智暴厲にして讒臣の言のみ信用し常に非禮をふるまひ
 被官郎等にひどしく課役を置いて驅使すると怨尤深し今より右大臣家の旗下に屬し臺駕甲信
 の間に御發向わらんには義昌先鋒とありて身命を捨軍忠を抽べしとぞやさせける友政岐阜

へ参り其趣を傳へしかば三位中將信忠卿平野勘解由左衛門を安土に遣ひし信長公御旨を伺
 りる(天正四年より信長卿江州安土に新城を築き遷り濃州岐阜をば信忠に譲らる)信長公
 此時の伊勢大神宮造遷宮の沙汰せられて居給ふ命申かくと聞れやれ吉事之木曾路が塞て
 あればこそなれ木曾路が明々早々甲州へ攻入にいとやすし(柏崎物語)されども木曾の無類
 の險阻と聞及ぶも義昌にあさむかれ難所へ欺引入られて軍必難義及ぶべし義昌眞實
 又降参の心ならば主従か人質を送るべし誓約堅く取かためて後出軍すべしと下知せらる平
 野歸りかくとせし信忠卿其旨を友政に仰ふくめらる友政其旨に義昌織田殿台命道理亦
 りとて弟柘植藏人に家老共の人質添て岐阜へ参らせければ此上の子細あらじとて出軍の用
 意せらる爰に木曾が方に義昌が妻の附人に甲州より遣ひし置し千村左京此事を聞出し甲州
 の阿部加賀へ内々木曾異心のあらまし告る所長坂跡部信用せず其中に彌實事と成りけれ
 ば勝頼大に驚きさらば勢の附かざる先に誅せよと天正十年壬午正月廿八日典座信豊三千
 人仁科五郎信盛二千人に諏訪越中守昌豊等とそへ神保治部を旗本より檢使とし木曾が城へ
 發向する義昌は千村が内通り知らず時日を移し織田勢の到着を待べしと思ひければ甲州へ

使を立て種々陳謝するといへども勝頼更も信用なく彌討手向ふと聞て木曾か方ふも千村豊前馬場半左衛門萩原十右衛門上村作左衛門等を鳥居峠に待受て防戦す此所の日本第一の嶮阻まれ容易に攻落すべき様も亦くこゝを専途と防戦すれは奇手散と戦負て典麻が先手諏訪采女同弟源次郎討死し其外若干討れたり理りある哉地理の極めて嶮阻なり其上去年より降つゝきたる雪の積りて春ども知らず寒き堪たたく軍兵共手うゝみ四躰こゝへ働得ず然れども典麻も信盛も我の討手として大勢引具し向ひながらゝる小敵に手間取て日數を送るとやのゐるとて惣軍に下知し心をひとつにして嶮阻切所の嫌ひなく射れども討とも少しも屈せずさきさきひかゝるを見て今度の木曾が勢ありとどや思ひけん敷原に火を放つて引退き南宮の城に入て嶮阻に據て計策をうまへ奇手を追ふと引付て矢炮きびしく射立打立ける程に奇手案の外に畏縮して色めき立つて見へたる所に時こそよけれど城兵とつとあめきて木戸押開き切て出れは奇手まばらしく城外より立すくみ雪風に凍果たる軍兵散々に切立られ右往左往に散亂す檢使神保の典麻五郎の兩大将を延さんと踏留て討死す其間に兩將の辛き命を助りりて引退く此事甲府に注進すれば勝頼大に怒り然らば自身馳向て木曾が一族一

首切て謀叛人のこらしめせんと甲斐信濃上州の軍勢二万余騎引卒し二月二日甲州新府(信玄の古今絶倫の軍謀妙策の副將にて甲州中に城を築く古府の尋常屋鋪構にて生涯敵を國中に引入ず勝頼代と成りては織田徳川を敵にうけ城なくしていつなふべうらずと穴山梅雪諫て新城を築らしむ是を新府と云甲州垂崎といふ地之天正九年七月より營築す)を發向し信州諏訪上の原に屯したり(大成記基業甲鑑編年)

織田勢發向付伊奈下郡平均の事

武田勝頼自身大軍にて木曾よむかふよと聞へて木曾は織田殿に加勢給はらん事を請ふ信長遠山久兵衛を木曾に加勢せよとて遣はされ追付我等父子も進發すべしと仰下さるかくて天正十年二月九日軍令を觸られ信長公七万余人伊奈口よりむかはれ信忠卿は五万余人木曾口へむかはるべし金森五郎八長近は三千人にて飛騨國よりむかひ徳川殿は三万五千余人駿河口より甲州下山筋へ御發向有るべしとの事之北條氏政も此告を聞て三万余人を引卒し武蔵の口にもむかふべしとぞ膝し合す信忠卿の先手灘川左近將監一益毛利河内守秀頼河尻與兵衛鎮吉等は先達て木曾口へむかひ國士共が降參の人質を取めためしむ勝頼は織田勢近日進發

すど聞て太に驚き愛かして諸將を手分し防戦の用意せんと先信州伊奈は東山道第一の險
 岨の地あれば此所にて尾州勢を防げど俄に平谷瀧澤へ要害を設け下條伊豆信氏其子兵庫備
 昌を籠たり然るも下條が一族下條九兵衛佐々木原民部熊谷玄養等織田家の猛勢にや恐れけ
 ん忽ち心ぞひるがへし瀧川毛利へ内通じ河尻勢を二月十二日城内へ引入て内外より
 り攻立れば伊豆父子防戦の術盡て城を捨て甲州へ逃歸る依て伊奈下郡は忽に織田家の威
 風に靡けり(基業甲鑑)

小笠原信濃降参付城々手配今福敗軍の事

信州松尾城の小笠原掃部助信嶺は新羅殿より五代小笠原信濃守長清が後胤にて(長清より
 十代太膳大夫政康に三人の子あり長子時長は今の小倉の小笠原が祖にて其時長が末弟伊奈
 六郎光康これ越前勝山の小笠原家之) 伐々此松尾の城に住したりけるが信嶺が父下總守信
 貴が(備後系には信濃守とす)時信州悉く信玄が手に屬しければ小笠原も信玄が被官と成る
 信玄同流の家柄ゆへ大に悦び遣送軒が娘を信嶺が妻とし姪孫とすされは勝頼が爲にも近縁
 にて廿餘年が間無二の腹心と頼けるが信忠卿の木曾口へむかひ給ふを聞て二月十四日(藩

譜)御陣に参り常國の案内者たらん事を請ふ信忠卿領掌し給ひ圓平八景春森勝藏長一をし
 て妻兒口より晴多賀寺(編年)より押入木曾峠を越へ梨子峠を押登る掃部助信嶺も其手合し
 て近邊所々を放火す是より先勝頼の伊奈郡大嶋城へ日向大和昌休入道玄東齋宗英を遣ひし
 同郡飯田へ保科越前正直を遣ひし同郡高遠城へ仁科五郎信盛を遣ひし筑摩郡深志城へ馬場
 昌房多田治部右衛門横田甚五郎尹松を遣ひし守らせけるが下條も逃歸り小笠原も敵と成る
 よし聞てかきぬて小幡因幡忠景波多野源左衛門常道を飯田の援兵とし道遙軒に安中七郎三
 郎春堀(編年)小原丹後秋清(一説昌盛)依田能登近番を大嶋の援兵とし小山田備中昌辰渡
 邊金太夫照小菅五郎兵衛元成初九郎次郎を高遠の援兵とし又徳川勢の押に駿河の鞍子
 へ室賀兵部持舟へ屋代越中守正國關甚五兵衛を遣ひし朝比奈駿河守を援兵とし依田右衛門
 信蕃三枝土佐虎昌を田中城に遣ひし守らせたり然る所二月十四日夜にまぎれ飯田を守りし
 保科越前坂西織部城を逃出落行の圓平八森勝藏殘兵を追討して伊奈郡市原迄旗を進む勝頼
 が大軍の上原に屯して長坂跡部が長評定に日數を送りしが先手今福筑前二月十六日鳥居峠
 にて木曾が勢と合戦す木曾が加勢遠山久兵衛友政力を盡して奮戦すれば今福大に打負て有

賀兵部小山田左京を始として四十餘人討死す跡部治部も討れたり木曾ハ其首共取もたせ信忠卿の御陣に持参し拜謁しけれバ(基業)信忠卿其大功を褒稱大方ならず義昌に感状を授けられ又織田源吾長益津田孫十郎信次稻葉彦六郎貞通丹羽勘助氏次等を木曾が加勢として鳥居峠にむろいせらるすべて松尾の小笠原が按内して木曾味方に伺候すれば織田勢伊奈木曾口を入事無人の境を行ぐ如し(基業藩譜編年)

大島落城 付 道遙斬典厥異心の事

二月廿日に信忠卿旗を進め信州伊奈郡平谷波谷を越へて飯田の城に着陣せらる此の城守將保科越前坂西織部援兵小幡因幡波多野源左衛門等の數日以前に逃去たり又大島城の加勢とてむかひたる道遙軒安中小倉依田等の織田の大軍近付たりと聞て大に恐れ道遙軒何と心替りや仕たりけん一番に手勢を引連逃出れバ安中小倉等の輩も追々忍び出て残る加勢一人もあし守將玄東齋大に怒りよし不義懦弱の援兵足手まどひにさるのみ頼むに甲斐なし此上の入道が老後の面目に力を盡し防戦し城を枕に討死し名を後世に留むべしと齒がとをさそ郎等共承り御詫潔く聞へし得共勝頼の御大事此一戦に限るべからず只今此微勢を

以て大軍にかこまれ大死せん事謀の拙きに似たり早く誰崎に歸陣し勝頼と死生をおあじく仕給へんこそ忠臣の本意とやべけれと陳れバ玄東齋も尤と得心し今夜ひそかに城を忍び出甲州へ落行しかバ信忠卿大島城へ入給ひ爰に毛利河内守河尻與兵衛をといめ守らせ信長公へも其旨注進あり信忠卿の直に飯島へ旗を進め小笠原掃部助按内者にて森勝藏團平八を前驅とし軍を進めらるれば信州の城も招かざるに降参するもあて風を望て潰崩するもわり信忠卿の威ハ信濃路にかいやり此頃諏訪上の原勝頼本陣にてハ明暮長坂跡部が長詮議に日敷を送りける城伊達其子織部當年三十二老功の輩にもまさりたる弓矢の功者にてや出けるハ我等と横田甚五郎も五千騎を預て先手となされ初鹿野傳右衛門小山田八右衛門に五千余を預けて後陣とし小山田兵衛小幡上總真田安房守に指揮をまうせ御旗本勢を二万餘仰付られ敵に一戦を仕つけ給へ然らバ織田勢も柵木を結事もかなふまじくハ味方勝利疑ひあるべからずといふ跡部加賀も某水破を以て敵の様子を見切ハ所敵の備立ハまばらにてきたりにいへば造作も亦く夜合戦に切とりやべくいと進しに勝頼も尤と諫を用ひしを長坂跡部遮り留め各々所勿躰なし兎角若き者のハ事を御取上げあるハ御運の未ありと妨けれバ勝

頼又其詞を用ひ因循として日を送る内に逍遙軒梅雪等一門も追々異心の風説あり典廐も兎角病氣とて五度の評席に三度の出座せずやがて勝頼へ告もせず諏訪を引取て別府に歸り居宅へ引籠る典廐既に斯の如き上の旗本の諸勢も散々に落失ければわづかに残る將卒千人許になりける典廐いうまればかく異心をあこしけるぞといへば長篠の戰場にて信玄より讓られし紺地金泥の帳を勝頼に取返へされし事深く怨みけるよりあこりしと云(基業甲鑑編年より採用す城阿部が諫のと原書にのちし)

徳川勢進發付小山田中持舟落城の事

神君に織田殿の告により三遠の勢三万餘騎駿河口より甲州へむうのせ給ひんと御用意ある所二月六日晚方酒井左衛門尉忠次より使を以て正月中より木曾と武田のはや合戦を取結ぶよしに急ぎ御出馬有べきにやと申上れば尤ありと御沙汰有て二月十八日瀧松城を御出馬ましく掛川驛迄渡らせ給ふ十九日牧野の城より御着陣御先手の金谷嶋田へ陣取たり遠州に山城を守る甲州勢の大熊備前室賀小泉等徳川勢を恐れ此十六日寄手の旗をも見ずして退散しければ同廿日に御先手大須賀神原酒井本多の輩志田郡田中城をせめて城兵の十餘

人討れしうと依田右衛門信蕃二枝土佐虎昌等城を堅固に守りいまだ落城せず一條右衛門太夫信龍の勝頼の身の上心もとなしとて甲州へ退散す(柏崎物語)廿一日御勢の遠目坂を打越て持舟邊迄陣を張る(家忠日記)廿二日持舟城より朝比奈駿河政貞(初ハ氏秀)家人奥向日向に數百人をそへて遠目坂をこへて押來る御先手石川數正酒井忠次本多忠勝大須賀康高柳原康政是を迎へ戦ふ甲州勢に須藤左門猛勇にて八方を切めぐり勇を振ひ戦けるを石川忠四郎重政が子又四郎重次初陣ありしが今年廿歳終に須藤を突伏て首を取るやがて御馬前に持來り實檢に備ふ此者いまだ初見の禮をもとらされハ何者ぞと問せ給ふ又四郎順首して某の石川忠四郎が子にて去去年四月父忠四郎某を呼て汝はや十九歳之我家を繼んと思は功名を遂て來れとて長吉作の天身の鎧一筋永樂錢一貫文授て家を退出し依て今度御陣に推參して只今の首級を得いと申上れば御威有つて直に召出も御家人に加へられも有がたき斯て持舟の加勢も來りも屋代越中關岡五兵衛も跡より人數を引具も此所まで押來りしかど是も徳川勢に討立られ敗走し直に屋代關口は甲州へ歸れば鞠子を守る室賀兵部も徳川勢押寄せざる先に砦を明て甲州へ逃去る廿三日直に持舟の城に押寄せ攻上る守將朝比奈駿河

防戦かゝはず降参し久能山へ退散されば松平主殿助家忠を以て久能山迄送らせらる久能山には今福丹後昌和守りいたるが是も砦を明て甲州へ退去せんと願ふ異儀なく其請所を免許あれは其仰を傳ふるとして本多八藏秀玄山中に赴き欺て今福を討果す殘兵の皆烏合の衆なればみな散りぐに逸失たり田中の守將依田三枝の猶も義を守り降参せず三月朔日(編年朔日柏崎八日)まで堅固に籠城せしむる二人の義心を感じられ成瀬吉右衛門諸岡山城兩人御使よて其義操を褒せられ信長の甲州の犬猫迄も誅せらるる旨に兩人早く城を出て我が領内遠州の山林よ身を隠し時節を待て然るべしわたら義勇の士夫死させん事歎けしければ今の我が命に従ふべしと仰下さる兩人誠に有がたき御誼を蒙りいつの世にうの忘れぬべき去ながら勝頼の存亡もいまだ存せず武田の家老共墨付を見されば此城退去仕難しと御請す是も尤なりとて其頃穴山梅雪既に降参したる事ゆへ成瀬諸岡兩人梅雪に其城早く明渡すべしとの消息一通をうせ城中へ贈りければ今の力も然しなから依田右衛門先年二股城をも大久保忠世に明渡したる由緒いへば今度も忠世に渡し度いと願ふ其心次第と有て忠世田中城を請取其後依田三枝の兩人御威の餘り御家人に召るべしとありしに兩人勝頼存命の間

御意に従ひ難し勝頼死後に必忠勤して御恩に報すべしと御請しければ彌御威有て勝手次第たるべしと仰下さる兩人感涙を流し依田の信州蘆田へ退去し三枝の伊勢の方へ退去せり小股平内左衛門政重の直に城を出て御家人と成る同二日に興國寺の守將曾根下野政清城を獻じて御味方に属し駿府城の守將武田上野介信龍同左衛門太夫信光は城を捨て甲州へ逸歸る(家忠日記柏崎物語二枝譜編年)

穴山梅雪降参付勝頼逸歸新府の事

穴山信君入道梅雪の勝頼が姉妹なれば甲州にての尤威望肩を並る者あり梅雪が子勝千代も勝頼が女子を合せて嫁となさんと約定して有し所典庶信豊其子次郎を以て勝頼の嫁とせばやと思ひ長坂釣閑跡部大炊介兩人の權臣并大龍寺隣岳和尚等に賄賂を若干おくりて懇に頼みしうべ此者共忽財貨に心を傾け各相計つて勝頼へやける穴山勝千代殿の公の姫君との御性相克なれば行末災難あるべし御縁を結ばれん事然るべうらず典庶の物領次郎殿の御性の相生にあひせば末御繁昌疑ふべからず夫のみならず次郎殿に容貌才智も勝千代殿との同日の論にわらず其上典庶の甲州隨一の大名之姫君の行末を思召給ひる穴山殿の御縁

組の御變約有て次郎殿を録君とあし給ひ然るべしとぞやける勝頼の長坂跡部が事馬鹿を鹿ども欺られ悪を善と信用す又嶮岳和尚師依僧の事ゆへ其諫をば非をも是と思ひ忽に穴山が縁組を變換し典麻の長子次郎を録君と定めたり梅雪大に恥辱をうけ面目を失ひ梅雪が妻のいとど怨怒りいうにしてう此怨を報せんと夫婦互にかこち歎きける今度駿河江尻城の梅雪が守りけれども何ぞぞ此虚に乗じ勝頼を亡ぼし怨を晴さん物をも思ひ去年頃より内と徳川家へ便りて信長公へ隨がのんとする機あらひければ二月二十五日神君近臣長坂血鎗九郎信政を江尻の城中に遣ひされ勝頼年頃暴逆にして天意人望に叛き國中士民怨憎せざる者なし依て今度の織田殿の父子相計り我等も共に甲州に攻入て天誅を行ふ所之相州北條も天命も應じ加勢として駿武口より亂入す此大軍を以て押寄るに於て勝頼滅亡日をうぞへて待べし昔箕子が紂王の諸父たりしが殷を去て周に歸し商湯の子孫を斷滅に至らしめず梅雪も早く天命に應じ降参し武田の家名滅亡させざること祖先へ孝道にも叶ふべきなれ亂邦に居て祖胤の絶果なんと尤無智の至りあるべしと仰送らる梅雪さそふ水あらばと思ふ最中渡りに船を得し心地して悦ぶ事限りなく今夜駿州岩原地藏堂へ参り神君もひそかに渡御

有て御對面まします梅雪心知る家人に命じ甲府に置し入質を今夜の風雨に乗じ盜取て所領下山へ退りしむ(一説に長坂血鎗九郎江尻に有て問答あす事七日をへて廿五日梅雪降参すといふ)血鎗九郎敵城に入て降参の功を成就せし事を賞せられ遠州曾我の庄にて所領三ヶ村を賜はりしとぞ(家忠日記)同月廿七日に梅雪終に謀叛の色を顯ひし江尻を去て居城甲州下山へ引籠る諏訪上原の勝頼本陣にて梅雪異心にて居城へ引籠るよしを聞て大に驚き上下たいあきればて道邊軒典麻も皆別心のよしありと軍勢大方散はてたり今此所長陣のあふべうらずとてわづか千騎に不足の人数にて新府へ立歸て見るよ去年秋よりの造作いまだ半あられ此所も人数百とい籠られずいよせんぞと又々長坂跡部等と評議に日をぞ送りける

高遠城攻の事

織田信忠卿の信州飯嶋に在陣して人馬の勞を休め國政を沙汰しやがて高遠城へ押寄二月廿九日近所の僧を使とし城内へ中送られける勝頼が暴悪天地神明の悪みを蒙り一族道邊軒典麻梅雪悉く皆味方に降参し被官家人半に過て主をはなれ歸順す織田家の大軍信州諸城を

悉く攻取て今此城を取れども又徳川勢の駿州の城を攻落し市川口にむろひ北條勢も近日關東より攻入らんとせり故に勝頼諏訪にたまり兼新府に逃歸る勝頼滅亡近きにあり各に天命に叛たる勝頼又義をたつて孤城を守り大死せん事志慮淺きに似たり速に天意人望に應じ城を明渡し後樂を期せらるべきにやと理を盡し詞を懇懇に申送らる守將仁科五郎是を聞て城中諸士を集め此事いかにと評定す小山田備中進み他人の詞も待たずけるは凡勇士の道義を守り命をさしませ後世の名をこそおしむべけれ只今敵方よりの口上の全く城兵を欺き刃に血ぬらずして城を手に入んどの計策之其計策に陥て降参不義の汚名を蒙る事返らも口をしけれ只今此まに城を枕に討死するにまかじといふ五郎聞て莞爾と打笑み吾も左こそ思ひつれとて然らばよきに計らへ下知せり一座の面も各是よはげまされて屍を取場にさらすとも生て不義の名を取まじと義に勇むと見て小山田備中大に悦彼使僧を呼出し汝歸りて信忠へたしかに申せ當城の守將の勝頼の舍弟仁科五郎信盛相従ふ輩のかくや備中昌長諏訪庄右衛門茲房神林十兵衛定正渡邊金太夫照羽切九郎次郎を始として皆是義を守り節を致す者共之大嶋飯田の守將と同じからず敵を見て逃走り城を避て降参のすべからず

武力を以て攻らるべし詐謀に陥り不義の恥辱の決て蒙るべからず且又汝の釋氏の徒ながら敵の詐謀に組し徒に富饒那の舌頭を學んで人を不義に陥れんとす殆外道の眷屬として其僧の耳鼻切て是は汝を罪するにあらず信忠が耳鼻を切て僧を城外へ追出す僧の耳鼻切られて早立歸り涙あがらに城中の返答せば信忠卿の大に怒り然らば城内の者共皆殺にせよやとて三月朔日諸軍勢に嚴しく下知して小笠原信嶺を按内者とし信忠卿の具沼原に旗を進め森勝藏河尻與兵衛團平八を先手として城をかこむ軍勢の五方餘騎員鐘問の聲山河を動かし楯一面に突並べ其うげより鉄砲數百挺打掛たり城兵の兼て期したる事なれば弓砲雨霰の如く放じうけ寄手も若干討れけれども五方に餘る猛勢ゆへ勢透たりとも見へず死人の上を乗越へく息をもつらう攻立れば此城今乗取らるゝかと思ふ所に大手の木戸颯と開て小山田備中を真先とし諏訪庄右衛門渡邊金太夫春日河内今福又左衛門等一度討て出弓鉄砲を組合せ雲霞の如く群立たる寄手の中へ會釋もきく切て入跡よりついで羽切九郎次郎神林十兵衛突て出る甲州武士の信玄以來百餘千練機變懸引老練の者共あればかこめば破れぬかこむ勇とふるひ戦ひ寄手討るゝ者數知らずされども大軍凌ぎがたく城兵も或は

討死し或の深手負たれば大將五郎を始め小山田諏訪渡邊春日今福原神林等都て十八人大廣
 間に取籠り死物狂ひに切て廻る其中に年頃三十五六ある女房緋威の鎧着て長刀を水車のと
 くまひと諏訪庄右衛門が妻と名乗て敵七八人薙倒し其後奥に入て自害せり大廣間七間に十
 二間此豪傑十八人取籠て奮戦すれば信忠卿淺黄金襦の母袋をうけ大廣間の前の堀に登り其
 側の桐の木に取付て懸よ攻よと下知せられ身をもみ白旗をふりたて烈しく令を施さる仁科
 五郎小山田備中度々信忠卿に切てうゝる其刀疵の桐の梢に残りたり五郎信盛生年十九歳い
 まだ前髪にて色白く眼中すいしく比倫まれある美少年流石信玄の子ほどあり武勇も勝れた
 り小山田始十八人の死狂ひに織田の大軍もてあまし少しく猶豫して見へければ森勝藏人数
 を家根にわけやね板をまくり上より鉄砲すくめに攻る後々迄も森が一手の者共の高遠の家
 根藩士と人の呼し此故とぞ五郎信盛今に是迄ありと二間の大床にわがり腹うき切て自
 身に腹わたを抽出し金張付の襖障子に投付て指を拭ひし其跡久しくあゝに残りしとぞ器
 量といひ武藝といひわたら若木の花櫻此高遠の山嵐わへあく散せし情あき敵も味方もあし
 なべておしまぬ者のあうりけり大將自害せる上小山田備中始め十八人思ひくゝに自害す

るもあり討死するもあり庭にの残りし春の雪みな紅に染ぬとや其中に信忠卿の兒小性
 山口小辨佐々清藏一番鎧の高名す信忠卿の今日討取首二千五百級使者を立て信長卿のうた
 へ進らせられ悦勇んで軍をすゝめ諏訪上の原に着陣あれば安中七郎三郎春隆の高嶋の城
 を捨て降参し城の津田源三郎勝長に渡し馬場民部丞昌房の深志の城を織田源五郎長益に渡
 して逃去たり凡甲信に群居する武士共の皆信玄以来老練武功の勇士あれども今度君命を恥
 うしめず節義を守り死を致せし此高遠の將士ののみ大節に臨んで奪へうらず貞操のよく
 く得たなき者とい知られける疾風知動草亂世職忠臣と古人の詩意宜ある哉（柏崎物語閑
 語）

真田小山田建議付新府退去の事

甲斐が根の雪消つくす彌生の候世の春ながら勝頼が新府造營いまだとのはず大軍を引受
 防戦すべき様ぞあき長坂跡部の倭人原周章狼狽らに評定一決せず真田安房守昌幸父兄
 にもとらぬ智略の功者進出てやける上州吾妻の兵糧も澤山地利も險固其上箕輪に内藤小
 諸に典麻聲援をなせむたゝく防戦便りありと覺へいへば只今より吾妻へ御引取然るべし

と申勝頼聞て尤あり汝早く吾妻へ歸り其用意して待べしとあれば昌幸悦びて早く吾妻へ赴ける勝頼の長子太郎信勝當年十六歳年に似合ぬ利養にて懼り多くいへども今度新府を御開きあらん事某の然るべしとも存ぜずし武田家廿七代信玄公迄持傳へたる當國を捨て他國にうつり此上の恥辱を受んよりは此儘に敵を引付花よく合戦しかるはぬ時の御旗楯無を燒捨ていさぎよく御切腹いへしと申ければ勝頼はじめ一座の黷黙然として詞なし其時小山田兵衛信茂すゝみ出他國迄もいはず某が所領都留郡内岩殿の日本一の要害あり此所へ御引取有つて然るべし若岩殿に御籠城まします日本國の軍勢惣攻するとも少しも恐るべきにあらざと頼もしく申せば長坂跡部是を聞此儀尤然るべし眞田の二徳齋以來三代の御被官小山田は重代普代の御家人吾妻と郡内の地利又同日の論にあらざかたゞ小山田が諫に従はせ給ふこそ万全の上策あれとすゝむれば勝頼是も同意とさらば郡内へ赴くべしと小山田を不用意のため郡内へ先に歸されける勝頼爰を立出て三月三日先古府へ赴きしかども古府の大畧破却して住居すべき所もなければ一條右衛門太夫信龍が舊宅へまばらく足を休めたり一條も内へ異心を挾むといへどもそれの表にあらはさず相應ももてあしけるされども地下

人ども地焼してさうがしければこゝをも立て惠林寺に赴しに寺僧等防て入れざればせん方あく森村万福寺に足弱を殘し男女五百人計りを引具し鶴瀬の民家に七日滯留し小山田が迎に來るを待合せたり勝頼が妻の北條氏政の妹をてにうつくとさういふ迄もなし本性さとき事男にもこへたりしが去年師走古府より新府にうつりし時の玉の輿にうつりれ上臈中臈あまたの女房に圍繞されいりめしうりしを今年彌生に乘り習ひぬ馬に乗せられて立出る此所にありし程いたる春の夜の夢ばうりなる心地せられて

現どもおもほへりたきこの住家

あたに覺ぬる春の夜の夢

さす名残をしく宿の梢の隠るゝまでかへり見て

春霞立出れどもいく度か

ふりすてりたき三日月の影

又柏尾の大善寺に通夜して樂師如來の御前に願ども多く立てぬんじけるついでに

西を出東に行て後の世の

やどろしませとたのみ御佛

此柏尾の誼崎より東にあれば淨瑠璃世界を思ひよせけん心のうち思ひやられて哀れなれ

(柏崎物語甲鑑理慶尼筆記)

神君甲州御打入付信長公出軍の事

三月四日穴山梅雪降参の御禮として蒲原の御陣(蒲原上原と書たるもあり蒲原のと疑がひ
あし)に参上し御太刀(貞宗)御馬御鷹献上し神君へ拜謁す今の梅雪御味方に参りたる事か
くれなく聞ゆれば此邊の敵ども追を降参す五日御勢酒井忠次等三遠の輩悉く蒲原に押寄七
日興津にすゝみ八日酒井忠次石川敷正本多忠勝大須賀康高柳原康政等駿州井出の郷より河
内を歴て甲州西郡万座に至る味方此邊地理不案内なりし所に井出の郷人齋藤彌右衛門とい
ふ者御陣に参り大宮街道より御案内仕らんと御先を導しうへ神君甚御感有て彌右衛門長
く公役を御免を蒙る九日御旗本を万座(編年万澤とす)へ押詰給へば御先手の諸將富士の麓
を急ぎたり此所より穴山梅雪案内し御先手諸將の身延の麓八代郡文珠堂市川口より亂入す
此時甲府より勝頼新府を退くとて木曾義昌が人質を誅し其外謀反の者共の人質を燒殺し山

梨の方へ退去したりと注進す成瀬吉右衛門正一先年浪人して甲州に有し時武川の士ども陸
よりしうへ今度武川士どもを招き歸順せしめよと仰有ければ成瀬巨摩郡武川に行て見るよ
皆逸失て寂莫たり依て武川衆早く市川に來り我等を頼み徳川家の御家人となるべしと閩門
に張札して歸りたり神君の御仁徳敵國までも兼々聞き傳へ徳化を慕ふ故武川衆の酋長折井
市左衛門次昌米倉主計助忠繼兩人一番に参謁し故郷の者共をもすゝめて人質を参らせける
十一日信忠卿に此七日諏訪より古府へ着陣ありて一條が舊宅を本陣とし落残りたる武田が
一門舊臣どもを搜索し武田上總信政清水美作信氏朝比奈攝津秀重等を生捕猶瀧川左近將監
河尻與兵衛等をして勝頼の踪跡を尋ねしむ神君此時古府へ渡らせ給ひ穴山梅雪を召具せら
れ信忠卿に謁見させ又諏訪に赴き陣し給ふ信長公七万の大軍にて三月四日安土を首途し給
ひ(大成記四日柏崎五日)六日岐阜に着給ふ時呂久の磯にて信忠卿の使者高遠城落去の注進
し仁科五郎小山田備中等が首を参らせらる信長公大に信忠卿大功を感ぜられ使者にも祿物
うつけられ五郎が首の長柄川にて梟せらる信長公の雨のために滞留して八日岐阜を出馬の
りて犬山へ着陣せられたり(家忠日記柏崎物語甲鑑折井譜)

按るに原書に勝頼徳川勢市川口に入を聞て諏訪より新府へ歸り高遠落城を聞て古府より郡内へ走るとぞ徳川勢市川口に入し三月九日勝頼新府を出し三月朔日高遠落城を聞て同三日の事なれば徳川勢市川口に入しより七日以前あり況哉勝頼諏訪に在陣せし所穴山の逆意に恐れ新府引入し二月廿八日なり徳川勢の市川口入しより十一日以前之原書安穩すべてうくのとし

小山田兵衛逆意付入三勝頼天目山の事

勝頼の駒飼に在て小山田兵衛が迎に来るを今う今うと七日の間侍くらせども音信なし其間駒瀬より郡内の方に城戸際限なく作る是の何故と問ふに若郡内にうつらせ給へば即時に爰を防戦の小口とせんため兵衛がや付造作すること答ふいりにも不審なれば郡内へ使を立て兵衛早く迎に来れとやせば早く此方へ御出あるべしと返答す越あがら兵衛逆心の色を顯はし駒迎の東篠子といふ所に軍兵を配り置き勝頼來らば鉄炮を以て打すくめん様と其使やせば勝頼大に驚く處九日の夜兵衛が聲の武田左衛門太夫信光兵衛が姪の小山田八左衛門と高遠より迹歸りし小管五郎兵衛元成三人談合しひそり兵衛が人質を盗取て郡内へ立

退くとはや新造の小口より駒瀬柏尾の方へ鉄炮を打かくる駒迎近邊山伏地下人ども騒立足本より敵の起る様子を見て勝頼無二の寵臣長坂釣閑跡部大炊助秋山攝津も何方へか逃去しうば頼たる郎等わづらに四十三人と女房達の外のみなちりくに落行ぬ十日に此所も皆敵とされいりにもして上州の方へ赴んと思へども從兵もなければ都留の郡天目山の甲州隨一の嶮阻なり此所へ立籠らんと出立し歩卒あければ土屋惣藏昌恒秋山紀伊守光次兩人にて勝頼馬の口を取阿部加賀温井常陸兩人鎗を持つかくて駒瀬より笛吹川にろひ北に向ひ天目山の麓田野郷に着し先甘利甚五郎大熊新右衛門を山中へ遣はし籠るべき場所を見立しむこゝに武田普代の舊臣小宮山内膳友信の近來長坂跡部が讒言により勝頼が勘氣を蒙り盤居して居たりしが此所へ馳來り惣藏に對面し某君の御目鏡をかあへんとすれば君に叛くに似たり君に叛うとらんとすれば御眼力を違ふが如し所詮御眼力違に成る迄も推參して御供すべきなり御取成頼いどやせば惣藏も紀伊守も内膳が忠義を稱歎し勝頼も其忠節をぞ謝しにける内膳弟又七郎も御供せんとて來りしに是に母と妻子の事を頼みて無理に故郷へ歸し扱土屋に向ひ長坂跡部の何方にひそと問ければ昨日駒瀬にてはつじたりといふ秋山

攝津の問ふ是の十日以前にはついたりと答れ、内膳涙を流し扱も、勝頼公御運の末兼々出頭して寵恩にはこりたる人々の皆危を見て逃去たりかく迄も御目かねの違ひたる事哉と落涙すれば勝頼も恥入て内膳が忠節を感じ入られける

勝頼妻室貞烈付信勝義勇の事

岡邊の雉子野邊の雲雀妻を戀ひ子を思ふ心の同じたぐひにて有情の習ひぞやるせなき猛勇無雙の勝頼親子も夫婦の情より九迫の鳩を斷るべかりに打しほれ妻室を近くよせて吾身非崎よてともかくも成るべかりしを爰迄彼大惡無道人にたばうられ來りしも御身や子供達のいたのしきを思ふが故に此所よりの相摸路も程遠うらぬ、御身のいうにもして小田原へ落給へたどひ敵に逢ふとも女の事されば殺し參らする程の事いまじ又小田原へさへあつてあつて氏政も勝頼とこそ不快され御身の妹の事なればいかにつれなくもてなさるべき勝頼討れたりと聞給ひ、尼ども成りて後の世をとひ給へうしと有ければ妻女の涙をさしぬぐひわらひ相摸を出て此國に參り一度君に逢ひ參らせしより來ん世も同じ契りたがふまじと心に誓ひぬるをたどひ玉の興にのせて送らるゝとも故郷へ歸るべしと思ひもよらず三途の川も君

と共に越へて四手の山路も伴ひつれ一蓮の臺にも枕うりして同じ契りを結びめとこそ思ひつれ手に手をどつてもろともよばされつせと泣沈む勝頼いと涙にくれていまも宣ふ物哉夫にてこそ勝頼が眞の妻されと悦びつげき歎ひて悦び他目も思はずかたらししが勝頼さるにても御身故郷の兄弟たちへや置べき事あらばいふある風のためよりにもなうきて參らせられよとありしうら妻女ふたゝび首をあげさればのことに君長坂跡部が倭辨に迷ひ給ひ上杉が手立に乗て万兩の黄金をめて給ひ三郎景虎を捨殺にも給ひし事氏政のさらへ北條一家の人々ふりく憤りをふくみ今度も敵に組したり其君につれそふわらひが何面目にて故郷へ中事のいへきみづうらの御先へ三途川迄參りて待參らせしん君此上にもあさなき心を煩し給ふあどて十一日にもなりぬれば是迄付添來りし女房達廿三人の無理に暇やりて追返し舊く馴し後達計りを残し置今の最後も近付けられ常々讀誦馴し法華經召て五の巻を聲もすしく讀終り

へだてなき法をぞたのむ身の田野の

あしたの露と消はつるとも



勝頼の妻室
貞烈とて夫
に先ち天目山
自害すもの
圖



みづうら守り刀引ぬき口に含みてうつむき伏せバ勝頼急ぎ立より介錯し死骸に抱きつき志
 べし物もいひす伏し沈むはや敵の善光寺邊まで寄來るとて春風さそふ貝鐘の響に驚き残り
 留りし古後達乳母をはじめ五十人あまり差ぢぢへく自害せしを小原丹後介錯したる無悲
 さつたどへていん様もあし勝頼の一子太郎信勝を招き武田の家名今日に限るべうらず汝
 の今より御旗楯無を持ってひそくに此山路を越へ武藏に出て奥州の方へ身をひそめ時節を待
 て再び義兵を發し家名再興の功をばげますべしといふを信勝この父上の御説ども覺へずい
 信勝不肖の身を以て十年以前より祖父信玄公家督に備りて有あがら此危急にのぞみ社稷の
 爲よ死する事あたらずわるびれて逃隠れもしも敵の雜兵等の手に生捕どもあらんより恥の
 上の恥をかさね信玄公の御名迄も汚すべし先日新府にてもやたるもこの事にい君の前の
 北方の信長の姪を養ひて君に參らせ某を生給ひし後はうきあり給ひ只今の北方北條家
 よりおひしたりされバ信長とても他人にあらず信長の思ひれん所も恥うしければうたぐ
 御説に従ふべうらずと思ひ切たるこのはり盛興ある初花の色も香もあるけあげさに勝頼
 心取直しさらバ軍の用意せよと主従甲冑身をうため敵のよするを待居たり(甲鑑理慶老筆

記)

勝頼信勝主従討死の事

澗川左近將監一益河尻與兵衛鎮吉并信雄卿の陣代津川玄蕃義冬等の信忠卿の下知を請て勝
 頼の行衛を爰うしこと探索しけるに田野の觀音堂の方へ落られたりと注進する者あれば大
 勢の人数を具し三月十一日急ぎ天目山をめがけて巳刻より田野へ押寄ける是より先き
 勝頼の天目山に立籠らんとて先山中の様子見せに遣ひしたる甘利甚五郎大熊新右衛門は
 や敵と成り天目山道場關山派山伏とあまじく小山田兵衛が勢と一所によせ來る元來武田が
 家人にて今の浪人したる辻彌兵衛を將として辻村近郷の一揆五千八計り是の後へ廻り矢炮
 烈しく打うけたり勝頼父子始四十四人の勇士等心の矢猛にはやれども籠中の鳥網代の魚も
 れて出づべき様ぞなきされども猛勇無双の勝頼少しも屈せず白手拭の鉢巻も大太刀ぬき放
 し時こそ來れど打出たを左に土屋惣藏昌恒元來精兵の射手あれバ弓を以て進みしに敵の雲
 霞の如く立並びたる中へさし話引詰射る程に忽に十七騎射落してあだ矢のさらになかりけ
 り右の太郎信勝十六歳十文字の鎧うらうくと打ふつて込入敵を突伏突倒し後にの鎧を投げ

捨太刀にて縦横に敵を退なびけたる其働流石に武田の大將容顏の美麗なり其舉動の勇猛なり年に似合ぬ健氣さ敵も味方もおしなべて感ぜぬ者こそなかりけれ中央に四郎勝頼鬼神を欺く猛勇今日を最期と獅を奮迅の怒りをあし人馬の嫌もさく巻り立追まくり弓手に切捨妻手に打拂ひかいくいつての投のけ引寄ての刺殺し千練万變電光稲妻さそくの早業真先に進み大將を討留んどかゝりたる瀧川勢此猛勢にたまりかね會釋しかねて散亂す瀧川河尻津川等の我く數千の人数にてたどひ敵の鬼神なりとも討得ずして何の面目に再び信忠卿の見參に入べきや而も命を捨よと下知し咄と聲を上てむらがり進む魁兵瀧川儀左衛門(二説稻生)土屋惣藏がために射殺さる惣藏の矢種も盡果て太刀ぬらんとする所へ敵兵六人惣藏をめぐけ突てりゝる惣藏のや討死するうと見へけるに勝頼の惣藏を討せじと一文字に取て返し敵六人の鎗を手にてかきぐり捨六人ながら同じ枕に切伏たりかゝる所へ敵の大勢群がり來り左右より胸の下へ鎗二筋突込み又一人の喉下へ突込めばさしも猛勇の勝頼も今朝よりの戦に心神筋骨疲れたる上に難所の深手たじろぐ所を大勢おしより押伏て瀧川が家人伊藤伊右衛門永光其まるところをぞ揚にける其ひまに瀧川儀太夫の土屋惣藏を討取たり太

郎信勝勝頼が討死を見て今の此世に思ひ置事なしと群がる敵の中へかけ入て三度迄敵を追拂ひ思ふまゝ戦て討死せしをしまさざる者もなし阿部加賀の初度の戦に川端にて討死し其外秋山紀伊同民部同圓主座同空助同源藏(實の土屋惣藏第十七歳)同惣九郎小山田平左衛門同掃部助同彌助同も兒(十六歳)土屋源藏金丸辨六(實の土屋惣藏兄)温井常陸小宮山内膳河村下總小原丹後同下總岩下惣六小原下野多田久藏跡部尾張安西伊賀鷹匠齋藤作藏山居源藏歩行士の山下空助美奈井小助貫名新藏其外麟兵和尙をはじめ都合四十四人各奮戦し敵若干討取ておなじ枕に討死す嗚呼今日いうなる日ぞや天正十年彌生十一日四百余年相續したる武田の正統勝頼三十七歳信勝十六歳田野の草葉の夕露と消てはうあくなりぬるの哀れなりし事ありけり

按るに本文の彼家に傳へたる甲鑑の説によりて記したる之久久保が物語に勝頼夫婦田野の河原の草村に數草敷て休む所へ敵はや押寄たり跡部の此時逃去んとするを土屋惣藏射殺すと有り柏崎物語に勝頼具足櫃に腰掛居られたり瀧川儀太夫附込み土屋惣藏を討て取伊藤伊右衛門永光横合より勝頼を討取と見へたり又閑談に伊藤伊右衛門が咄と

て津田幸庵が物語せし近年の書物を見るに勝頼功腹と書たるもあり又事々敷戦て討死し給ふよふに書たるもあれども我其頃の小平次といひ瀧川方に居て伊右衛門と傍輩なればまのあたり見たるに左様にていなし勝頼の鎧の襜を腰を掛け太刀にて防戦し給ふといへ共飢疲給ひ何の働もなく伊右衛門討取たりと板倉周防守宅にて物語せしと見へたり是等實事と思へる、故こゝに附して一覽に備ふ

武田餘類誅戮付徳川家仁政の事

三月十二日信忠卿の武田勝頼父子其の首共賞檢せられ瀧川左近將監一益が大功を賞し給ひ一益に吉光の脇差并一の日影と名附し名馬を金子五百兩に感狀添て賜ひ今度討取所の首共を關加平次桑原助六郎にもたせ信長公の本陣に參せらる(柏崎物語の説に瀧川一益の手の者共田野にて勝頼父子を始め首共討取て甲府へ立歸らんとする時に又勝頼の信濃に落ちたりといふものありければ其首共溝堀に捨ていそぎ信濃の方へ向ひ行ひ此方までいそぎと云又取て返し尋るに郷人御屋形様御志るしわれにとす依て其首共ひろひ取て信忠に献す信忠其首共をならべあいて田原に參りし軍兵どもを呼寄られしに伊藤伊右衛門某が首の勝頼

が首と云其證據のど有ければ具足櫃に腰りける者の首を取て馬に付參りしによりすれたる跡有とす其通りに極るとあり甲鑑の説にも初ハ勝頼が首見へず小原丹後の女房達介錯し其後毛氈をしき腹を切りければ其首切て勝頼の志るしとすて公郷にすへおきしを關甚兵衛もと武田の足輕大將三年前に織田殿へ内通す此者召出し見せられしが此者よく見定め丹後が首を捨勝頼が首を公郷にのせしとあり又津田幸庵が物語を閑語に志るせしに勝頼の首溝堀に捨有りし所地下人ども其溝にて鞋をぬぎ頭巾をぬぎ頭を地につけて一禮と過る故其子細を尋れば此堀の中に屋形様御父子の御首の故と泣き答ふとも見へたり此等や實事となるべけん(十三日神君の諏訪より甲州市川へ歸らせ給ふ信長公の信州禰羽根に着陣十四日平谷をへて波合に着せらる此所へ信忠卿の使者到着し勝頼父子の首を献せらる信忠卿岐阜より出軍わづらに三十余日の間に甲信二州平均し勁敵武田父子の首討取事今古未曾有の大勳勞比倫希なる盛功なりと感悅せられ其使者に黄金駿馬を下さる又信忠卿の方へ別に福富平左衛門を使とし荒波といへる名劔板屋鹿毛といふ駿馬并金千兩暑衣百領進せらる扱信長公の勝頼が首を賞檢せらるゝとて汝が父信玄毎度我等に難題を云うけこまらせたり首に

成て上落せよ我も跡よりあひ付行へしと宣ひけるが終に本能寺の先徴となりけりくで
 信長公實檢濟て其首共を徳川家市川の御陣へ遣はさる神君ハ勝頼の首を三方に載させ給ひ
 上段に直し御慰撫に御覽有て今日頃加様の様子にて御對面あらんとお思ひもよらず誠に若
 氣にて代々の國を失はれ残念の事と御愁傷の御様子を開傳へ甲州人共いづれも此君なら
 すのと早く思ひつきしと二十五日信長公伊奈郡飯田に着陣せられ勝頼父子の首をこゝに梟
 られ十六日勝頼父子仁科五郎信盛典麻信豊等が首を長谷川宗仁に命じ京都に登せ獄門に梟
 しむこの日河尻與兵衛ハ肥前守と改めしめらる十七日信長公飯島よ着せられ十九日上諏訪
 法養寺に陣をすゝめられはや甲信に敵はあし大勢用なしとて諸將廿二人近習馬廻りの諸士
 弓鉄炮の者の外ハ其輩皆本國へ歸され又織田源吾長益森勝藏長一上州山吹城主小幡上總介
 信真の方へ遣はし降参をすゝむれば小幡兄弟忽ち降参す是を聞て上州諸城主等人質を出し
 味方に参る是より先に甲信の輩舊主を背きし不義の徒ハ一々召捕誅すべしとて信玄が弟信
 綱入道道遙軒をハ森勝藏が従士各務某に立石にて誅しむ典麻信豊ハ下曾根覺雲軒欺き信州
 小室の城にて誅し其首先に勝頼父子が首と同じく京に登せられ（此覺雲軒ハ下曾根刑部信

照幸ハ）一條右衛門太夫信龍ハ市川にて誅し長坂釣閑父子ハ一條が舊宅にて誅し武田上野
 介信龍同右衛門太夫信光勝頼が弟葛山十郎義久并小山田兵衛信茂同八左衛門昌時小菅五郎
 兵衛元成朝比奈兵衛信置は新善光寺にて誅し諏訪越中頼豊小山田出羽秋山攝津守同大記大
 熊備前朝秀清野美作今福筑前山縣源四郎等ハ伊奈にて誅せられ跡部大炊介勝資ハ諏訪にて
 誅せられ諏訪刑部同采女ハ三州田嶺長澤にてうたれ飯狭右衛門先年濃州明智城にて叛逆し
 坂井越中守が一族を討取て武田へ降参せしを以越中守に命じ誅せしむ坂源五郎ハ川中島に
 て殺さる小笠原興八郎長善先年高天神の城を明て勝頼に降参し今度又北條を頼み小田原へ
 立退しを信長公より仰遣はされ小田原北條方にて誅し首をハ濱松へ奉る先に三州田嶺を領
 せし菅沼刑部貞吉が子新三郎定忠伊豆滿直先に徳川家を叛き甲州へ降参し今度も又降参し
 て河尻が方へ來りしが神君其反覆常なき事を信長公へ仰遣はされ誅せらる菅沼新九郎正貞
 ハ一旦甲州へ降参しけれど徳川家へ降参せんと計り其事發覺して小諸の獄屋に繋ぐれ先に
 迷價して死したる事聞召神君甚おこしませ給ふ又信長公甲州士の先年より内通せし者ハゆる
 され今度俄に楯下にて降参せし者ハ一々誅せしむたとひ叛逆せし者ならずとも諸將等武田

官家人を召抱へりらずと厳しく命ぜらる神君の武田が武功の舊臣武勇徒生残りたる者
 共皆餓死に及べんとをわかれませ給ひ依田忠右衛門主従の遠州二股の奥小川村に忍ばせ三
 枝土佐の駿河東雲寺といふ藤枝邊の寺に隠れ住しめ武川の諸士等の遠州桐山邊に盤居せし
 め岡部次郎右衛門正綱渡邊因獄助盛等其外米倉折井を始め甲信に名を得たる者共のひそか
 に駿遠の間に忍び住居せしめ内々俸米をわたへ扶助し給ふ又勝頼父子をはじめ田野の芝原
 に死骸弄を亂して鳥獸の食と成りて有しを神君いかにも名將勇士の骸捨置べきにあらずと
 仰られ信玄菩提所惠林寺迄の織田家の怒り恐れ其儘捨おきしを田野より四里隔たりし中山
 洞家僧録廣嚴院に仰付られ勝頼父子并同時討死の骸ども女房共の屍を葬埋せしめ後に此
 所に一寺を建立し給ひ天童山景德院と號し寺領七十五石を寄せ給ひ勝頼夫婦一門の徒が跡
 戀るよ吊ひ給ふ是を見聞する遠國近郷おしなへて御仁徳を感仰せざる者なし(基業編年柏
 崎物語)

正校 三河後風土記卷第十七終

正校 三河後風土記卷第十八

信長公諸將恩賞の事

天正十年三月十九日(大成記編年)木曾左馬頭義昌信州諏訪の織田家本陣へ参向し信長公へ
 拜謁し國行の太刀馬二疋金二百兩を献す信長公の木曾始より味方に参り毎度大敵を追拂ひ
 軍功尤少からずと稱美し給ひ木曾二郡の本領安堵の上は新恩として筑麻安曇兩郡に金千
 兩名劍をそへて賜ふ同廿一日穴山梅雪の神君御媒にて参謁し信長公へ國久の太刀并金三
 百兩をさへぐ穴山も早く内通し忠勤せしめて甲州下山万澤の舊領を安堵し巨摩一郡并國光
 の脇差を賜はり徳川家に附屬せらる小笠原掃部助信頼も國久の太刀馬を献じ本領安堵の仰
 を蒙る同廿二日北條氏政も端山大膳亮師治(一本近貞)を使者とし甲信平均の大功を賀し信
 長公へ太刀一振馬一疋金千兩江川酒十樽白鳥十隻漆桶廿荷進らせ其後もまた精米二千苞進
 らせたり此度織田家の猛勢破竹のごとくあるを恐れ佞媚をもとめ北條氏政頻りに進從する
 あるべし廿三日湘川左近將監一益今度勝頼父子の首を得るのみあらず軍功拔群さればとて
 關東惣管領を命じ陸奥出羽まで賞罰征討をさたし若決し難き事わらむに徳川殿の御旨

を請てはうらふべしとて伊勢の本領五郡にそへて信州佐久小縣二郡をたまひ上州鹿橋の城
 は居住すべしと命ぜられ海老鹿毛といふ駿馬に脇さしをそへて下さる諸人羨むる者なし
 其後菅屋九右衛門に仰せて深志の城に納置たる糧米を諸軍士に分ちあたへらる上州嶺城主
 小幡上總介信眞甲府に來り信忠卿に拜領し貞宗の脇差金五百兩献し本領安堵し左文字の脇
 差を給ひる同國鷹巢の城主小幡參河守信尙も參謁し本領をたまふすべて上野の國士北條武
 藏の深谷本庄松山等の城主信州の眞田木曾小笠原等皆瀧川か所屬とせらる此一盆か權勢肩
 をならふ者なく威光關東にかいやけり又信長公福富平左衛門を使とし信忠卿のかたへ脇差
 を參らせこれの信長か父備後守殿信長へ家督ゆづられたる日給ひりし所之來年の信長天下
 を興奪すべきその證據の爲參らせ置との事され信忠卿大に悦られやがて諏訪へ參向あり
 て父子對面し給ふ信長公今度信忠卿大功比倫さしとて褒美かざりあしかくて父子はかりた
 まひ徳川殿駿州諸城速に攻拔給ひ軍功尤かるべからずとて神君に駿州一圓進せらる
 神君厚く謝せられ其上にて我等今川家と舊好忘るべきにわらず駿州の今川か舊領なれば半
 國を分て氏眞に安堵仕らせたと仰らる信長更に承引なく何の用にも立ざる氏眞へくれら

れは程用なくの信長所領すべしとていかられける故に駿州一圓に神君の御領とし給ふ曾根
 下野守正清の興國寺の城にありしかは其城に川の東西を添て一萬貫の地を授けらる曾根の
 先年より織田家へ内通したるによりてなり河尻肥前守鎮吉今度先鋒軍功を勵しかば甲州一
 圓授けらる但し巨摩郡の穴山梅雪所領に定め替地より信州諏訪を河尻へたまふまた信州
 更科高井水内植科四郡十方石の森勝藏長一に下され濃洲岩村五万石の關丸長定に下さる是
 森三右衛門可成が先年江州宇佐山にて討死の功に報らるゝ所とぞ聞へしまた信州伊奈八万
 石の毛利河内守秀頼にわたへて飯田高遠の兩城主とせらるこれの足利家管領職斯波武衛が
 庶流之同國佐久郡小諸五万石の道家彦八郎正榮にわたへ濃州與奈田嶋金山を團平八景春に
 わたへらる斯く各功の淺深により恩賞行のれければ各大に悦び恩謝してぞ退きける四月二
 日に信忠卿を諏訪法養寺に留めありれ信長公の翌三日甲州古府新府等の舊跡共を巡覽し
 たまふ丹羽五郎左衛門長秀堀久太郎秀政多賀新左衛門等の沈痾を治療せむとて草津の温泉
 に赴きける(編年甲鑑)

惠林寺焼亡の事

甲州惠林寺の武田代の香華院あるに國中に於て尤壯麗を極めたり此寺にさきに足利將軍
 義昭卿より信長追討の事を御頼の使に参りたる大和淡路守并三井寺の上福院并江北の佐々
 木次郎整居す（柏崎物語に佐々木承禎とあり編年にもあまじく承禎の此時甲州にて武田を
 頼み整居し次郎と字せしとあり又基業の左衛門尉義定とて承禎が二男なり信長はじめ都
 に打て登らるゝ時承禎を味方に招給ふに承禎其招に隨ひざりし事の義定が諫めし故なれば
 信長甚此義貞を怒らる仍て義定武田を頼み甲州に整居してありしが不慮に今度の一亂によ
 り此寺に逃籠りしあり）河尻肥前守信忠卿の仰をうけ早々次郎を諏訪の陣に参らすべしと
 の事之にさる者寺内に隠し置事と陳謝し其間に密に案内者をもへて間道より落しや
 りたり信忠卿大にいうられ惠林寺の代武田が香華院にてありながら勝頼父子をはじめ一
 門の男女屍野外に捨置て鳥獸の餌とあるを見ながらこれを葬追福せむ志もなく徳川殿
 といへる大慈大悲の仁者敵あがらも情をかけて其屍を取納て吊懸に行はる惠林寺夫を
 恥かし共おもひて結句由緒もなき浪人を隠し置此方より國政のため召所の命を拒み密にお
 としやる條全く釋徒の所行にあらず浪人共の財貨を貪るためとの風説疑ふべからず寺僧陳

謝の詞あらんに早々本陣へ参向すべしとすつかひしける寺僧等の大に迷惑しけれ共信長
 父子怒らるゝ共僧法師の事あればさりととも辛き沙汰には及ばるまじと油断して休刻延引す
 信忠卿ますます憤られ寺僧共罪を恐れ早速参陣して陳謝もせず慢りに國法を蔑如し沐日
 をおくる條尤以て曲事たりこれを捨置時の國政更に立べからず不日は惠林寺を破却して
 以後の懲しめとあすべしと令せらる津田九郎次郎信治長谷川與十郎關小十郎脇原右衛門赤
 座七郎右衛門仰を蒙り惠林寺に馳向ひ十重廿重に取巻て門の聲をあげゝるに油断したる寺
 僧青侍共俄に魂を消し仰天す寄手等寺内を取かこみたればもれて出へきやうもあしと
 れども若や命の助かる事もやと山門の櫻に登り梯を引て音もせず隠れ居たり寄手の寺内へ
 込入て搜索すれ共人はあし但山門の梯引たるを怪しみ樓下に燒草をつみかさね一鉢に燒立
 ければ四月三日折ふし大魔風吹立て黒焼天を覆ひ火焰寺中にまどひ忽に山門もへ上るは
 じめの程の息を詰聲を吞て隠れ居たる者共追々煙に咽ひ炎に身を焦し苦しさに聲を揚て泣
 叫ぶありさまの焦熱地獄の呵責にあふ罪人にも殊あらず其中にも當住持快川智勝國師の禪
 座合掌し自然に遷化したまた寶泉寺の雪蔭東光寺の藍田長禪寺の高山を始め長老六人單寮十

二人平僧見童鳴喰侍共迄都合八十四人あまりの苦熱に堪兼て山門を飛下りたる者も頭を打碎き腰をうち損じ手足を毀傷すたまく無難に逃出る者の軍兵共切殺す目もあてられざる形勢也今度織田信忠卿惠林寺を火攻にせられしと僧徒等佐々木次郎を隠し置命令も應せざる故に其罪を糾されし其理なきにあらざりしととも罪なき凡僧鳴食迄大勢を一所に燒殺されし事暴政にあらざりしひかたし人を殺すことを嗜の禁もの天下を一にせむといふ格言によれば横逆の暴政行すへいかいあらんと傾けず者も數多ありしとなり(甲鑑の説にの武田信玄先年我居城岐阜の際迄焼れたるか口惜しき故墓所迄焼と信長仰ありて惠林寺快川和尚智勝國師を始高山大綱陸庵其外坊主よき出家五十ばかり燒殺さるゝ家康の甲州先方衆に仰付られ田野に勝頼御墓寺を立らるゝ家康大悲大慈よてかくのとし信玄の菩提所の兼てより惠林寺なれり此寺の寺領前々の如く下され田野寺にも田野郷皆付よとありて下さるゝとみゆ)

川中嶋一撥付瀧川一益關東總督の事

森勝藏長一の今度の軍功により信州川中嶋四郡を賜はり海津の城へ入部し稻葉彦六郎貞通

水内郡飯山に在城せし處四月五日川中嶋の郷人共四五千同意して一揆を催し飯山城を取かこみ短兵急に責寄たり信忠卿の諏訪の本陣に此旨注進すれり圍二十八景春稻葉勘右衛門國枝頼母等に命せられ飯山の加勢としてつうりさる一揆共是を待むりへて長沼口にて合戦す森勝藏のこれを聞て手勢を引具し海津城より討て出一揆の横合より鎗を入る一揆のほとより鳥合の衆教令正しうらざれば一戦にも及ばず敗走して三千人計討とらる殘兵山中へ逃入て大藏の古城に捕籠る勝藏息繼すなどおしよせて忽に攻落し一揆の酋長長芋川を始め數千人を生捕て本陣に獻じければ信長公父子大に感ぜられ感狀をたまひりけるま九關東の政令十五條を定め瀧川左近將監一益に授けらるること陸奥に伊達左京大夫輝宗其子藤次郎政宗出羽に最上出羽守義光關東八州の北條左京大夫氏政ありといへ共當時信長公威勢飛龍昇天のとくなればちして皆下知をぞくりしめらるるまして上州の國士小幡上總介信真内藤大和守秋宣和田石見守義常由良信濃守國繁深谷勝兵衛忠季成田下總守長氏安中左近廣盛上野上野介入道安樂齋長尾但馬守景貞高山遠江守貞成木部宮内少輔貞朝長尾新五郎景繁真田安房守昌幸等の瀧川が寄騎に付く三年の内には此輩に先鋒とせ北條を征伐あるべ

しど計らひるよしおれ北條氏政大に恐れ度し使者を織田殿へ参らせ鷹馬等を奉り其心を執にける(編年甲鑑)

信長公富士御覽付奥平寵恩の事

右大臣信長公甲州の國勢あらまし沙汰せられ歸路に駿州にかゝり富士一覽し給ふべしと
のことなりさて徳川家御領内通行の事あれば神君兼て其用意ありて山中道大石を退け
大木を切拂路橋を新造し給ひ旅館茶亭を設け一般の備等懇に仰付られたり今度甲州征伐
には信長公近衛相國前久公同道ありしかば相國も幸の事なり富士一覽ありたき旨所望の
所信長公我さへ徳川殿の世話になれば御同伴はかなふべからずとのにて相國本意なく東
山道より歸路したまふ(甲鑑に近衛殿の柏坂の麓にてしるも奏者を以つて駿河通を參るべ
きかと仰られしらへば信長馬にて近衛のこれより直に木曾路をのぼりませとやさるゝとし
るしたり信長の粗暴さも有けん)四月十日信長公甲斐の古府を打立給ひ甲駿の境八代郡姥
口といふ所より富士の根方に分入らる十一日阿難坂迦葉坂を越本巢にいたられ十二日上野
か原井出の郷邊にて富士山を御覽し其むかし鎌倉右大將家持鞍の古跡をたづね白糸の瀧を

とひ浮島か原を眺望し給ひ大宮の旅館に入給ふ神君この所へ渡らせられ御對顔ありしかば
信長公も悦きめあらず此程皆と橋梁舎館以下懇にもてなし給ふ御心つかひを謝し給
ひ一文字の刀并吉光の脇差龍馬三匹進らせらる十三日に信長公足高山を越富士川を渡り
吹上六本松和歌宮等一覽あり興國寺三枚橋の城を巡見せられ清見が關田子の浦三保の松原
の絶景を愛賞せられ今夜江尻に御泊り十四日安部川を渡り田中の城に入らる大河には悉
く舟船を以て橋をかけられしかば信長公いよく感賞斜あらず十五日には大井川を越て遠
州掛川にやどり給ひ十六日天龍川を越給ひ船橋の奉行小栗仁右衛門忠吉淺井六之助道忠に
黄金を授けられ今夜濱松城に入給へば神君御待請ありて善美を盡して御禮應尤御懇なり
信長公大に感悦せられ徳川殿多年御辛勞ありし故今度勤敵に打勝加様に打治めたる事全く
徳川殿の武功による所之依之小國を一國進上いたしし所々様御奔走謝するに詞あし御蔭
にて富士一覽恭なきよし謝詞殷勤に述べられその上酒井左衛門尉忠次を呼出し三州吉良へ
積置たる粮米八千石の東國征伐の手當之今よりかく治りたれば兵粮も用なし菅谷九右衛門
よりうけとり其粮米の徳川殿御家人へ下さるべしとの事にてやがて菅谷より忠次に引わた

す翌十七日信長濱松御立ありて今切の渡をこさるゝとて舟奉行渡邊彌一郎が働を賞し黄金を授けられ今夜の酒井忠次が三州吉田の城に止宿し給ふ忠次又心をつくと響應し参らせたり依て信長公より眞光の刀黄金二百兩忠次に賜ふ十八日池鯉鮒にいたりたもふ蒲原より此所まで徳川家より舍館茶亭所に設て一献を進め給ふ鳴海より尾州領なれば織田家の一門家人皆出迎て凱旋を賀し廿一日江州安土へ歸城せらるゝに奥平九郎信昌の誠武門の規模ある勇士にて先に長篠籠城の時にも僅の勢にて多勢の爲よかこまれながら敵を討事數多らず後詰を待得て大功を立し事天下に双なき名譽と信長公感じ仰せられき今度もまた信長公歸陣の時參州本巢迄若給ふと聞て信昌御迎に出しを信長公近くめして此度勝頼を誅伐早速に其功を遂ぬると汝が先年長篠にて久しく苦勞し其時勝頼が股肱と頼む者共多く討取りたるが故なりと大に褒詞を加へ給ひしとあり(譜牒餘録藩譜の説みな同じ原書又信昌伊奈口に向ひ信忠の加勢し軍功有て伊奈郡を給ふとするは大なる誤之信昌が伊奈口に働て軍功ありしにより養原郡を下されし此度信長父子薨後神君甲州御討入のときなり)又信昌先に信長公御媒にて神君の第一の姫君を迎へ参らせ妻とす此御腹に四男一

女を擧ぐ第一男は九八郎家昌後に叙爵して大膳太夫と稱し後に野州宇都宮の城給り十萬石を領す(此家今の奥平なり)二男家治(幼名の詳ならず)神君養はせ給ひて松平右京大夫と稱し上州長根にて所領を給ひけるが十四歳にて早世せらるる三男源七郎忠政とは菅沼小次郎定利の家つがせ上州吉井を領しけるかこれも御家號給り松平攝津守と稱し實父信昌か隠居料野州加納を下され十萬石を領す(其子飛騨守忠隆早世して此家は絶)四男鶴松丸はじめは清匡後に忠明とあらため稱すこれも神君御養子の義にて松平下總守と稱し從四位下侍從に叙任老禁色綱代興をゆるされ播州姫路の城主となりて十八萬石領す(今松平下總守この家なり)女子は大久保加賀守忠常か妻たり(柏崎物語譜牒餘録)

三七信孝四國拜領附長會我部の事

其比土佐に長會我部宮内少輔元親といふ者あり其先祖を尋るに其いにしへ百濟國より聘使として本朝へ参りたる長宗我といふもの本朝に留り秦姓を給はりしか其子孫世々信州に住して其後胤元勝といへる者にいたり土州へち渡りて長岡郡敷江郡野田吉原四ヶ所を切取りて夫より後は世々土佐の住人とはありぬ此國足利殿の時には細川家の守護たりしが細川

も次第に衰微せしより命令せらるるに行われず土着の國人等心の儘に強は弱をまびやかし衆は寡を侵し亂妨狼籍一日としてあだやあきらまず文明二年のころは京都も大に亂れしうは王朝の貴戚縮紳も都の中を住うかれ國々の便りを求めてさまよひ給ふ一條關白教房公の南都へさけたまひ長子依爲卿は兵庫の方へ落給ひ次男房家卿は土佐の幡多へさすらへたまふ京都やうく擾亂しつまり御父の殿下都へかへり給ひし後慈照院義政將軍謀り給ひ房家卿をば土佐の國司に宣下せられ正二位大納言に叙任せらる其上土州の武士共は房家卿の下知に従ふべき旨將軍御教書をあし下さる然る上り本山安喜大平山田津野吉良長曾我部等の國人共房家卿を國司と仰ぎ幡多の郡中村にすへ參らせ土佐御所とわがめ悉く其命令に従ひけるこゝに永正四年京都の管領細川右馬頭政元横死して京都また大に亂れたり其頃長曾我部宮内少輔元秀といひしは管領政元の寵を蒙りしうばつねく國中に權威をふるひ本山等の國人等を輕蔑しければ國人ども常々嫉み憤りを含み年月を経しに政元横死を聞て大に悦び國人謀し合せて元秀を討亡す元秀討死に臨み千王丸とて六才に成し小兒に近藤といふ男一人添て國司の御所に參らせ一向に頼み置奉る國司房家卿長曾我部が孤を憐み膝下に養育

せられ十五の時元服させて宮内少輔元國(一説國親)となのらせらる其上に本山安喜大平吉良等の國人共へも種々道理を諭し給ひ長曾我部が舊領三千貫の地を元國に返し下されて家再興をぞなむにける今の元親は此元國の子あれば二條殿の御恩は山よりも高く海よりも深しといづれの時にり忘るべきこかるに元親幼きより大膽不敵のこたう者故人とあるに従ひ武畧を勵し軍謀を巧にして本山安喜をばじめ國中の者共已れに従ひざる討亡じまたがふ者をば親縁を結び被官とあし今り國司の外皆旗下に屬しけり其頃前國司房家卿は天文八年逝去せられ其子中納言房冬卿も同十四年うせられ孫の中將房基卿も同十八年うせらる依て今は國司を相續の人なければ京の二條家左大臣房通公(實は房家次男にて京の二條家を相續ありし)の三男中將兼定卿を土州へ下し國司家を相續せらる此時元親は猛威に乘じ國司家を傾て其身土州一圓に平均して押領せむと謀をめぐらし國司家の老臣をたばかり兼定卿荒淫にて國家を治めたまはん器にあらずとて同國大津の城にち籠其子内政卿を己れが舞君となし己れ國務を統制するとしてつめに内政卿を伊豫の國へ遣やり鳩毒をもて弑しちのれが女の腹に設けたる若君を久禮田といふものへ預けて押籠おもふまふに土州一